京都市内遺跡発掘調査報告

平成21年度

2010年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

例　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成21年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　平安宮内裏跡・聚楽遺跡１（文化財保護課番号　08K560・08K561）
京都市上京区中務町490-74
2009年１月27日～２月26日　　約87㎡　　布川豊治・辻　裕司

Ⅱ　平安宮内裏跡・聚楽遺跡２（文化財保護課番号　09K114）
京都市上京区下立売通千本東入中務町486番63
2009年６月22日～７月３日　　35.5㎡　　柏田有香

Ⅲ　平安宮左兵衛府・侍従所跡（文化財保護課番号　08K495）
京都市上京区下立売通日暮西入中村町543・546
2009年５月20日～６月26日　　113㎡　　平尾政幸

Ⅳ　中臣遺跡85次調査（文化財保護課番号　08N452）
京都市山科区勧修寺東金ヶ崎町96番地
2009年１月26日～３月13日　　136㎡　　柏田有香

Ⅴ　革嶋館跡（文化財保護課番号　09S318）
京都市西京区川島玉頭町40-15
2009年10月５日～10月30日　　250㎡　　加納敬二

Ⅵ　寺戸大塚古墳
京都市西京区大枝南福西町２丁目
2009年２月３日～３月27日　　60㎡　　高橋　潔・吉崎　伸

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。
Ⅰ　布川豊治、Ⅱ・Ⅳ　柏田有香、Ⅲ　平尾政幸、Ⅴ　加納敬二、Ⅵ　高橋　潔

4　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

5　本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

6　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」山田」「桂」「中山」「川島」「勧修寺」を調整したものである。

7　上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

本 文 目 次

Ⅰ 平安宮内裏跡・聚楽遺跡１

1．調査経過 …… 1
（1）調査経過 …… 1
（2）位置と環境 …… 3
2．遺　構 …… 4
（1）基本層序 …… 4
（2）遺構 …… 4
3．遺　物 …… 9
（1）土器類 …… 9
（2）瓦類 …… 11
（3）石製品 …… 12
4．ま と め …… 13

Ⅱ 平安宮内裏跡・聚楽遺跡２

1．調査経過 …… 15
2．遺　構 …… 16
3．ま と め …… 18

Ⅲ 平安宮左兵衛府・侍従所跡

1．調査経過 …… 19
2．遺　構 …… 21
（1）基本層序 …… 21
（2）江戸時代の遺構 …… 21
（3）平安時代の遺構 …… 25
3．遺　物 …… 27
（1）平安時代の土器類 …… 27
（2）桃山・江戸時代の土器類 …… 39
（3）石製品 …… 45
（4）金属製品 …… 45
（5）瓦類 …… 46
4．ま と め …… 48

Ⅳ 中臣遺跡85次調査

1．調査経過 …… 49
2．遺　構 …… 51
（1）基本層序 …… 51
（2）遺構 …… 51
3．遺　物 …… 62
（1）土器 …… 62
（2）石器 …… 73
（3）鉄器 …… 73
4．ま と め …… 75
（1）遺構の変遷 …… 75
（2）竪穴住居14について …… 77
（3）中臣遺跡85次調査出土遺物の特質 …… 78
5．自然科学分析 …… 79

Ⅴ 革嶋館跡

1．調査経過 …… 93
2．位置と環境 …… 95
3．遺　構 …… 98
（1）古墳時代初頭 …… 98
（2）室町時代から江戸時代 …… 101
4．遺　物 …… 102
（1）土器類 …… 102
（2）その他の遺物 …… 103
（3）自然遺物 …… 104
5．ま と め …… 105

Ⅵ 寺戸大塚古墳

1．調査経過 …… 108
（1）調査に至る経緯 …… 108
（2）調査の経過 …… 109
2．古墳の概要と既往調査 …… 112
3．調査の概要 …… 113
（1）調査区の設定 …… 113
（2）層序 …… 113

（3）遺構 …… 114
（4）遺物 …… 117
4．まとめ …… 118

報告書抄録 …… 120

図版目次

図版1　平安宮内裏跡・聚楽遺跡1　遺構　1　整地層1下層面北拡張区（南東から）
2　第2面礫敷き路面状遺構（南東から）
3　第2面全景（東から）
図版2　平安宮内裏跡・聚楽遺跡1　遺構　1　第3面全景（東から）
2　Pit16断面（東から）
3　SD25断面（北東から）
図版3　平安宮内裏跡・聚楽遺跡1　遺物　出土遺物
図版4　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺構　1　調査区全景　江戸時代の遺構（北から）
2　南部拡張区の状況　溝SD59・路面SF60（北から）
図版5　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺構　1　中央部土取り跡（北から）
2　北部土取り跡（東から）
3　土坑SK46断面（南西から）
図版6　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺構　1　路面SF60検出状況（北から）
2　溝SD59断面（南から）
図版7　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SD59出土土器1
図版8　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SD59出土土器2
図版9　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SD59出土土器3
図版10　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SD59出土土器4
図版11　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SK46出土土器1
図版12　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SK46出土土器2
図版13　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　SK46出土土器3
図版14　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　墨書土器・土製品・その他の平安時代の土器
図版15　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　桃山・江戸時代の土器類1
図版16　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　桃山・江戸時代の土器類2
図版17　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　桃山・江戸時代の土器類3

図版18　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　桃山・江戸時代の土器類4
図版19　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物　金属製品・石製品
図版20　中臣遺跡85次調査　遺構　1　調査区南半全景（北から）
2　土坑15（北西から）
図版21　中臣遺跡85次調査　遺構　1　竪穴住居2（北北東から）
2　竪穴住居2床面土器出土状況1（北西から）
3　竪穴住居2床面土器出土状況2（南東から）
図版22　中臣遺跡85次調査　遺構　1　竪穴住居11焼失状況（北西から）
2　竪穴住居11完掘状況（北西から）
図版23　中臣遺跡85次調査　遺構　1　竪穴住居11床面土器出土状況（南東から）
2　竪穴住居11主柱穴と中央土坑（西北西から）
3　調査区北半　竪穴住居14全景（北西から）
図版24　中臣遺跡85次調査　遺構　1　土坑45と竪穴住居14東隅遺物出土状況（西南西から）
2　竪穴住居14東隅遺物出土状況（北西から）
3　竪穴住居14南隅遺物出土状況（北から）
4　竪穴住居14白色粘土出土状況（南東から）
図版25　中臣遺跡85次調査　遺物　土坑15・竪穴住居2・竪穴住居11出土土器
図版26　中臣遺跡85次調査　遺物　竪穴住居14埋土出土土器
図版27　中臣遺跡85次調査　遺物　竪穴住居14床面出土土器1
図版28　中臣遺跡85次調査　遺物　竪穴住居14床面出土土器2
図版29　中臣遺跡85次調査　遺物　石製品・鉄製品
図版30　革嶋館跡　遺構　1　調査区全景（南西から）
2　堀3・石組遺構4（南から）
3　水路5（南から）
図版31　寺戸大塚古墳　遺構　Ⅰ区　転落石検出状況（西から）
図版32　寺戸大塚古墳　遺構　1　Ⅰ区　葺石検出状況（西から）
2　Ⅰ区　墳頂部攪乱状況（北西から）
図版33　寺戸大塚古墳　遺構　1　Ⅰ区　拡張区全景、土坑2検出状況（西から）
2　Ⅱ区　葺石検出状況（南西から）

挿 図 目 次

図1　調査位置図（1：2,500）…… 1
図2　調査区配置図（1：500）…… 3
図3　調査前全景（南から）…… 3
図4　調査風景（南から）…… 3
図5　第1面全景（南から）…… 4
図6　第1・2面遺構平面図（1：100）…… 5
図7　第3面遺構実測図（1：100）…… 6
図8　セクション断面図（1：50）…… 7
図9　溝SD25セクション断面図（1：20）…… 8
図10　土器実測図（1：4）…… 10
図11　軒瓦拓影・実測図（1：4）…… 12
図12　紡錘車実測図（1：2）…… 12
図13　紡錘車 …… 12
図14　調査位置図（1：5,000）…… 15
図15　調査前全景（西から）…… 16
図16　調査風景（東から）…… 16
図17　1トレンチ全景（北から）…… 16
図18　遺構実測図（1：100）…… 17
図19　調査位置図（1：2,500）…… 19
図20　調査区配置図（1：400）…… 20
図21　調査前全景（南から）…… 20
図22　調査風景（南東から）…… 20
図23　西壁・北壁断面図（1：100）…… 22
図24　遺構平面図1（1：100）…… 23
図25　遺構平面図2（1：100）…… 24
図26　SK46断面図（1：50）…… 25
図27　南セクション断面図（1：50）…… 26
図28　SD59出土土器実測図1（1：4）…… 29
図29　SD59出土土器実測図2（1：4）…… 30
図30　SD59出土土器実測図3（1：4）…… 31
図31　SD59出土土器実測図4（1：4）…… 32
図32　SK46出土土器実測図1（1：4）…… 34

図33　SK46出土土器実測図２（１：４）　35
図34　SK46出土土器実測図３（１：４）　36
図35　輪羽口・瓦加工品実測図（１：４）　38
図36　その他の平安時代の土器実測図（１：４）　38
図37　SK52・53、SK45、SK35出土土器実測図（１：４）　41
図38　SK19出土土器実測図（１：４）　43
図39　砥石実測図（１：２）　45
図40　硯実測図（１：４）　45
図41　金属製品実測図（１：２）　46
図42　銭貨拓影（１：２）　46
図43　軒瓦拓影・実測図（１：４）　47
図44　遺構の位置関係　48
図45　調査位置図（１：5,000）　49
図46　調査前全景（北西から）　50
図47　調査風景（北東から）　50
図48　調査区配置図（１：200）　50
図49　調査区断面図（１：50）　52
図50　遺構平面図（１：100）　53
図51　土坑15実測図（１：20）　54
図52　竪穴住居２実測図（１：50）　55
図53　竪穴住居11実測図（１：50）　56
図54　竪穴住居14焼失状況平面図（１：50）　57
図55　竪穴住居14完掘状況平面図（１：50）　58
図56　竪穴住居14断面図（１：50）　59
図57　竪穴住居14遺物出土状況（１：80、遺物は１：８）　60
図58　土坑15出土土器実測図（１：４）　62
図59　遺物包含層出土土器実測図（１：４）　63
図60　竪穴住居２出土土器実測図（１：４）　63
図61　竪穴住居11出土土器実測図（１：４）　63
図62　竪穴住居14埋土出土土器実測図１（１：４）　65
図63　竪穴住居14埋土出土土器実測図２（１：４）　66
図64　竪穴住居14床面・土坑45出土土器実測図（１：４）　68
図65　石２実測図（１：４）　73
図66　鉄鏃実測図（１：２）　73
図67　遺構変遷図（１：400）　75
図68　暦年較正結果　81

図69　中臣遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 …… 84
図70　中臣遺跡出土試料胎土中の砂の粒径組成 …… 84
図71　中臣遺跡出土試料の砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 84
図72　西京極遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 …… 87
図73　西京極遺跡出土試料胎土中の砂の粒径組成 …… 87
図74　西京極遺跡出土試料の砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 87
図75　粘土塊の断面写真 …… 90
図76　胎土薄片１ …… 91
図77　胎土薄片２ …… 92
図78　調査位置図（１：2,500） …… 93
図79　調査前全景 …… 94
図80　調査風景 …… 94
図81　調査区配置図（１：1,000） …… 94
図82　周辺遺跡地図（１：10,000） …… 96
図83　建物57実測図（１：100） …… 98
図84　遺構実測図（１：150） …… 99
図85　堀３・石組遺構４・水路５実測図（１：50） …… 100
図86　土器実測図（１：４） …… 102
図87　石製品実測図（１：４） …… 103
図88　出土遺物 …… 103
図89　堀３・水路５出土自然遺物 …… 104
図90　古墳時代遺構概略図（１：1,000） …… 105
図91　室町時代から江戸時代遺構概略図（１：1,000） …… 105
図92　「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』 …… 107
図93　「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』 …… 107
図94　古墳の位置と周辺遺跡分布図（１：15,000） …… 108
図95　Ⅰ区調査前全景（北東から） …… 109
図96　Ⅱ区調査前全景（南東から） …… 109
図97　Ⅰ区調査作業風景（北東から） …… 109
図98　後円部墳丘保護（西から） …… 110
図99　後円部墳丘保護（西から） …… 110
図100 竹材処理（南から） …… 110
図101 古墳墳丘図と調査地点図（１：500） …… 111
図102 Ⅰ区遺構実測図（１：100、１：50） …… 115
図103 Ⅱ区遺構実測図（１：100、１：50） …… 116

表 目 次

表1　周辺の調査一覧表 …… 2
表2　遺構概要表 …… 8
表3　遺物概要表 …… 9
表4　平安宮内裏の火災と新造賂年表 …… 13
表5　遺構概要表 …… 21
表6　遺物概要表 …… 27
表7　平安時代土器破片数 …… 28
表8　SD59土師器高径分布 …… 28
表9　SK46土師器高径分布 …… 33
表10　江戸時代の土器類の構成 …… 40
表11　遺構概要表 …… 51
表12　竪穴住居出土炭化材の樹種 …… 54
表13　遺物概要表 …… 64
表14　掲載土器一覧表 …… 70
表15　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 80
表16　中臣遺跡出土試料の薄片観察結果 …… 83
表17　西京極遺跡出土試料の薄片観察結果 …… 86
表18　中臣遺跡および西京極遺跡出土粘土塊と土器の特徴 …… 88
表19　遺構概要表 …… 96
表20　遺物概要表 …… 102
表21　堀3・水路5出土自然遺物一覧表 …… 102
表22　既往調査一覧表 …… 112
表23　遺構概要表 …… 113
表25　遺物概要表 …… 117

Ⅰ　平安宮内裏跡・聚楽遺跡１

１．調査経過

（１）調査経過

今回の調査は、個人住宅新築に伴う発掘調査である。調査地は、京都市上京区中務町490−74に所在し、平安宮の中央部東寄り、内裏建礼門の南側に位置する。当地は、東側を浄福寺通、北側を上椹木町通に面し、両通りより一段高い。調査区は調査地の北側、東西約10m、南北約８mの方形に設定し、さらに北側の西寄りに、拡張を行い、調査面積は約87㎡となった。

調査は、器材搬入を先行し、2009年１月27日より開始した。機械掘削により近現代盛土を除去して検出した遺構面を第１面とし、人力により調査した。調査区には、平安時代中期から鎌倉時代前半の整地層が堆積しており、それらを３面に分けて順次、掘り下げ、調査を進めた。全景写真は、第２面と第３面で実施した。補足調査の後、埋め戻しと併行して機材搬出を進め、2009年２月26日に全ての現場作業を終了した。

なお、調査中は適宜、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導を受けた。

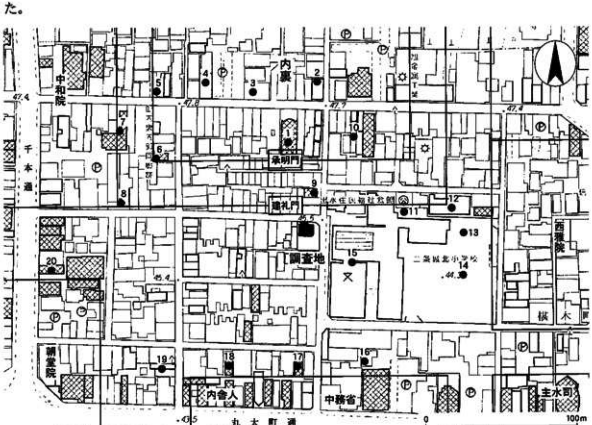


図１　調査位置図（１：2,500　調査地点の番号は表１の番号に対応）

表1　周辺の調査一覧表

番号	所在地	調査年度	調査内容（検出遺構）	文献
1	上京区下立売通千本東入田中町468	1984	奈良時代の堅穴住居址。平安時代前期から中期の内裏内郭正門・承明門跡、地鎮め跡など。	「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度　文観局　1986年
2	上京区下立売通千本東入田中町472-2	1987	試掘。現地表下0.7mで江戸時代の整地土層、土坑3基。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　文観局　1988年
3	上京区下立売通土屋町東入田中町459	1977	紫宸殿南庭推定地。平安時代後期の集石状遺構3基。	「平安宮内裏跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集　1978-Ⅱ　埋文研　1978年
4	上京区下立売通千本東入田中町445	1987	竈人町屋東半。平安時代中期から後期の石敷雨落溝。	「平安宮内裏（2）」『平安京跡発掘調査概報』昭和62年度　文観局　1988年
5	上京区下立売通千本東入田中町434-5	1994	平安時代前期から中期の内裏内郭西面回廊基壇と石敷雨落溝。	「平安宮内裏内郭回廊」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度　文観局　1995年
6	上京区千本通下立売下る小山町 908-43	1979	1994年度調査の南延長部に位置し、続きの石敷雨落溝を検出。内郭南面回廊を横断する暗渠か。	「平安宮内裏内郭回廊跡」『平安京跡発掘調査概要　文化庁国補助事業による発掘調査の概要』1979年度　文観局　1980年
7	上京区下立売通千本東入田中町428-1他	1987	中和院との境をなす内裏西面外郭築地推定地。築地状の高まりと両側に溝。	「平安宮内裏院跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成62年度　文観局　1988年
8	上京区千本通下立売下る小山町908-11	1982	南面外郭築地想定地。平安時代後期の土坑3基	「内裏外郭跡」『平安京跡発掘調査概報』昭和57年度　文観局　1983年
9	上京区浄福寺通下立売下る中務町490-19	1974	桃山時代以降の土取穴。	『平安宮跡　1974　京都市埋蔵文化財年次報告 1974-Ⅰ』　文観局保護課　1975年
10	上京区下立売通智恵光院西入下丸屋町497	1994	春興殿推定地の立会調査。現地表下1.1mで平安時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度　文観局　1995年
11	上京区様木町通浄福寺通東入中務町487	1987	小学校北側中央部で実施した試掘調査。現地表下0.5mで江戸時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　文観局　1988年
12	上京区様木町通浄福寺東入中務町486-46	1981	小学校北東部で実施した試掘調査。現地表下0.9mで平安時代中期の土坑1基。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和56年度　文観局　1982年
13	上京区浄福寺通下立売下る西入中務町487	1982	平安時代の土坑3基。近世の落込み2基。	『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1984年
14	上京区浄福寺通下立売下る西入中務町487	1989	小学校グランド実施した試掘調査。現地表下1.24mで平安時代の整地土層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度　文観局　1990年
15	上京区浄福寺通下立売下る西入中務町487	1990	試掘。現表土下0.58mで包含層。-1.28mで土取穴。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度　文観局　1991年
16	上京区丸太町通智恵光院東入中務町486	1989	試掘。現表土下0.5mで平安時代の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度　文観局　1990年
17	上京区様木町通浄福寺通西入中務町490-90	1991	中務省北面築地、柱穴（平安時代中期）。「大庭」の南端想定地で礫敷路面を2面（平安時代前期か）。	「平安宮中務省（2）」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　文観局　1992年
18	上京区下立売通千本東入中務町490-37	1990	中務省北面築地、外溝（平安時代前期か）。「大庭」の南端想定地で礫敷路面。北側は堅固になる。	「平安宮中務省（1）」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　文観局　1992年
19	上京区下立売通千本東入中務町490-43	1991	中務省外の北西部想定地。平安時代前期の整地土層を3面。	「平安宮大極殿東」『平安京跡発掘調査概報』平成3年度　文観局　1992年
20	上京区千本通丸太町上る小山町 884	1984	大極殿地区の北面回廊基壇。断割調査で古墳時代後期の溝、東西溝か。	「平安宮大極殿院」『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度　文観局　1985年

発行主体：埋文研 → 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、文観局 → 京都市文化観光局
図1 調査位置図と表1周辺の調査一覧表の番号は、同一。

（2）位置と環境

調査地周辺は、古墳時代の遺跡として聚楽遺跡が知られている。この遺跡は、主に千本丸太町交差点より東に広がる古墳時代後期の集落跡であり、今回の調査地は、この遺跡の北部に位置する。また、平安時代には平安宮が造営され、調査地は内裏外郭南門の建礼門推定地から約15m南東に位置する。建礼門前は大庭とも称される広場になっており、白馬節会・射礼・荷前・相撲など年中行事が執り行われた。また、承和６年（839）、門前に仮屋をたて、唐物を並べて内蔵寮の官人や内侍らで交易を行い、「宮市」と称した記録がある[13]。内裏は度々火災にあい、安貞元年（1227）の焼失を最後に再建されず、鎌倉時代以降、調査地周辺は内野と称される空閑地となる。桃山時代にはこの一帯に豊臣秀吉により、聚楽第が造営され、江戸時代には、京都所司代屋敷地となる。

図２　調査区配置図（１：500）

平安宮内裏推定地である調査地周辺では、これまで多くの発掘調査・試掘調査などが実施され、調査成果は『平安宮Ⅰ』などで報告されている。近隣の主な既調査（図１、表１）に限れば、内裏承明門跡（１）、内裏内郭回廊跡（５・６）などを検出している。また、中務省の北側の「大庭」南端推定地（17・18）で礫敷路面を検出している。

図３　調査前全景（南から）

図４　調査風景（南から）

2．遺　構

（1）基本層序

調査地の北側を走る上椹木町通の標高は45.3m前後、東側を走る浄福寺通の標高は45.1～45.3mであり、南へ行くほどさらに低くなる。調査地は、これらの通りより一段高く、現地表面の標高は、ほぼ45.5～45.6mである。現表土下0.1～0.5mが近現代盛土である。その直下から調査区中央部を中心に、整地層が堆積する。平安時代中期後半から鎌倉時代前半の暗褐色～褐色整地層が厚さ0.05～0.2m、平安時代中期の灰黄褐色～黒褐色整地層が厚さ0.05～0.15mあり、整地層は調査区の北東部がやや厚くなる。その下が黒色～暗褐色砂泥混礫層の自然堆積土層であり、その上面の標高は、調査区西壁で45.3m前後、第３面東端で東側で45.1m前後を測る。

（2）遺構

調査では近現代盛土の直下、平安時代中期後半から鎌倉時代前半の整地層（整地層１とする）上面を第１面、平安時代中期の整地層（整地層２とする）上面を第２面とし、整地層２を除去した面を第３面とした。

１）第１面（図５・６、図版１）

この面で検出した遺構は整地層１で、この層自体は３層に細分できることを確認した。上面には径１～３m、厚さ0.1m前後の範囲で、不定形の暗褐色～褐色砂泥粘質土層が３箇所分布している。この土層からは、鎌倉時代前半の遺物が出土しており、最後に整地されたものと考えられる。整地層１の最下層は、一辺0.1～0.2mの瓦片が多量に混じる。土層を固く締めるためと考えられる。ここから平安時代中期後半から後期の遺物が出土している。

図５　第１面全景（南から）

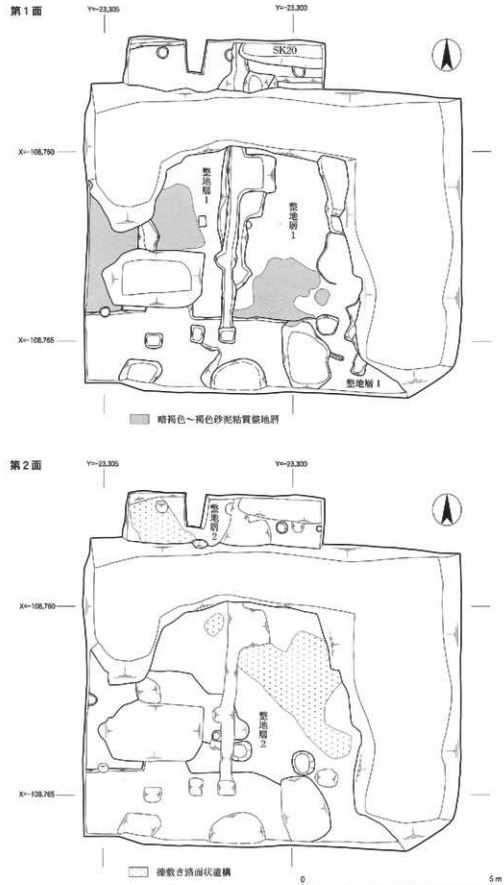
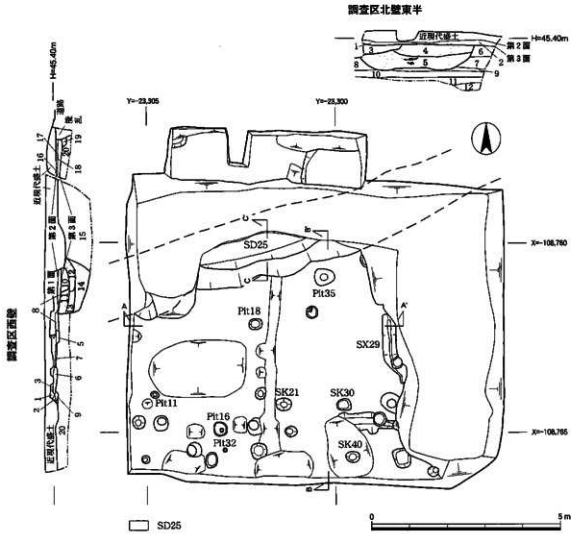


図6　第1・2面遺構平面図（1：100）



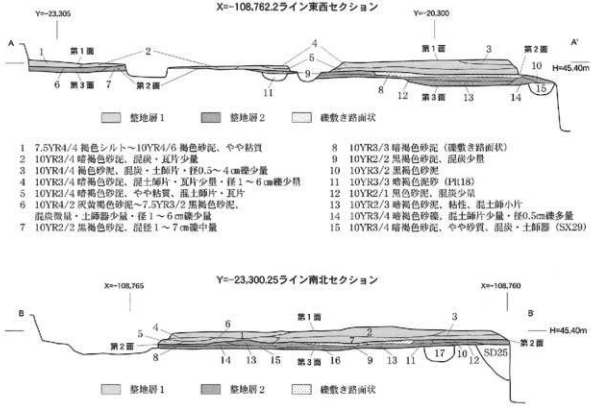
調査区西壁

1 10YR3/4 暗褐色砂泥
2 10YR4/6 褐色砂泥
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
4 7.5YR4/4 褐色シルト～10YR4/6 褐色砂泥、やや粘質
5 10YR3/1 黒褐色砂泥、掘土師器・瓦片中量（土坑）
6 10YR4/4 黄色砂泥、掘土師器片・径1～7cm礫少量
7 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥～7.5YR3/2 黒褐色砂泥
炭焼散量・土師器少量・径1～6cm礫少量
9 10YR3/2 黒褐色砂泥、やや粘質、掘径1～5cm礫少量
10 10YR2/2 黒褐色砂泥（土坑）
11 10YR3/4 暗褐色砂泥、掘炭・径1～8cm礫少量 (SD25)
12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
13 10YR3/2 黒褐色砂泥、やや粘質、掘径1～5cm礫少量 (SD25)
14 10YR3/2 黒褐色砂泥、掘径1～12cm礫中量
15 10YR4/3～4/6 にぶい黄褐色～褐色砂礫、
掘径1～10cm礫中量（自然堆積層）
16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
17 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、掘土師器片・炭少量
18 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、掘土師器片微量
19 10YR3/2 黒褐色砂泥、掘炭少量
20 10YR2/1～3/1 黒色砂礫～黒褐色砂泥、掘10YR3/3
～4/3 暗褐色砂礫～にぶい黄褐色粗砂（自然堆積層）

調査区北壁東半

1 10YR3/3 暗褐色砂泥、掘土師器片中量・炭少量
2 10YR3/2 黒褐色砂泥、掘土師器片中量
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、掘土師器片・炭少量（土坑）
4 10YR3/2 黒褐色砂泥、掘土師器片微量・
径1～7cm礫少量 (SD25)
5 10YR3/2 黒褐色砂泥、掘炭焼片散りあり
掘土師器片微量・径1～15cm礫少量
6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、掘径1～5cm礫少量
7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫、掘径1～15cm礫多量
8 10YR5/4～5/6 にぶい黄褐色砂礫、掘径1～7cm礫中量
9 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、やや粘質
10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
11 10YR4/4 褐色砂泥、やや粘質
12 10YR4/2 灰黄褐色砂礫、掘径1～5cm礫中量
※ 6以下は自然堆積層および地山

図7　第3面遺構実測図（1：100）



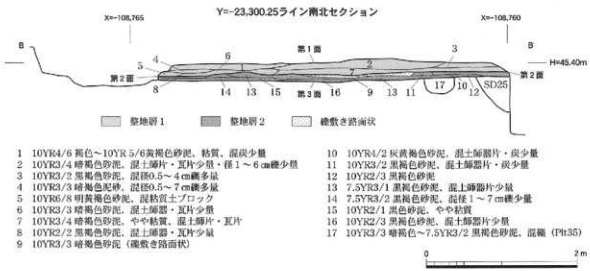


図8　セクション断面図（1：50）

2）第2面（図6、図版1）

遺構は、少数の土坑や柱穴を検出したが、まとまりはない。この遺構面では、礫敷き踏面状遺構を検出した。整地層2は調査区中央部に厚く堆積しており、礫敷き踏面状遺構を含めて3層に細分できた。平安時代中期前半の土師器小片が多く出土した。

礫敷き踏面状遺構（図版1）　整地層2上面において、調査区の北西から南東方向に帯状に広がっている。規模は幅0.6～2.0m、長さは約9m、厚さは0.04m前後、その上面は径2㎝前後の礫が敷き詰められ、堅く締まる。建礼門推定地の門前に位置する。

3）第3面（図7、図版2）

土坑や柱穴、小穴、溝などを検出した。溝SD25を除き、まとまりはない。ここでは主に土師器片を多く含む遺構について記述した。

SK21・30・40　調査区南側で検出した土坑である。規模は径0.3～0.4m、深さ0.1～0.15mである。埋土には、平安時代中期前半の土師器片が多く混じる。

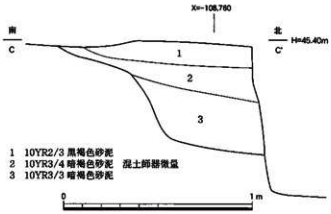


図9　溝SD25セクション断面図（1：20）

Pit16（図版2）　調査区南西部で検出した柱穴である。規模は径約0.35mの楕円形、深さ約0.1m、中には直径約0.1m、深さ約0.1mの小穴がある。埋土には、平安時代中期前半の土師器片が多く混じる。

Pit11・32　調査区南西部で検出した小穴である。規模は径約0.1～0.2m、深さ約0.2mである。埋土には、平安時代中期前半の土師器片が多く混じる。

SX29　調査区東側中央部で検出した溝状のものである。ほぼ南北に走り、長さ約1.9m、幅0.4m、深さ0.15m前後である。埋土には、平安時代中期前半の土師器片が多く混じる。

SD25（図9、図版2）　調査区北側で検出した東に向かって北に約20度振れる東西溝である。その規模は、検出した部分と調査区壁断面から復元すると、幅1.5～1.8m、長さ8.5m以上、深さ0.6～0.75m、溝の断面はU字形である。溝底部の標高は44.5～44.6m、調査区内では高低差がほとんどない。遺物は古墳時代後期の須恵器甕が出土した。

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
古墳時代後期	溝（SD25）	
平安時代中期～鎌倉時代前半	土坑（SK21・30・40）、柱穴（Pit16）、小穴（Pit11・32）、溝状遺構（SX29）、礫敷路面状遺構など	整地層2（10世紀後半） 整地層1（11～13世紀前半）

3．遺　物

出土遺物は、整理箱にして17箱であるが、その大半は整地層から出土した。時期としては、古墳時代と平安時代から江戸時代のもので、その中では平安時代中期の土師器を中心とする土器・陶磁器の出土が最も多く、全体の約２/３、次いで平安時代中期から後期の瓦類が約１/３である。その他のものは、溝SD25から出土した古墳時代のものを除き、ほとんどが少量小片である。平安時代前期の遺物は、須恵器、瓦がある。鎌倉時代から江戸時代の遺物は、土師器、輸入陶磁器、焼締陶器、染付磁器、瓦類がある。それらの中から比較的遺存状態の良好なものを図示した。

なお、出土土器の年代については「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に準拠した。

（1）土器類（図10、図版３）

古墳時代、平安時代前期および平安時代中期から鎌倉時代前半の出土土器を図示した。

1）古墳時代

１・２は須恵器甕である。１は口径48.4cm、体部屈曲部から口縁部の残存高が17.5cmを測る大型の甕である。口頸部は外反し、口縁部でわずかに内傾する。口縁端部は平らな面をつくり、内外面の端部を肥厚させる。頸部外面には、上から１条・２条・３条の沈線がめぐり、その間に波状文を配する。波状文は細く密な施文具を用いている。体部外面には平行タタキを施し、内面には青海波文が明瞭に残る。焼成は硬質である。胎土は白色粒が少量混じり、明緑灰色である。２は口径10.4cm、体部から口縁部の残存高が3.5cmある。体部から口縁部は「く」の字状に屈曲し、口頸部は外反する。口縁端部の上・下端は突出し、断面形は丸くふくらむ。体部内面には青海波文、頸部内面にはヘラ記号「艹」を施す。焼成は硬質で外面に自然釉が掛かる。胎土は長石粒が少量混じり、灰黄褐色である。１・２共に溝SD25から出土した。古墳時代後期に属する。

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	石製品、須恵器		滑石紡錘車１点、須恵器２点		
平安時代前期	須恵器、瓦類		須恵器２点、軒丸瓦１点		
平安時代中期～鎌倉時代前半	土師器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類		土師器20点、緑釉陶器１点、瓦器１点、輸入青磁１点、軒丸瓦３点、軒平瓦５点		
鎌倉時代後半～江戸時代	土師器、輸入陶磁器、焼締陶器、染付陶磁器、瓦類				
合　計		21箱	37点（３箱）	１箱	17箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

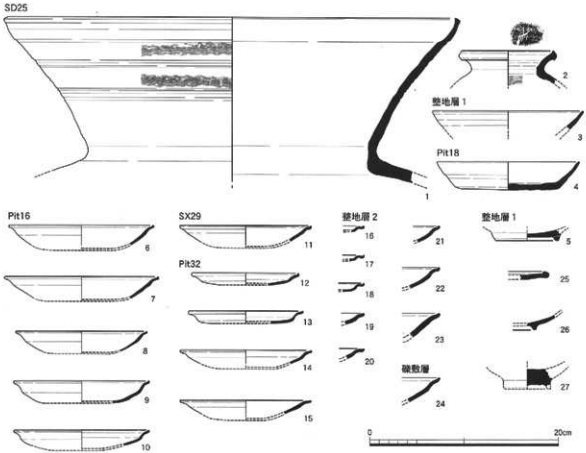


図10　土器実測図（1：4）

2）平安時代前期

3・4は須恵器杯である。3は口径16㎝、口縁部の残存高が2㎝ある。体部から口縁部は外反し、端部は薄くなり、わずかに内湾し、丸く収める。内面・外面ともナデ調整で、焼成はやや硬質である。胎土は良質、灰色である。整地層1下層から出土した。4は口径15.2㎝、器高3.0㎝ある。平らな底部から体部は外反して立ち上がり、口縁端部はわずかに内湾して薄くなり、丸く収める。焼成は硬質である。胎土は良質、灰色である。Pit18から出土した。

3）平安時代中期から鎌倉時代前半

5は緑釉陶器と考えられる皿の底部である。底部径6.8㎝、残存高2.0㎝である。高台は貼付けであり、断面形は三角形を呈する。磨滅が激しく、緑釉は見られず調整は不明瞭である。焼成は軟質である。胎土は良質、灰白色である。整地層1下層から出土した。時期は10世紀頃に比定できる。

6～15は土師器皿である。口径14.4～15.4㎝、復元器高2.4～2.7㎝の深い皿（6～11・14・15）と、口径11.4～12.2㎝、復元器高1.3㎝の浅い皿（12・13）に大別できる。深い皿は体部がやや丸味をもって立ち上がり、体部上端から口縁は外反し、口縁部は上方へわずかに突起し、丸く収める。内面と外面上半はナデ調整、外面の下半と底部はオサエである。焼成はやや硬い。胎土は

小粒が微量混じり、にぶい黄橙～浅黄橙色である。浅い皿は、平らな底部から体部が外反して立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し、端部は上方へわずかに突起して丸く収める。8の口縁の一部には黒斑が残る。焼成はやや硬い。胎土は良質、にぶい黄橙色である。6・7はPit16、8～10はPit16柱痕、11はSX29、11～15はPit32から出土した。6～15の時期は、京都Ⅱ期新～Ⅲ期古に属し、10世紀中頃に比定できる。

16～24は土師器杯皿類である。小片のため断面のみを図示した。16～18は浅い皿で、器形・調整は12・13とほぼ同じである。器壁は薄く、焼成はやや硬い。胎土は良質、にぶい黄橙色である。19～22・24は深い皿で、器形・調整は6～11などとほぼ同じである。焼成はやや硬い。胎土は良く、にぶい橙～浅黄橙色である。23は土師器杯であり、体部は外反し、口縁部はわずかに外傾し、端部は小さくつまみ丸く収める。焼成はやや硬い。胎土は良く、橙色である。16～23は整地層2から、24は整地層2の礫敷き路面状遺構を形成するから層から出土した。16～24の時期は、京都Ⅱ期新～Ⅲ期古に属し、10世紀中頃に比定できる。

25は土師器皿である。小片のため口径不明、器高0.9cmある。口縁端部は内側へ折り返して収める。磨滅のため調整は不明瞭である。焼成は軟質、胎土は良く灰白色である。整地層1下層から出土した。京都Ⅳ期に属し、11世紀に比定できる。

26は瓦器椀である。底部小片のため口径不明、残存高2.6cmある。底部には断面形が台形で高さ約5㎜の高台が付く。整地層1下層から出土した。平安時代後期、12世紀頃と考えられる。

27は輸入陶磁器の青磁碗底部である。底部径約5.0cm、残存高約2.0cmある。底部内面と高台外面に施釉する。焼成は硬質である。胎土は良質、灰色である。龍泉窯系青磁であろう。整地層1上層から出土した。時期は鎌倉時代前半頃と考えられる。

（2）瓦類（図11、図版3）

瓦類はほとんど小片であり、平安時代中期のものが大半であるが、平安時代前期・後期、江戸時代の瓦類も少量出土している。ここでは比較的残存状態の良好な軒瓦を図示した。

軒丸瓦　28は複弁蓮華文軒丸瓦である。外区には圏線に囲まれた珠文帯がある。焼成はやや硬い。胎土は砂粒が微量混じり、浅黄橙である。SK20から出土した。平城宮式6316系の軒丸瓦と類推でき平城宮からの搬入瓦である。29は単弁蓮華文である。外区には珠文がある。焼成はやや硬い。胎土は小礫が少量混じり、灰白色である。整地層2から出土した。平安時代前期であろう。30は子葉を輪郭線で区画する複弁蓮華文である。外区には珠文がある。焼成はやや硬い。胎土は砂粒が少量混じり、灰白色、表面は緑灰色である。31は複弁蓮華文である。焼成はやや硬い。胎土は砂粒が少量混じり、浅黄橙色である。平安時代後期に属する。30・31は整地層1下層から出土した。

軒平瓦　32は小片であるが、均整唐草文であろう。焼成はやや硬質。胎土は小礫が少量混じり、灰黄褐色である。33は対向C字形中心飾りをもつ均整唐草文である。外区には珠文がある。焼成はやや硬い。胎土は小礫が少量混じり、淡黄色である。池田瓦窯産[23]。34は唐草文の右端部であり、

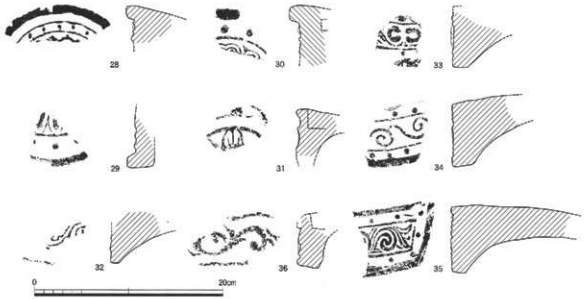


図11　軒瓦拓影・実測図（1：4）

唐草文の中心飾りから三転目途中で切り落としている。外区には珠文がある。焼成はやや硬い。胎土は小粒が少量混じり、褐灰色である。小野瓦窯産[2]である。35は複線であらわす均整唐草文の右端部である。焼成はやや硬質。胎土は小礫が少量混じり、灰白色、表面は緑灰色である。栗栖野瓦窯産[4]と考えられる。33～35は平安時代中期に属する。36は偏行唐草文か。唐草文は幅0.5～1.0cmあり、太い。平安時代後期に属する。32は整地層2から、33～35は整地層1下層から、36は整地層1上層から出土した。

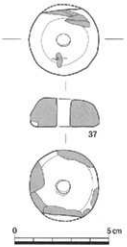


図12　紡錘車実測図（1：2）

図13　紡錘車

（3）石製品（図12・13）

滑石製の紡錘車（37）がある。円形で中心に径0.6cmの穿孔がある。径3.7cm前後、高さ1.5cm、重さ約30.3gある。断面形は台形で、両面は面取りする。広い面は径約3.0cm、狭い面は径約2.5cmある。第3面から出土し、古墳時代後期に属すると考えられる。

4. まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、溝SD25と石敷き路面状遺構および整地層である。

溝SD25は、出土した遺物から古墳時代後期の遺構であり、平安宮造営時には、埋没していたと考えられる。今回の調査地から西へ約170mの調査（図1－20）で同時期の東西方向と考えられる溝を検出している。平安宮下層の遺構[5]として注目される。

少量ながら平安時代前期の遺物が出土しているが、遺構は検出できなかった。自然堆積土層の上面である第3面で検出した遺構と第2面を形成する整地層2から出土した遺物は、大きな時期差はみられない。第3面で検出した遺構は、おそらく整地作業直前に埋まったものであろう。これらの遺構の埋没時期は10世紀第2四半期と考えられる。

整地層2は、短時間の整地層であり、その成立時期は、第3面の遺構時期より少し遅れる10世紀後半と考えている。第2面で検出した礫敷き路面状遺構は、これを伴う整地作業のきっかけのひとつとして、内裏の焼亡と新造が考えられる。内裏は、天徳4年（960）を最初に、貞元1年（976）、天元3年（980）、天元5年（982）など幾度も火災にみまわれ、安貞1年（1227）に焼失して以後、内裏再建はなされなかった。整地層2の成立時期から、整地作業は内裏焼亡による10世紀代後半の内裏新造に伴う可能性が考えられる。また、この整地作業において、平安時代前期の遺構や整地層が削平された可能性が考えられる。

表4　平安宮内裏の火災と新造略年表

内裏焼亡	備　考	内裏新造（遷幸）	備　考
天徳4年（960）　9月	初めて焼亡		
		応和1年（961）　9月	
貞元1年（976）　5月			
		貞元2年（977）　7月	
天元3年（980）　11月			
		天元4年（981）　10月	
天元5年（982）　11月			
		永観2年（984）　8月	
長保1年（999）　6月			
		長保2年（1000）10月	
		長保5年（1003）10月	
寛弘2年（1005）11月			
		寛弘5年（1008）　6月以前	
		寛弘8年（1011）　8月	
		長和4年（1015）　9月	
長和4年（1015）11月			
		寛仁2年（1018）　4月	
長暦3年（1039）　6月			
		長久2年（1041）12月	
長久3年（1042）12月			
		永承1年（1046）10月	
永承3年（1048）11月			
康平1年（1058）　2月	未使用		
		延久3年（1071）　8月	
永保2年（1082）　7月			
		康和2年（1100）　6月	1082年以来修造
		元久1年（1204）12月	
安貞1年（1227）　4月	廃絶		

引用文献　西井芳子「皇居略年表」「平安京略年表」『平安京提要』角川書店　1994年

整地層1は、上層と下層の出土遺物には約2世紀巾の時期差があることや、不定形の暗褐色～褐色砂泥粘質土層が3箇所分布し、3層に細分できる堆積土層の状況から、幾度かの整地作業や補修がなされ、最後の整地は、内裏廃絶前の13世紀前半と考えられる。

整地層直上は、近現代盛土であり、道路に隣接する調査区北側で検出した近世と考えられる土坑を除き、遺構は検出できなかった。

今回の調査で検出した整地層は、最大の厚さ約0.35m、最多で6層に分層できる。検出した各面での遺構は少なく、1時期の礫敷き路面状遺構[6]を検出した。各整地層の時期は平安時代中期から鎌倉時代前半の約3世紀にわたり、その整地作業は内裏の新造や修造に少なからず関連することが窺える。

以上の結果から、当地は繰り返し整地が行われる重要な場所であることが認識でき、重要な儀式が執り行われる「大庭」であることが裏付けられたといえよう。

註

1）『続日本後記』承和6年10月25日条

2）前田義明「中期の瓦」『平安京提要』 角川書店 1994年 645頁の31と同文

3）註2に同じ 644頁の9（中心飾が「小乃」）と同文

4）註2に同じ 644頁の3（中心飾が「栗」）と同文

5）今回の調査地から約60m北での1984年の調査（図1－1）では奈良時代の竪穴住居が検出されており、調査地近辺は平安宮造営以前にも人が住んでいたと考えられる。

6）中務省外の北側、大庭南端推定地の調査（図1－17・18）で平安時代前期と考えられる礫敷路面を検出している。

参考文献

『平安京提要』 角川書店 1994年

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年

『京都市遺跡地図台帳』第8版 京都市文化市民局 2007年

Ⅱ　平安宮内裏跡・聚楽遺跡２

１．調査経過

今回の調査は、個人住宅新築に伴う発掘調査である。

調査地は、浄福寺通と下立売通の交差点から南に約50m行った東側に位置する。平安宮内裏外郭南限築地にあたるが、過去に内裏外郭南限築地推定地で実施された調査では、築地やそれに付随する遺構は見つかっておらず、築地の位置は確定できていない。本調査では築地に関連する遺構の発見が期待された。1974年に浄福寺通を挟んだ西側の敷地で実施された調査[17]では、桃山時代以降の土取穴が報告されているのみであるが、断面図からは、瓦片や凝灰岩片を含む遺物包含層が存在することがわかる。これは、内裏造営に関連する整地土の可能性がある。なお、中和院との境をなす内裏西面外郭築地跡では、２条の溝に挟まれた築地状の高まり遺構が見つかっている[2]。

また、下層遺跡の聚楽遺跡は、縄文時代から古墳時代の集落跡とされ、古墳時代の竪穴住居や溝、土坑などが見つかっている[21]。

調査は、６月22日より開始した。敷地内に４箇所のトレンチを設定し、掘削を行ったが、すべてのトレンチで表土下に石炭殻が厚さ１mにわたって堆積していた。さらに石炭殻の下には、近代のものと考えられる土取り穴が全面に広がっていた。一部のトレンチで断割調査を行い、地表下2.5mまで掘り下げたが、基盤層は検出できなかった。周辺調査での遺構検出の標高からみても、遺構は残っていないと判断され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導を受けて、記録を作成し、埋め戻しを行って、７月３日にすべての調査を終了した。

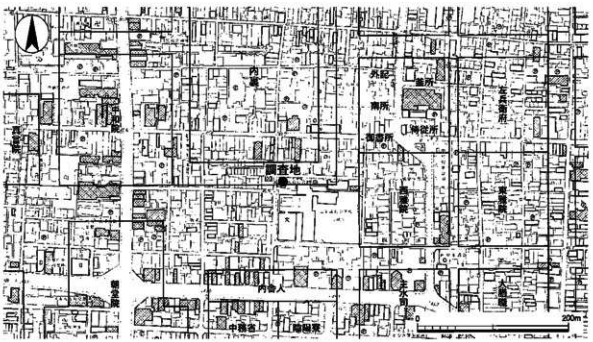


図14　調査位置図（１：5,000）

2．遺　構

調査前の現地表は、調査地西側で標高45.6m前後、東側では標高45.5m前後で、西から東へ緩やかに傾斜していた。

1トレンチでは、地表下0.15～0.2mまでの現代盛土を除去すると、厚さ0.8～1mの石炭殻がトレンチ全面に堆積していた（3層）。それを除去すると、黒褐色の礫混じりシルト～細砂層となる。この層には、基盤層の黄褐色粘質シルトのブロックが混じることから、土取り穴の埋土と考えられる。土取り穴はトレンチ全面に広がる。石炭殻と土取り穴の埋土との間に、近現代の陶磁器片などが混じる炭化物を多く含む層が部分的に認められる（4・11層）。トレンチ北端で断割調査を行い、地表下2.1mまで掘り下げたが、基盤層まで達しなかった。

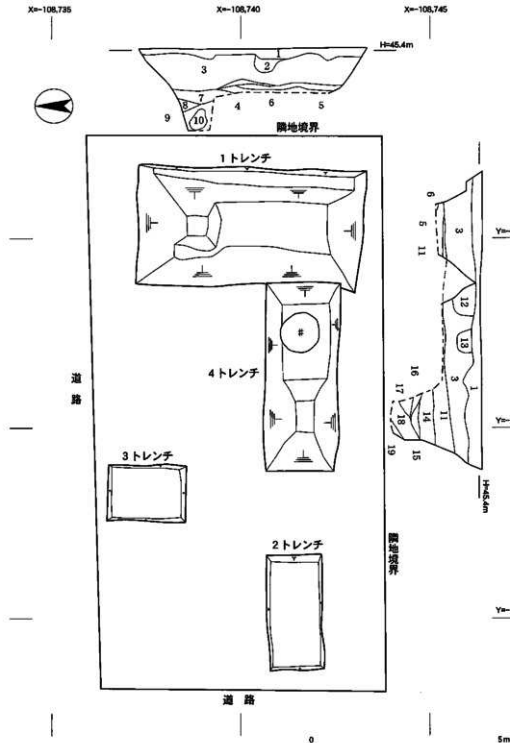
2トレンチ、3トレンチでも地表下0.1～0.2mで石炭殻を検出した。簡易ボーリング調査の結果、1トレンチと同様に1m近い石炭殻の堆積が確認できた。

4トレンチも同様に、地表下0.2～0.3mで石炭殻を検出した。石炭殻上面では、現代の漆喰井戸やゴミ穴と考えられる土坑が認められた。純粋な石炭殻層は厚さ0.5～0.8mあり、その下層には、石炭殻に炭化物と近現代の陶磁器などが混じる層（11層）が、0.3～0.5m堆積していた。それらを除去すると、1トレンチと同様の、土取り穴の埋土と考えられる層が全面に広がる。トレンチ西端で断割調査を行い、地表下2.4mまで掘り下げたが、基盤層まで達しなかった。

図15　調査前全景（西から）

図16　調査風景（東から）

図17　1トレンチ全景（北から）



1 現代盛土　コンクリート等多量混
2 10YR4/2灰黄褐色　シルト～中砂　焼塊多量混
3 石炭殻
4 径1～3cmの礫詰まる　炭化物少量混
5 石炭殻に10YR3/2黒褐色　シルト～細砂混　炭化物多量混
6 10YR3/2黒褐色　シルト～細砂　炭化物多量混、小礫混
7 10YR3/2黒褐色　シルト～細砂　炭化物多量混　締まり悪い
8 7層に10YR4/4褐色　粘質シルトのブロック少量混
9 7層に10YR4/4褐色　粘質シルトのブロック多量混
10 10YR5/6黄褐色　粘質シルト（基盤層のブロック）
11 石炭殻に炭化物と焼塩類多量混
12 10YR3/1黒褐色　細～中砂　径1～3cmの礫多量混、コンクリート混
13 12層と同じ
14 10YR3/3黒褐色　粘質シルト～細砂　炭化物少量混
15 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　径1～5cmの礫多量混
16 10YR3/2黒褐色　シルト～粘砂　径1～3cmの礫少量混
17 16層に10YR5/6黄褐色　粘質シルトのブロック多量混
18 10YR2/2黒褐色　シルト～細砂　径1～3cmの礫少量、炭化物多量混
19 10YR3/2黒褐色　細砂～中砂　径1～3cmの礫少量、炭化物少量混

図18　遺構実測図（1：100）

3．まとめ

今回の調査では、全てのトレンチで石炭殻の堆積を確認し、１トレンチと４トレンチではその下層に土取り穴の埋土を確認した。土取りの時期は、埋土に遺物が含まれないため不明であるが、土取り穴と石炭殻は調査地全域に広がっていると推測される。１トレンチと４トレンチの断割調査では、それぞれ標高43.3m、43.2mまで掘り下げたが、土取り穴の底は検出できなかった。今回の調査地の約20m南西で行われた調査[4]では、標高45.5mで平安時代後期から鎌倉時代の整地層が検出され、標高45.2m前後で自然堆積層が確認されている。また、今回の調査地の西側で行われた調査[5]では、標高45.0m前後で自然堆積層が確認されている。これらのことから、今回の調査地では、遺構は土取り穴によって全て削平されたと考えられる。平安宮内裏外郭南限築地の発見は、今後の調査に期待される。

註

1）『平安宮跡　1974　京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅰ』　京都市文化観光局　1975年

2）「平安宮内裏跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988年

3）『京都市遺跡地図台帳　第８版』　京都市文化市民局　2007年

4）当報告書　Ⅰ章

5）前掲註１に同じ

Ⅲ　平安宮左兵衛府・侍従所跡

1．調査経過

調査地は下立売通の北側に面した南北約35m・東西約6.6mの縦長の敷地である。当地周辺は平安宮内裏の東方官衙地域であるとともに、衆楽第推定地の南方に該当する。1978年に住宅建設に伴い当敷地道路寄りの約10mを発掘調査し（以下１次調査）、平安時代前期の遺構・遺物を良好な状態で検出している。今回、集合住宅建設が予定された対象地はその北側にあった工場の跡地で、１次調査で確認した遺構の延長部が存在することが予想された。１次調査の時点ではこれらの遺構を平安宮左兵衛府の西側道路東側溝および築地基底部と推定していたが、その後の精密な基準点測量の結果、現在では左兵衛府とその西側に存在した侍従所との間の道路部分であることが確認されており、築地基底部と推定した整地土は道路面の整地と判断している。

当初敷地の北寄りに南北約16m・東西５mの調査区を設定し調査を進めたが、この範囲では予想された平安時代の遺構は調査区北端で検出した土坑の一部のみで、他は江戸時代の整地層および土坑群ばかりであった。地山を確認するため、江戸時代の土坑底部から数箇所でボーリング調

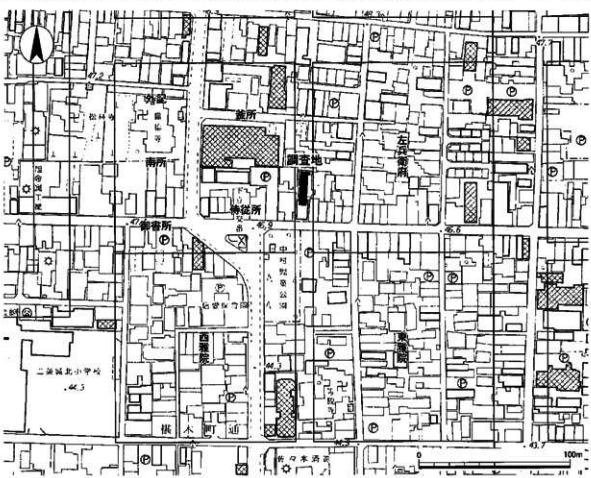


図19　調査位置図（１：2,500）

図20　調査区配置図（１：400）

査した結果、下層には近世初頭の遺物を含む土層が調査区のほぼ全域で表土下2.5m以深にも堆積していることが判明した。

この深く広範囲にわたる堆積が聚楽第の壕に関連する可能性を考慮し、底部確認のために調査区中央部に南北10m、東西２m、北壁沿いに東西４m、南北1.5mの確認トレンチを設け下層の掘下げを行った結果、表土下約１m前後で地山の褐色砂泥を検出し、この堆積が濠ではなく、接近して掘られた大規模な土採り穴に埋め戻された整地土であることが判明した。土採り穴は南部には拡がらず、地山の褐色砂泥が中央掘下げトレンチの南端部で急激に立ち上がりを見せ、それ以南では平安時代の遺構が残存している可能性が認められた。そのため調査区を約６m南に拡張して調査を進めた結果、１次調査で検出した平安時代前期の溝と道路面の延長部を検出した。

図21　調査前全景（南から）

図22　調査風景（南東から）

2．遺　構

（1）基本層序

調査地の標高は46.8m前後で、層序は地表から約0.3mが現代層、その下部に0.8～1.0mの江戸時代後期の土層が堆積している。調査区南部ではこの江戸時代後期の土層直下で平安時代の路面および溝を検出したが、北部のほぼ全域では江戸時代前期の土採り跡を埋め戻した土層が深くまで認められ、表土下3.0～3.2mで地山の褐色粘質土を確認している。この土層は平安時代の遺構が残存していた南部では表土下1.6m程で検出しており、堆積の厚さは1.5mを超えるものと想定される。このような褐色粘質土の厚い堆積がこの周辺に、大規模な土採り穴が密集している要因であろう。

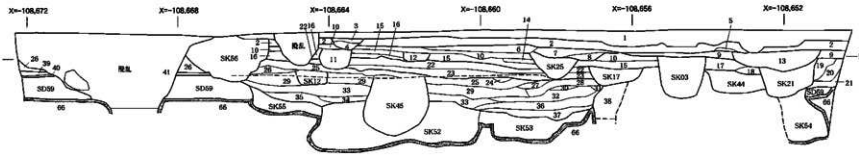
（2）江戸時代の遺構（図24、図版４・５）

江戸時代の遺構は17世紀前半の土採り穴と、17世紀後半以降のゴミ廃棄土坑が大半を占める。SK52・SK53・SK54などの土採り穴は大規模で深く、南拡張区以北のほぼ全面に分布する。褐色粘質土をより多く採取するため袋状に掘られた穴が多い。礫混じりの埋土には17世紀前期から中期の遺物が含まれるが、ゴミ廃棄土坑のような集中的な出土はみられず散発的で、破片の接合率も低く、土を採取した後の埋め戻しの際に他所から運ばれた土に混じっていたものが攪拌されているような状況であった。

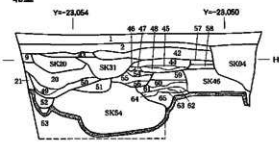
表5　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代前期 （8世紀末～9世紀初頭）	SK46 SD59 SF60	土坑　遺物多量に出土 溝状土坑　遺物多量に出土 左兵衛府・侍従所間の道路面
江戸時代前期 （17世紀）	SK11・SK12・SK17・SK18・ SK24・SK25・SK26・SK27・ SK28・SK29・SK33・SK34・ SK35・SK37・SK40・SK44・ SK45・SK50・SK51・SK52・ SK53・SK54・SK55 Pit58	SK35・SK45など遺物多い SK52・SK53・SK54・SK55は土採穴 SK12は底部に桶底板の痕跡
江戸時代中期 （18世紀）	SK03・SK08・SK09・SK10・ SK13・SK14・SK15・SK16・ SK19・SK23・SK30・SK31・ SK32・SK36・SK41・SK42・ SK43・SK47・SK48・SK49・ SK57	大半がゴミ廃棄土坑 SK03・SK19からは多量の土器類が出土
江戸時代後期 （19世紀）	SK01・SK02・SK04・SK05・ SK06・SK07・SK20・SK21・ SK22・SK38・SK39・SK56	大半がゴミ廃棄土坑

西壁



北壁



1 現代層
2 2.5Y 黒褐色砂泥
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 礫・瓦混
4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 炭片混
5 10YR3/2 黒褐色砂泥 黄褐色シルト混
6 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混
7 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭片混
8 10YR3/2～3/3 黒褐色砂泥 やや粘質
9 10YR3/3 暗褐色砂泥
10 10YR3/3 暗褐色砂泥 黄褐色シルト・礫混
11 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
12 10YR4/2～3/2 黒褐色砂泥 礫・炭片混
13 10YR2/1～2/2 黒色砂泥
14 10YR3/2 黒褐色砂泥 良く締まる
15 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 礫・炭片混
16 10YR3/3 暗褐色シルト 炭片混
17 10YR3/1 黒褐色砂泥
18 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 土師器片・炭片混
19 2.5Y2/1～3/1 黒色砂泥 粘質炭片混
20 10YR4/4 褐色シルト
21 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
22 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混
23 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
24 2.5Y2/1 黒色砂泥
25 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
26 10YR3/2 黒褐色砂泥
27 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 やや粘質
28 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
29 10YR4/2～4/3 にぶい黄褐色砂泥
30 10YR3/2 黒褐色砂泥
31 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 礫多量に含む
33 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
34 2.5Y4/2～4/3 暗灰黄色砂泥 礫混
35 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・土師器片混
36 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭片混
37 2.5Y3/1 黒灰色砂泥 炭・土師器片混
38 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭片混
39 10YR3/3 暗褐色砂泥
40 10YR3/2 黒褐色砂泥 固く締まる
41 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混 固く締まる
42 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・瓦片混
43 10YR2/2 黒褐色砂泥
44 2.5Y3/1 黒色砂泥 土師器片混
45 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 礫混
46 10YR3/3 暗褐色砂泥
47 10YR3/2 黒褐色砂泥 土師器片含む
48 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 土師器片混
49 2.5Y2/1 黒色砂泥 炭片混
50 10YR1.7/1 黒色砂泥
51 10YR3/2 黒褐色砂泥 小礫・土師器片含む
52 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭片多く含む
53 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
54 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
55 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混
56 10YR2/3 暗褐色砂泥
57 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
58 10YR4/4 褐色砂泥
59 10YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質
60 10YR3/3 暗褐色砂泥
61 10YR2/3 黒褐色砂泥
62 10YR4/6 褐色シルト
63 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 やや粘質
64 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
65 10YR4/4 褐色砂質
66 10YR4/4 褐色粘質土 均質で固く締まる（地山）

図23 西壁・北壁断面図（1：100）

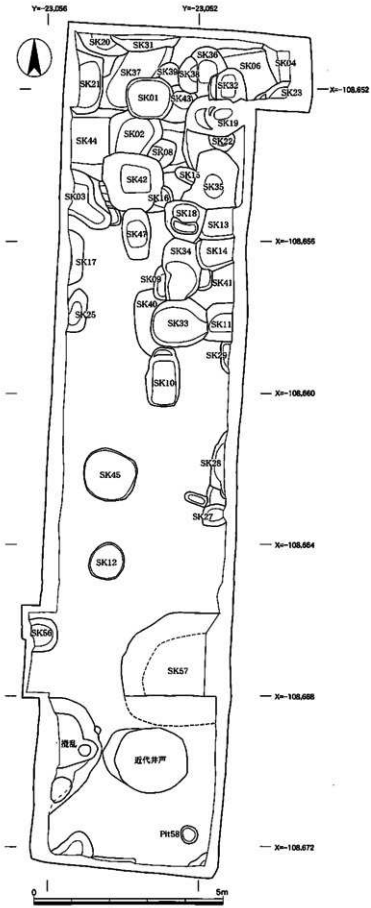


図24　遺構平面図1（1：100）

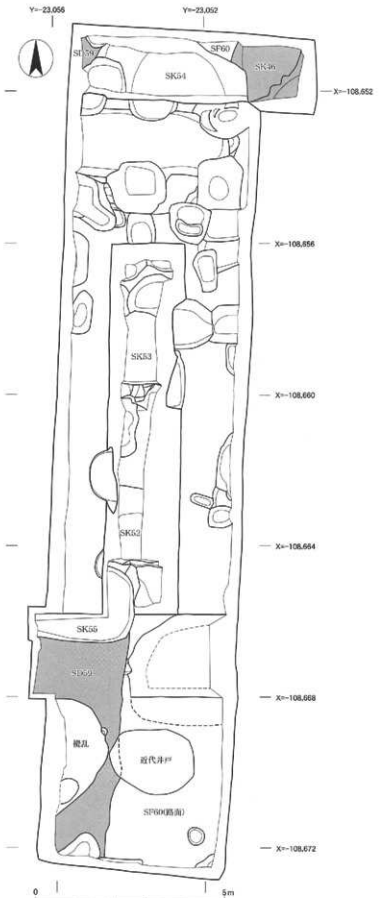


図25　遺構平面図２（１：100）

江戸時代のゴミ廃棄土坑と考えられる土坑群は調査区南部では少なく、北半に密集している。これらの土坑群の中で出土遺物からみて最も古く位置づけられるものはSK35・SK44で、いずれも17世紀中頃と推定される。この付近での一連の土採りが終息した直後に成立したゴミ廃棄施設とみられる。これ以降も調査区北部では17世紀後半から連続して中小規模のゴミ廃棄施設が重複した位置に掘られているが、これらは下立売通に面した町屋の裏手にあたる位置にゴミ廃棄施設が継続的に作られた結果ととらえられる。

以上のような江戸時代の遺構のありかたからみて、この付近は聚楽第廃絶後しばらくは空閑地になり広汎に土採りがなされた後、整地され町屋地として再開発されるに至ったと推定できる。

（3）平安時代の遺構（図25・26、図版５・６）

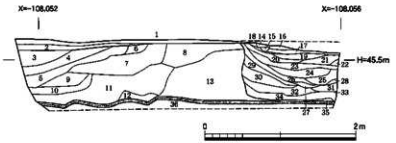
今回検出した平安時代の遺構は土坑SK46・溝SD59・路面SF60の３基である。

土坑SK46は東・西・南の３方を江戸時代の遺構により切り取られていたためその一部（東西・南北）を検出しただけで平面規模は不明であるが、調査区北壁側では肩部から底部まで良好に遺存していた。北壁断面では底部は肩から約0.6mで水平に拡がり、約1.5m東でさらに深く下がっている。この深まりの肩部は北東から南西の斜方向である。土坑内には炭片や土器類を多量に含んだ土層がほぼ水平に重なり、最下層が深まりに流れ込むように堆積している。この深まり部分はさらに東方へ拡がるようであるが、調査区外のため深さは未確認である。８世紀末～９世紀初頭の土器類が多量に出土した。

溝SD59は１次調査で検出したSD４の延長部で、前回と同様に東肩部から底部にかけて長さ約６mを検出した。さらにこの溝の延長上の調査区北西隅で、炭片や遺物を多量に含む堆積土を確認した。肩部を近世の廃棄土坑や土採り穴で破壊されており、溝としての形状は残っていないが、遺物の内容や堆積土・検出位置からみておそらくこの溝の一部と考えられる。底部が北に立ち上がる形跡が認められ、溝がこの部分で途切れている可能性がある。溝内の堆積土は土器類や炭・焼土片を多く含んだ土層が遺物をあまり含まない暗褐色や黄褐色砂泥を挟んで重層しており、数度にわたって不要物が東側から投棄された状況を示している。遺物は多量の土器類のほか轡の羽口や砥石・石材剥片など、近辺で手工業生産が行われていた可能性を示すものもある。こうした遺物や炭・焼土片の分布状

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
2　10YR4/4 褐色砂泥
3　10YR3/3 暗褐色砂泥　小礫含む
4　10YR3/2 黒褐色砂泥　礫混
5　10YR4/2 灰黄褐色粘質砂泥　炭・土器片多量に含む
6　10YR4/4 褐色砂泥　炭・土器片含む
7　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質砂泥　炭・土器片多量に含む
8　10YR3/3 暗褐色砂泥
9　10YR6/6 明黄褐色粘質土　炭混
10　10YR3/2 黒褐色粘質砂泥　炭土器片混
11　2.5Y3/1 黒色砂泥　土師器片混
12　2.5Y3/2 黒褐色砂泥　礫混
13　2.5Y3/1 黒褐色砂泥　土師器片混
14　10YR3/2 黒褐色砂泥　やや粘質
15　10YR3/3 暗褐色砂泥
16　10YR4/6 褐色シルト
17　10YR4/2 灰黄褐色砂泥　やや粘質
18　10YR4/4 褐色砂礫
19　褐色粘質土　均質で固く締まる（地山）

図26　SK46断面図（１：50）



1 10YR3/4 暗褐色砂泥 非常に固く締まる
2 10YR4/4 褐色砂泥 非常に固く締まる
3 10YR4/4 褐色砂泥とシルト混じる
4 10YR3/2 黒褐色砂泥 小礫混
5 10YR3/2 黒褐色砂泥
5 10YR3/4 暗褐色砂礫
7 10YR3~4/4 暗褐色砂礫+粗砂
8 10YR4/4 褐色泥砂 固く締まる
9 10YR3/4 暗褐色砂礫
10 10YR4/4 褐色砂礫
11 10YR4/4 褐色粘質土 均質
12 10YR3~4/4 暗褐色粘質土 良く締まる
13 10YR4/4 褐色粘質土 11よりやや明
14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 良く締まる
15 10YR2/2 黒褐色砂泥 固く締まる
16 10YR3/2 黒褐色砂泥 小礫混
17 10YR3/4 暗褐色砂泥 良く締まる
18 10YR3/4 暗褐色砂泥 小礫混
19 10YR3/3 暗褐色砂泥 小礫混
20 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土器片含む
21 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 土器片多く含む
22 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 炭・土器片多く含む
23 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
24 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土・土器片含む
25 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 オリーブ褐色砂泥混
26 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 やや粘質 炭・土器片多量に含む
27 10YR4/4 褐色粘質土
28 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭・土器片多量に含む
29 10YR3/3 暗褐色砂泥+褐色粘質土
30 10YR3/3 暗褐色泥砂 やや砂質
31 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 黒色粘質土混
32 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭・土器片多量に含む
33 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 礫混 土器片多量に含む
34 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
35 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
36 10YR4/4 褐色粘質土 均質で固く締まる（地山）

図27 南セクション断面図（1：50）

態には1次調査の成果との連続性が認められる。この溝は1次調査の所見では宮内道路の側溝と推定していたが、今回の調査結果とあわせてみると方位が大きく東に振れていることが判明した。前述したように北へ延長しない可能性や溝内の埋土に多量の遺物が含まれている点などを合わせ、道路側溝ではなく宮の造営期に役所間の道路部分に南北に長く掘られた廃棄土坑の可能性がある。

路面SF60は南拡張区と北部SK46の上部で確認した。2～3層の礫を含む硬化した土層が水平に重なり上面は非常に固く締まっている。この路面整地層は溝の肩部を覆っており、路面の成立がSD59埋没後であることを確認している。

3．遺　物

今回の調査の結果、整理箱にして50箱の遺物が出土した。出土遺物の大半は平安時代と江戸時代のもので、それ以外の時期に属するものはほとんど出土しなかった。遺物の内容は大半が土器類で、ほかに少量の瓦類・金属製品・土製品・石製品がある。ここではまず土器類について時期を追って述べ、その後に他の遺物に関して種類ごとに記述して行きたい。

（1）平安時代の土器類

SD59出土土器類（図28～31、図版７～10、表７・８）　総破片数は7,762片で、土師器・黒色土器・須恵器・製塩土器がある。破片が大きく、完形あるいはそれに近いものも多く、残存状態も良好である。器種・器形別の比率は表７のとおりである。

土師器には椀AⅠ・椀AⅡ・椀C・椀B・杯A・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・皿B・杯B・蓋・壺E・鉢・高杯・甕など多くの器形がある。椀AⅠ（３～20）は口径13.2cm・器高3.7cm前後で、外面をヘラケズリ調整したものが95％以上を占めるが、外面に粗いヘラミガキを施したもの（19）やナデ調整だけのもの（20）が少量ある。椀AⅡ（１・２）は口径10.0cm・器高3.2cm前後で、すべて外面をヘラケズリ調整している。椀AⅠに対して出土量は少ない。椀C（21）は口径13.2cm・器高4.0cmのものが１点出土している。口縁部を強くナデ調整し、外面はオサエで接合痕を残す。椀B（91）も１点のみの出土である。口径18.0cm・器高5.5cmで、調整は粗く、胎土もやや粗粒である。外面下方を粗くヘラケズリし、細い高台を付ける。口縁部外面に粗略なヘラミガキを施し、内面には螺旋状の暗文を施す。杯A（22～33）は口径15.9cm・器高3.8cm前後と口径18.0cm・器高4.1cm前後の２群に分けることもできるが、椀Aや皿Aほどの明瞭な差がないため、ここでは１群として扱った。椀Aと同様に大半が外面にヘラケズリを施したものだが、口縁部をナデ調整し底部だけをヘラケズリするもの（32）やヘラケズリを全く施さないもの（33）が少量ある。皿AⅠ（48～55）は口径19.9cm・器高2.7cm前後、皿AⅡ（34～47）は口径16.4cm・器高2.6cm前後で、椀A・

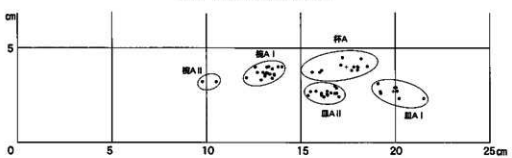
表６　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品、土製品		土師器162点、須恵器56点、黒色土器３点、緑釉陶器８点、白色土器１点、灰釉陶器２点、輸入陶磁器１点、瓦２点、石製品３点、金属製品１点、土製品７点	５箱	３箱
江戸時代	土師器、国産施釉陶器、国産磁器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品		土師器37点、国産施釉陶器48点、国産磁器15点、焼締陶器３点、輸入陶磁器２点、瓦３点、石製品２点、金属製品15点（銭貨８点）	３箱	28箱
合　計		50箱	375点（11箱）	８箱	31箱

表7　平安時代土器破片数

種類	器形	SD59			SK46			合計		
		破片数	比率1	比率2	破片数	比率1	比率2	破片数	比率1	比率2
土師器	椀・杯・皿	6924	93.3%		4771	94.2%		11695	93.7%	
	高杯・盤	153	2.1%		87	1.7%		240	1.9%	
	甕・鍋・釜	290	3.9%		190	3.8%		480	3.8%	
	その他	52	0.7%		16	0.3%		68	0.5%	
	不明	3	0.0%		0	0.0%		3	0.0%	
	小計	7422	100.0%	95.6%	5064	100.0%	95.6%	12486	100.0%	95.6%
黒色土器	椀・杯・皿	5	100.0%		28	100.0%		33	100.0%	
	甕	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	鉢	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	その他	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	不明	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	小計	5	100.0%	0.1%	28	100.0%	0.5%	33	100.0%	0.3%
須恵器	椀・杯・皿	241	75.5%		151	76.3%		392	75.8%	
	壺瓶	31	9.7%		25	12.6%		56	10.8%	
	鉢	24	7.5%		16	8.1%		40	7.7%	
	甕大壺	23	7.2%		6	3.0%		29	5.6%	
	その他	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	不明	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	
	小計	319	100.0%	4.1%	198	100.0%	3.7%	517	100.0%	4.0%
緑釉陶器	椀・杯・皿	0	-		0	0.0%		0	0.0%	
	壺瓶	0	-		0	0.0%		0	0.0%	
	その他	0	-		6	100.0%		6	100.0%	
	不明	0	-		0	0.0%		0	0.0%	
	小計	0	-	0.0%	6	100.0%	0.1%	6	100.0%	0.0%
その他	製塩土器	16	100.0%	0.2%	0	-	-	16	100.0%	0.1%
総数		7762		100.0%	5296		100.0%	13058		100.0%

表8　SD59土師器高径分布



杯Aと同様に外面にヘラケズリを施したものが大半を占めるが、底部だけをヘラケズリし口縁部にナデ調整を残すⅢAⅠ（54）やⅢAⅡ（44～47）、ヘラケズリを施さないⅢAⅠ（55）などが少量ある。ⅢC（74）は口径8.1cm・器高1.6cmの小型のⅢで、口縁部はナデ調整、底部はオサエ調整である。図示したもののほかに、もう1点出土している。ⅢB（92）は口径23.6cm・器高2.9cmで、底部はヘラケズリし高台を貼り付ける。口縁部外面にヘラミガキを施すが、器表が磨滅し単位は不明瞭である。杯B（67～73）は口径19.5cm・器高5.7cm前後（67～70）、口径25.7cm・器高8.7cm前後（71・72）と口径28.7cm・器高9.2cm（73）の3群に分けることができるが、最大のものは1点出土しているだけである。いずれも底部に低い高台を貼り付け、外面にはヘラミガキを施す。小型の杯B（67）は口縁部の1箇所に径6mmの小孔が穿たれている。小型のものと大型のも

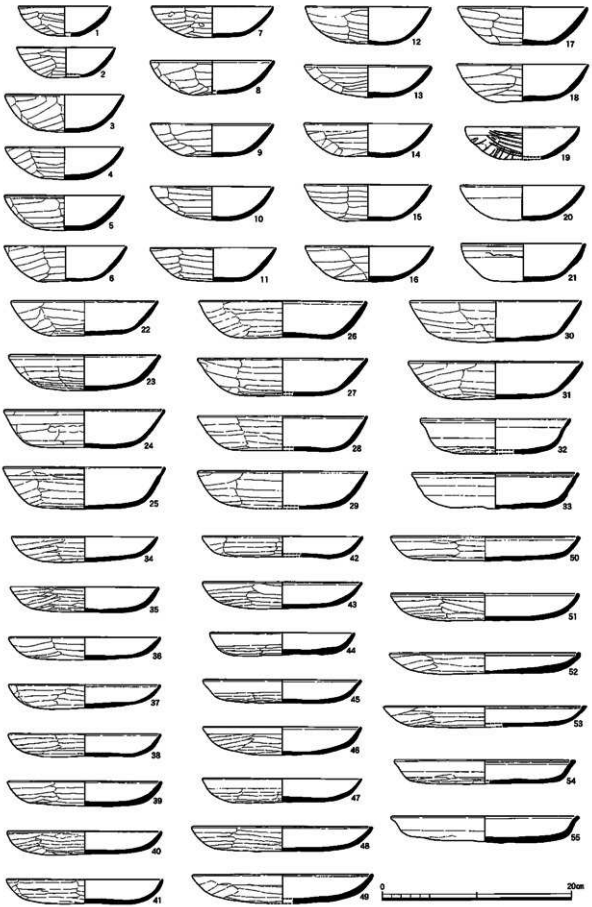


図28　SD59出土土器実測図1（1：4）

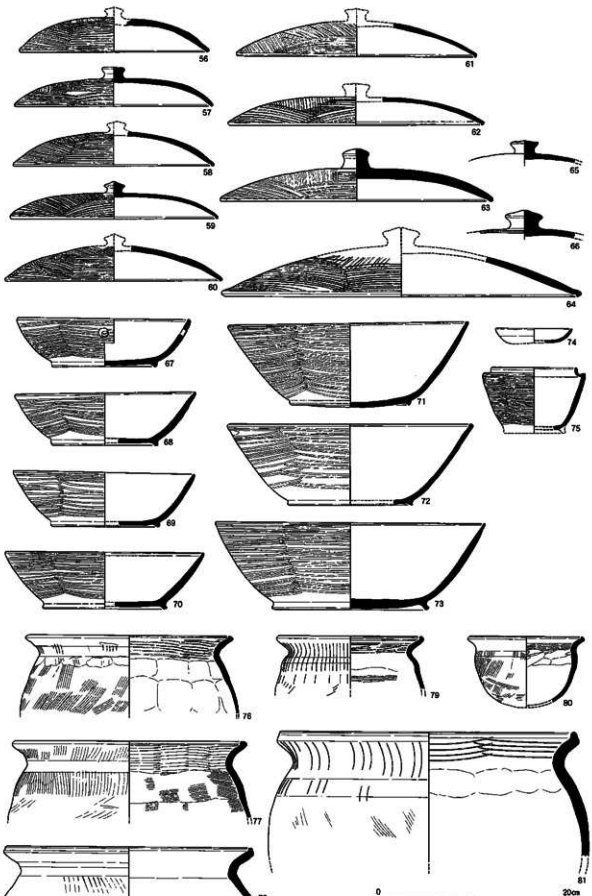


図29　SD59出土土器実測図２（１：４）

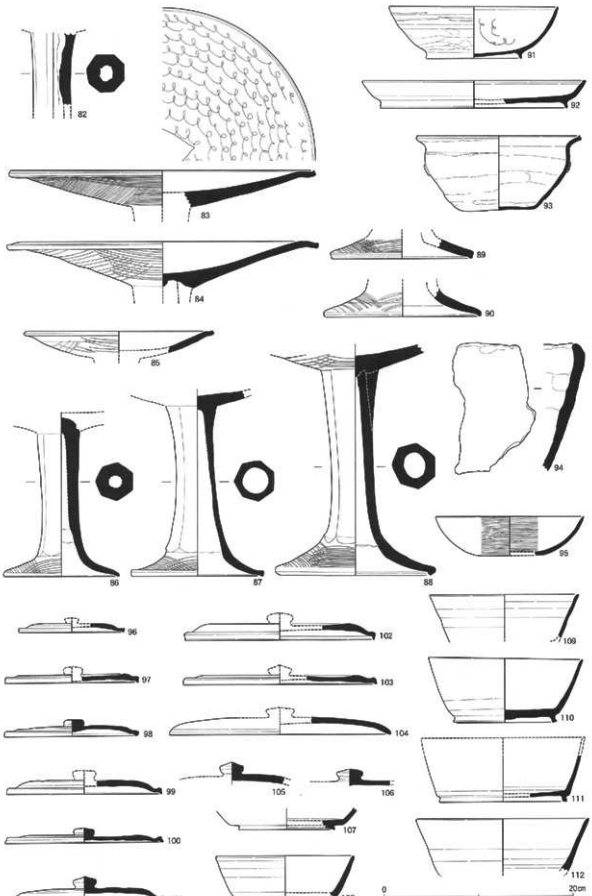


図30　SD59出土土器実測図３（１：４）

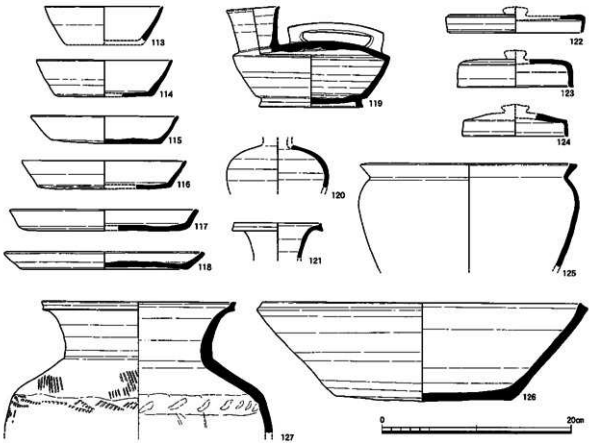


図31　SD59出土土器実測図４（１：４）

ので高径比が異なり、後者は器高が高い。蓋（56～66）には口径21.2cm・器高4.1cm前後（56～60）、口径26.3cm前後のほか口径29.0cm・器高5.6cm（63）や口径38cmを超える大型のもの（64）がある。前２者は杯Bと組み合うものとみられるが、大型のものに対応する器形はここでは出土していない。図示したつまみ部は65が61・62など、66が64のような大型品に伴うものと考えられる。蓋の天井部外面にはつまみ部周辺を除きヘラミガキが施されている。壺E（75）は口径9.0cm・最大径10.9cmで、体部外面を密にヘラミガキ調整している。高台は剥離しており残高6.5cmである。鉢（93）は口径17.5cm・器高8.0cmで、口縁部下方の対抗する２箇所に径１cmほどの粘土円盤を貼り付ける。粘土紐の接合痕を残し粗い造りである。墨書人面土器によくみられる器形である。高杯（82～90）は杯部では口径32.8cm前後のもの（83・84）と20.1cmの小型品（85）があり、脚部では脚高15.0cm・裾部径12.3cm（86）、脚高17.6cm・裾部径14.1cm（87）、脚高19.6cm・裾部径17.0cm（88）の３種があるほか、裾部径15.2cm（89）と16.7cmのもの（90）がある。いずれも杯部と裾部の外面にヘラミガキを施す。ほとんどのものが芯を用いて軸部を成形し、断面７角形に面取りするが、82は芯を用いず、断面を８角形に仕上げている。83には杯部内面に螺旋暗文が同心円状に施されている。甕（76～81）には口径で32.0cm（81）、24.5cm前後のもの（76～78）、15.6cm（79）や、12.4cmの小型品（80）がある。大半が外面ハケメ調整。内面はナデ調整を施すが、ハケメを残すものもある。口縁部内面には横方向に粗いハケメを残すものが多い。

黒色土器には口径15.7cm、器高5.1cmの杯（95）がある。内外面ともに密にヘラミガキ調整し、

内面を黒色化している。

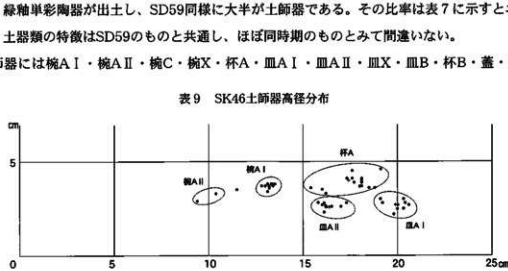
須恵器には杯A・杯B・杯蓋・皿C・平瓶・壺M・壺L・壺蓋・鉢D・鉢A・甕がある。杯A（113～116）には113・114と115・116のように高径比の異なる2種があり、さらに口径差による2群が認められる。杯B（107～112）には口径14.7cm（108）、口径16.1cm前後（109・110）、口径18.4cmの3種がある。胎土や高台の特徴から107は美濃須衛産、110は播磨産と推定できる。杯蓋（96～106）は口径で11.2cm（96）、14.3cm（97・98）、16.8cm前後（99～101）、20.4cm前後（102・103）の4群と、口径が23.5cmと大きく、通常の蓋と異なり口縁端部を屈曲させず単純に下方に丸く収めるもの（104）がある。つまみ（105・106）は102・103などのような大型品に伴うものであろう。皿C（117・118）は口径20.6cm・器高2.1cm前後。内面と口縁部のナデは丁寧だが、底部外面の調整は粗くヘラ切り痕を明瞭に残す。平瓶（119）は最大径16.7cm・器高10.6cm。体部と取手の上面には厚く灰釉が掛かるが、施釉したものではなく降灰釉である。猿投窯の製品であろう。壺M（120）は肩部から体部上半にかけての破片である。最大径10.8cm。壺L（121）は口径9.6cmの口縁部の破片である。一部に自然釉が付着していたようであるが、剥落している。壺蓋（122～124）は口径12.5cm（122）、12.2cm（123）、11.2cm（124）の3点がある。天井部から口縁部にかけての形状がそれぞれ異なっており、別産地の製品と考えられる。123の天井部にはうすく降灰釉が掛かる。124は胎土や形態の特徴からみて猿投窯の製品であろう。鉢D（125）は口縁部が「く」字状に屈曲する鉢で、通常底部には高台が付く。口径23.0cmのものを図示したが、小型のものも数点出土している。鉢A（126）は口径35.0cm・器高10.4cm。底部は平底で、ヘラケズリしている。体部から口縁部は外方に大きく開き、口縁端部は丁寧にナデ調整している。甕（127）は口径20.5cm。肩部に強いタタキ目を残す。口縁部内外面は丁寧にナデ調整する。胎土や形態、焼成状態からみて播磨産の可能性が高い。

製塩土器（94）はひずみが大きく口径は明らかではないが、同時期の類例からみて15cm前後と推定される。胎土中に石粒を多く含みオサエやナデ痕を残す粗い造りである。

SK46出土土器類（図32～34、図版11～13、表7・9）　総数5,296片の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉単彩陶器が出土し、SD59同様に大半が土師器である。その比率は表7に示すとおりである。土器類の特徴はSD59のものと共通し、ほぼ同時期のものとみて間違いない。

土師器には椀AⅠ・椀AⅡ・椀C・椀X・杯A・皿AⅠ・皿AⅡ・皿X・皿B・杯B・蓋・壺E・

表9　SK46土師器高径分布



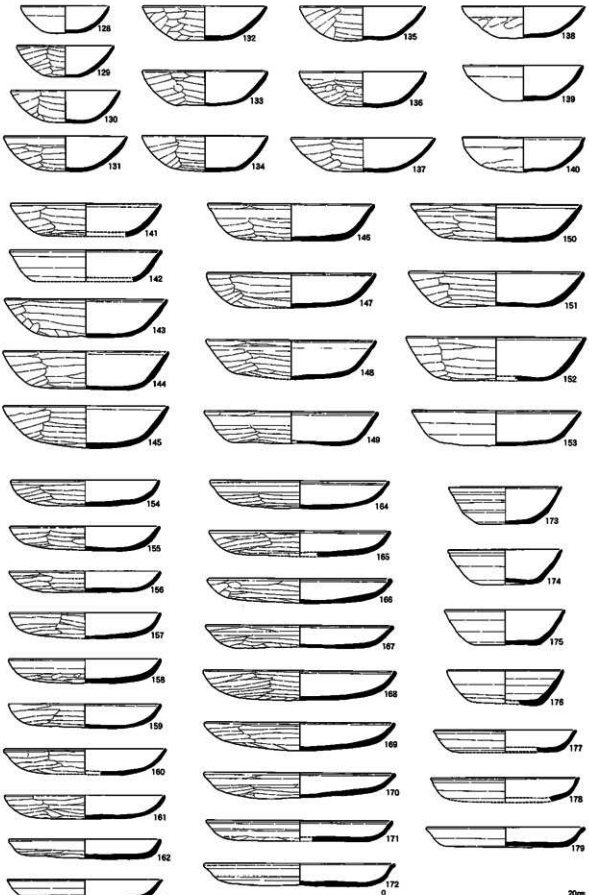


図32　SK46出土土器実測図１（１：４）

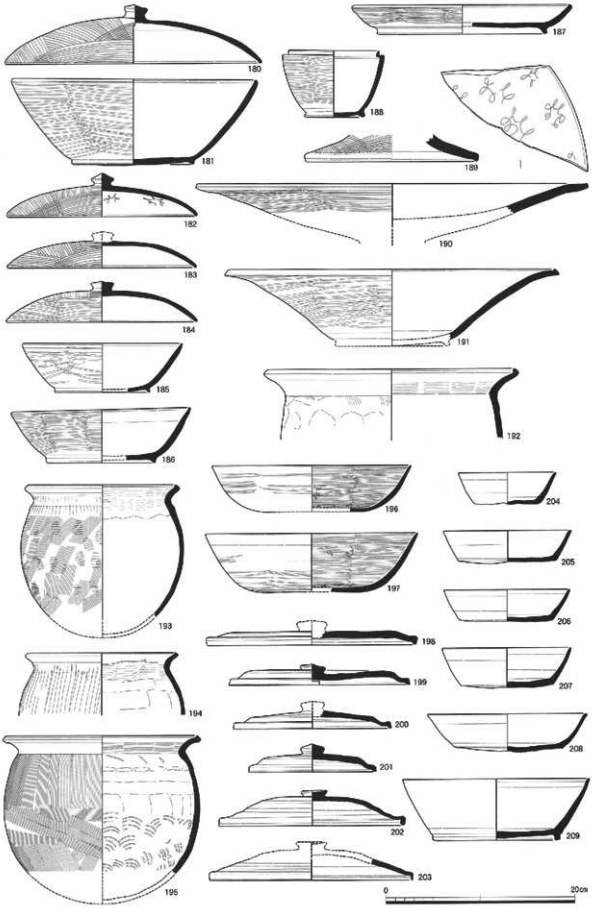


図33　SK46出土土器実測図２（１：４）

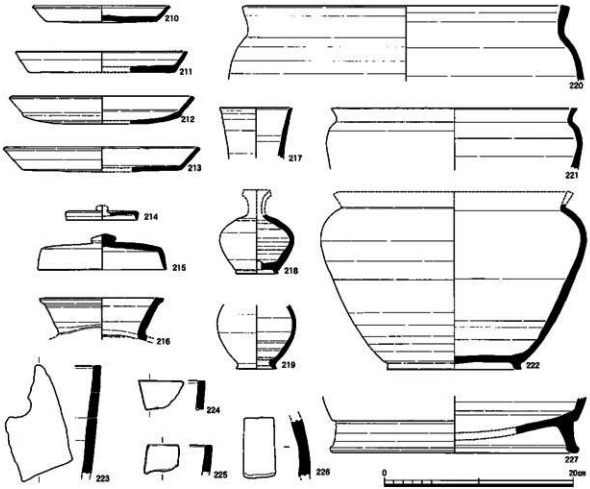


図34　SK46出土土器実測図３（１：４）

鉢・高杯・盤・甕などがある。椀AⅠ（130～139）は口径13.2cm・器高3.7cm前後で、大半のものが外面をヘラケズリ調整するが、ナデとオサエ調整だけのもの（138・139）が少量ある。また口径15.4cm・器高3.6cmと通常の椀AⅠより大きなもの（137）が１点ある。椀AⅡ（128・129）は口径10.0cm・器高3.2cm前後で、外面をヘラケズリ調整するもの（129）とナデとオサエ調整だけのもの（128）がある。椀C（140）は口径13.0cm・器高3.7cm。口縁部のナデが強く上方に立ち上がる。外面は粗いオサエ調整で接合痕を残す。椀X（173～176）は口径12.3cm・器高3.8cm前後。口縁部を２～３段にナデ調整し、底部外面はオサエ調整。平安京での出土例は少なく、胎土も通常の土師器とは異質で、他地域の製品と考えられる。杯A（141～153）は口径16.1cm・器高3.4cm前後と口径18.1cm・器高4.0cm前後の２群があるが、図示したもの以外にはその中間に位置するものも少量あるため、SD59と同様に１群として扱った。大半が外面にヘラケズリを施したものだが、ヘラケズリを全く施さないもの（142・153）も少量ある。皿AⅠ（164～172）は口径20.0cm・器高2.7cm前後、皿AⅡ（154～163）は口径16.4cm・器高2.6cm前後で、椀A・杯Aと同様に外面にヘラケズリを施したものが大半を占めるが、底部だけをヘラケズリし口縁部にナデ調整を残す皿AⅠ（171）や皿AⅡ（162）、ヘラケズリを施さない皿AⅠ（172）や皿AⅡ（163）などが少量ある。皿X（177～179）は椀Xと胎土や製作技法である。口径15.5cm前後のもの（177・178）と17.1cm

のもの（179）がある。皿B（187）は口径26.1cm・器高3.0cm。底部はヘラケズリ後ナデ調整。外周に高台を貼り付ける。口縁部外面にヘラミガキを施す。杯B（181・185・186）には口径17.0cm・器高5.2cm（185）、口径19.0cm・器高5.8cm（186）、口径26.1cm・器高9.1cm（181）の3種がある。底部に低い高台を貼り付け、外面にはヘラミガキを施す。SD59の資料と同様に大型のものの器高は高い。蓋（180・182～184）には口径20.2cm・器高4.4cm前後のもの（182～184）と、大型の杯Bに対応する口径27.2cm・器高6.3cmのもの（180）がある。蓋の天井部外面はヘラミガキ調整で、182の内面には螺旋状の暗文が施されている。壷E（188）は口径9.2cm・器高7.1cm・最大径10.8cm。体部外面を密にヘラミガキ調整している。底部に高台を貼り付ける。高杯脚裾部（189）は径18.5cm。外面はヘラミガキ調整。杯部（190）は口径41.6cm。外面にヘラミガキを、内面には螺旋状暗文を配する。盤（191）は口径35.4cm・残高7.4cm。体部から口縁部にかけ外反気味に大きく開く。外面にはヘラミガキ調整を施す。甕（192～195）には口径で27.0cm（192）、21.0cm（195）、16.3cm前後のもの（193・194）がある。外面の調整は192がタタキ、193がタタキ後ハケメ、他はハケメ調整である。195の内面には同心円状の当て具痕を残す。

黒色土器は杯が2点（196・197）出土した。196は口径21.4cm・器高4.9cm、197はやや大型で口径22.4cm・器高6.3cmと深みがある。内外面ともにヘラミガキしているが、外面のミガキはやや粗い。内面にはミガキの上に暗文を施している。

須恵器には杯A・杯B・杯蓋・皿C・壷蓋・平瓶・壷M・鉢D・甕Dがある。杯A（204～208）には口径10.4cm・器高3.4cm（204）、口径13.6cm・器高3.7cm前後（205～207）、口径16.9cm・器高4.1cm（208）の3種がある。すべて底部はヘラ切りである。杯B（209）は口径19.8cm・器高6.5cm。底部外周に高台を貼り付ける。このほかやや小型のものがあるが、破片が小さく図示できない。杯蓋の形態には平坦な天井部と屈曲する口縁部を持つ通常のもの（198～201）と天井部にふくらみをもち口縁部を下方に折り曲げるもの（202・203）の2種がある。後者は猿投窯の製品である。前者には口径13.6cm（201）、16.8cm（200）、19.2cm（199）、22.4cm（198）の4種がある。202は口径19.8cm・器高3.8cm。器表は暗茶褐色を呈し、上面に降灰釉が斑状にうすく掛かる。203は口径21.6cmで、胎土や色調は202と類似する。皿Cには口径14.5cm・器高1.8cm（210）、口径18.2cm・器高2.2cm（211）、口径20.8cm・器高2.6cm（213）の3種がある。底部外面にはヘラ切り痕を残す。212は口径19.6cm・器高2.9cmで、底部はふくらみをもちヘラケズリしているなど通常の皿Cとは異なる。壷蓋は口径7.6cmの小型品（214）と口径13.6cm・器高3.6cm（215）の2種がある。215の上面には自然釉が掛かる。平瓶（217）は口縁部のみの破片だが、端部の特徴や形状から平瓶と考えられる。口径7.7cm。壷M（218・219）はともに体部のみで口頸部は欠失している。胴径は218が7.9cm、219cmが8.4cm。横瓶（216）は口縁部のみの破片である。口径13.2cmで、内面の一部に当て具痕が残る。鉢Dはやや大型のものが2点（221・222）出土した。221は口径26.1cm、222は口縁部が欠失しているが、ほぼ同様の大きさであろう。底部はヘラ切りをナデ調整し、高台を貼り付ける。甕D（220）は口径34.6cm。肩部は緩くすぼまり、口縁部はやや拡がり気味に直立する。内外面ともナデ調整。

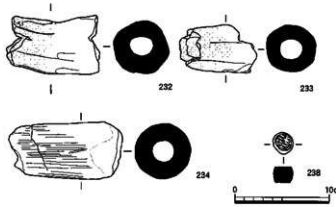


図35　輪羽口・瓦加工品実測図（1：4）

緑釉単彩陶器（223～227）は炉が出土している。226・227は胴部に細い長方形の透かし孔を付けるタイプで、類例が多いが、223～225はやや上方に開く円筒状を呈し、口縁部付近に宝珠形の透かし孔をあける。これまで類例のない形態である。口縁端部内面と外面に施釉している。227は底部外面には施釉しない。

墨書土器（図版14）　SD59・SK46から墨書土器[12]が5点（210・228～231）出土している。210は須恵器皿Cの底部外面中央付近に「織」と書かれている。その上にも墨痕が認められるが、判読できない。228は土師器（おそらく杯A）底部外面に「(私)□節」の2文字が確認できる。229は土師器椀A底部外面に1文字が墨書されている。「美」に近いが確定できない。230・231もおそらく土師器椀Aの底部外面である。墨痕は認められるが、判読できない。

土製品（図35、図版14）　輪羽口は、小破片を含め10数点出土したが、SK46から出土した1点（234）以外すべてSD59からの出土である。232は径6.0cm・残長10.0cm。先端がやや屈曲している。233は径5.2cm・残長8.0cm。234は径6.0cm・残長12.1cm。外面にはハケメ痕が残る。

とりべ（235～237）は、須恵器杯Aを転用したもので焼けひずみ変形している。これ以外に土師器椀Aを転用したものが数片ある。

瓦加工品（238）は、平瓦の小片の周囲を粗く研磨し径2cm程の略円形に加工している。用途は不明である。

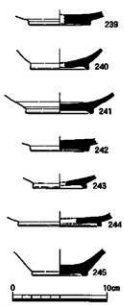


図36　その他の平安時代の土器実測図（1：4）

その他の平安時代の土器類（図36、図版14）　遺構に伴うものではないが、近世の土採り穴などから9世紀中頃以降の土器類が少量出土した。主要なものを掲載しておく。

緑釉陶器（239～241）　239は底部は削り出しの蛇の目高台の皿で、底径は6.3cm。淡緑色の釉は一部剥落しているが均質で厚い。山城洛北産の製品である。240は削り出し輪高台の椀。底径6.8cm。釉はうすく底部外面には施さない。小塩あるいは篠の製品か。241は貼り付け輪高台の皿で、底径7.2cm、内面底部にゆるい環状の段がある。釉は淡緑色で全面に掛けられているが、むらが多い。東海系の製品である。

白色土器皿（242）　削り出し幅広の輪高台の皿。底径6.1cm。内面にヘラミガキ痕跡が認められる。胎土はやや粗めで白色を呈する。

灰釉陶器椀（243・244）　243は底径5.8cmの椀。貼り付け高台の断面は丸みを帯びた方形でやや外側に張り出す。残存部分には釉は確認

できない。244は底径8.8cmのやや大ぶりの椀。高台は貼り付けで断面方形を呈する。降灰釉が内面に厚く掛かる。2点ともに猿投窯の製品である。

青磁椀（245）　底径6.0cm。輪高台の越州窯青磁である。オリーブ褐色の失透気味の釉が全面に施されている。

（2）桃山・江戸時代の土器類

桃山時代以降の土器類は土採り穴やゴミ廃棄土坑から出土しているが、ここでは土採り穴から出土した土器類はSK52・SK53のものを、ゴミ廃棄土坑から出土した土器類は17世紀代に属するSK45とSK35、18世紀代の資料としてSK19のものを掲載しておく。また、江戸時代の土器・陶磁器類の全体的な傾向をみるために、時期ごとに計数した破片数データを表10に示した。

SK52・53出土土器類（図37、図版15）　土師器・国産施釉陶器・焼締陶器がある。

土師器には皿S（246・247）・鍋（248）・ミニチュア擂鉢（249）がある。246は口径10.4cm・器高2.0cm、247は口径11.1cm・器高2.2cm。内面に圏線を持つ。248は口縁部の小片。口縁端部を小さく上方につまみ上げる。249は口径5.4cm・器高2.6cm。白色の精良な胎土で、内面に櫛目をつける。

国産施釉陶器には美濃鉄釉小杯（250）・天目椀（251）・志野茶椀（252）・志野向付（253）・唐津灰釉椀（254）がある。250は口径5.8cm・器高2.4cm。251は口径11.2cm。252は口径13.2cmで、腰部に稜を持つ形態である。253は底径6.6cmで、体部下方に横方向の線状の鉄絵が描かれている。254は口径10.3cm・器高5.7cm。

焼締陶器は信楽擂鉢（255）である。体部のナデ目が強く、櫛目の単位は6本である。赤褐色を呈し焼成は硬質。

SK45出土土器類（図37、図版15・16）　土師器・国産施釉陶器・焼締陶器・輸入磁器がある。

土師器には皿N・皿S・小壷がある。皿N（256・257）は口径5.6cm・器高1.2cm前後。手捏ねの粗製品である。皿S（260～264）は口径11.2cm・器高2.2cm前後で、すべて内面に圏線をもつ。小壷（258・259）は口径2.3cm・器高2.2cm前後。底部に丸みをもつもの（258）と平坦なもの（259）がある。

国産施釉陶器には美濃鉄釉丸椀（265・266）・天目椀（267・268）・灰釉椀（269）・織部振り出し（270）・唐津灰釉皿（272～277）・灰釉椀（278～280）・刷毛目椀（281）・灰釉壷（282）がある。265は口径9.7cm・器高5.9cmで、体部下方の外面以下を除き均一な茶褐色の鉄釉を漬け掛けする。266は口径11.0cm・器高7.0cm。体部外面下方を除いて鉄釉を漬け掛け、その上から灰釉をたらし掛けしている。267は口径11.8cm・器高7.2cm、268は口径11.5cm・器高7.0cm。ともに体部外面下方を除き褐色の鉄釉を漬け掛けする。269は口径11.6cm・器高8.0cm。貼り付け高台の下方以外全面に淡黄灰色の灰釉を漬け掛けする。270は口径2.5cm・器高8.5cm・胴径6.5cm。ロクロ成形した器体を方形に変形させ、肩部の2方に環状の耳を付ける。対向する体部側面の2方に鉄絵で文様を描き、口縁部から体部上方に鉄釉を施す。272は口径10.2cm・器高2.9cm、273は口径

表10　江戸時代の土器類の構成

種類	器形	17世紀代の遺構				18世紀代の遺構				19世紀代の遺構				江戸時代総計			
		破片数	比率			破片数	比率			破片数	比率			破片数	比率		
土師器	皿	1280	93.8%			2112	85.7%			221	67.2%			3613	86.9%		
	鍋・釜	41	3.0%			223	9.1%			55	16.7%			319	7.7%		
	炉・火鉢	4	0.3%			36	1.5%			39	11.9%			79	1.9%		
	その他	40	2.9%			93	3.8%			14	4.3%			147	3.5%		
	小計	1365	100.0%		58.5%	2464	100.0%		67.8%	329	100.0%		29.3%	4158	100.0%		58.7%
瓦器	炉・火鉢	21	32.8%			12	24.5%			4	100.0%			37	31.6%		
	鉢	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	不明・他	43	67.2%			37	75.5%			0	0.0%			80	68.4%		
	小計	64	100.0%		2.7%	49	100.0%		1.3%	4	100.0%		0.4%	117	100.0%		1.7%
国産施釉陶磁器	染付 椀・皿	186	83.0%			47	51.6%			17	81.0%			250	74.4%		
	鉢・向付	20	8.9%			13	14.3%			0	0.0%			33	9.8%		
	壷	6	2.7%			25	27.5%			3	14.3%			34	10.1%		
	大皿・鉢	7	3.1%			2	2.2%			0	0.0%			9	2.7%		
	その他	5	2.2%			4	4.4%			1	4.8%			10	3.0%		
	小計	224	100.0%	29.8%		91	100.0%	10.2%		21	100.0%	3.2%		336	100.0%	14.5%	
	唐津 椀・皿	342	92.2%			133	86.4%			9	69.2%			484	90.0%		
	鉢・向付	4	1.1%			1	0.6%			0	0.0%			5	0.9%		
	大皿・鉢	3	0.8%			14	9.1%			3	23.1%			20	3.7%		
	壷(徳利)	17	4.6%			6	3.9%			1	7.7%			24	4.5%		
	その他	5	1.3%			0	0.0%			0	0.0%			5	0.9%		
	小計	371	100.0%	49.4%		154	100.0%	17.2%		13	100.0%	2.0%		538	100.0%	23.3%	
	伊万里 椀・皿	113	91.9%			355	90.6%			223	85.8%			691	89.2%		
	鉢	0	0.0%			19	4.8%			22	8.5%			41	5.3%		
	壷	4	3.3%			12	3.1%			10	3.8%			26	3.4%		
	その他	6	4.9%			6	1.5%			5	1.9%			17	2.2%		
	小計	123	100.0%	16.4%		392	100.0%	43.8%		260	100.0%	39.1%		775	100.0%	33.5%	
	京焼・他 椀・皿	17	51.5%			164	63.8%			86	23.2%			267	40.4%		
	鉢	0	0.0%			27	10.5%			35	9.4%			62	9.4%		
	壷	6	18.2%			9	3.5%			11	3.0%			26	3.9%		
	その他	10	30.3%			57	22.2%			239	64.4%			306	46.3%		
	小計	33	100.0%	4.4%		257	100.0%	28.7%		371	100.0%	55.8%		661	100.0%	28.6%	
	国産陶磁器計	751	-	100.0%	32.2%	894	-	100.0%	24.6%	665	-	100.0%	59.2%	2310	-	100.0%	32.6%
焼締陶器	備前 壷	2	14.3%			4	18.2%			0	0.0%			6	10.0%		
	壷	11	78.6%			11	50.0%			6	25.0%			28	46.7%		
	擂鉢	0	0.0%			3	13.6%			18	75.0%			21	35.0%		
	盤・大皿	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	その他	1	7.1%			4	18.2%			0	0.0%			5	8.3%		
	小計	14	100.0%	11.7%		22	100.0%	10.6%		24	100.0%	19.4%		60	100.0%	13.3%	
	信楽(伊賀) 壷	12	26.7%			13	12.1%			15	55.6%			40	22.3%		
	壷	2	4.4%			12	11.2%			3	11.1%			17	9.5%		
	擂鉢	30	66.7%			82	76.6%			8	29.6%			120	67.0%		
	盤・大皿	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	その他	1	2.2%			0	0.0%			1	3.7%			2	1.1%		
	小計	45	100.0%	37.5%		107	100.0%	51.4%		27	100.0%	21.8%		179	100.0%	39.6%	
	丹波 壷	2	3.3%			15	21.4%			1	1.4%			18	8.9%		
	壷	16	26.7%			19	27.1%			55	76.4%			90	44.6%		
	擂鉢	40	66.7%			29	41.4%			15	20.8%			84	41.6%		
	盤・大皿	1	1.7%			0	0.0%			0	0.0%			1	0.5%		
	その他	1	1.7%			7	10.0%			1	1.4%			9	4.5%		
	小計	60	100.0%	50.0%		70	100.0%	33.7%		72	100.0%	58.1%		202	100.0%	44.7%	
	産地不明 壷	0	0.0%			8	88.9%			0	0.0%			8	72.7%		
	壷	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	擂鉢	1	100.0%			1	11.1%			1	100.0%			3	27.3%		
	盤・大皿	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	その他	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	小計	1	100.0%	0.8%		9	100%	4.3%		1	100.0%	0.8%		11	100.0%	2.4%	
	焼締陶器計	120	-	100.0%	5.1%	208	-	100.0%	5.7%	124	-	100.0%	11.0%	452	-	100.0%	6.4%
輸入陶磁器	椀皿	26	76.5%			13	76.5%			1	100.0%			40	76.9%		
	鉢	6	17.6%			4	23.5%			0	0.0%			10	19.2%		
	壷	0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%			0	0.0%		
	その他	2	5.9%			0	0.0%			0	0.0%			2	3.8%		
	小計	34	100.0%		1.5%	17	100.0%		0.5%	1	100.0%		0.1%	52	100.0%		0.7%
総数		2334			100.0%	3632			100.0%	1123			100.0%	7089			100.0%

SK52・SK53出土

SK45出土

SK35出土

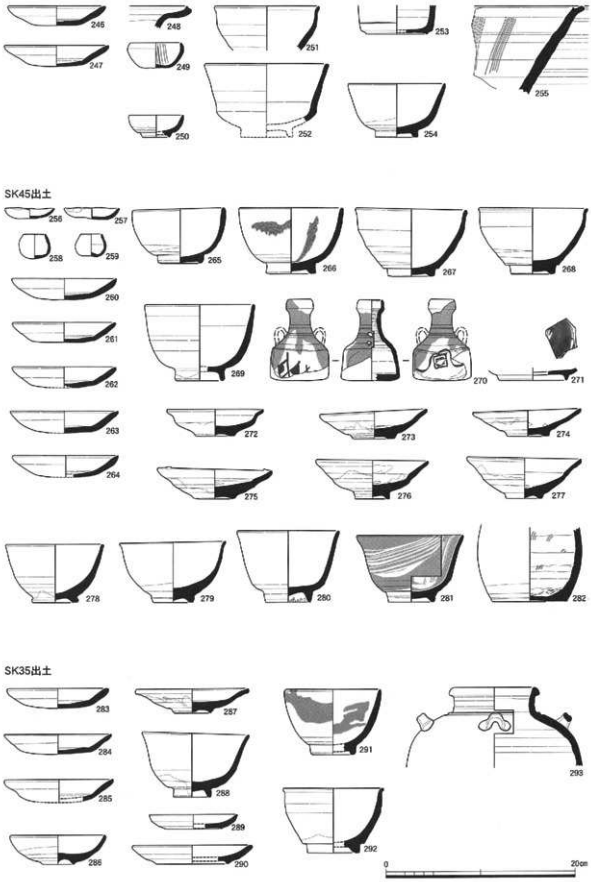


図37　SK52・53、SK45、SK35出土土器実測図（1：4）

11.4cm・器高3.1cm、274は口径11.4cm・器高2.9cm、275は口径12.1cm・器高3.4cm、276は口径11.9cm・器高4.1cm、277は口径12.1cm・器高4.4cm。いずれも体部外面下方を除き灰釉を漬け掛けする。278は口径10.2cm・器高6.1cm、279は口径11.3cm・器高6.4cm。体部外面下方を除き灰釉を漬け掛けする。280は口径10.8cm・器高7.5cm。全面に灰釉を漬け掛けする。高台内の下方に砂が付着している。281は口径11.3cm・器高7.0cm。内外面に白土で刷毛目を施し、体部外面下方を除き灰釉を漬け掛けする。282は底径8.0cm・胴径10.8cm。タタキ造りで成形し、体部外面下方を除き灰釉を漬け掛けする。

輸入磁器は明染付の皿（271）である。底径7.0cm。高台下端部の釉は掻き取る。

SK35出土土器類（図37）　土師器・国産施釉陶器がある。

土師器皿S（283～285）は口径11.3cm・器高2.1cm前後。内面に圏線が巡る。

国産施釉陶器には唐津灰釉皿（286・287）・灰釉椀（288）・美濃灰釉皿（289）・長石釉皿（290）・鉄釉丸椀（291）・天目椀（292）・丹波茶壺（293）がある。286は口径10.2cm・器高3.1cm。287は口径12.0cm・器高2.6cm。288は口径11.4cm・器高7.0cm。いずれも体部外面下方を除き灰釉を漬け掛けする。289は口径9.4cm・器高1.5cm。全面に灰釉を施す。290は口径12.6cm・器高2.0cm。全面に長石釉を厚く施す。291は口径10.2cm・器高6.9cm。体部外面下方を除き鉄釉を漬け掛けし、その上から灰釉をたらし掛けしている。292は口径10.9cm・器高6.8cm。体部外面下方を除き鉄釉を漬け掛けする。293は口径9.6cm・胴径18.4cm。ロクロ成形し、肩部の４方に耳を付け、外面には灰釉を施釉している。

SK19出土土器類（図38、図版16～18）　土師器・国産施釉陶磁器・焼締陶器・輸入磁器がある。

土師器には皿N・皿Sb・皿S・塩壺・鉢・焙烙・壺蓋・壺がある。皿N（294～296）は口径5.6cm・器高1.4cm前後。手捏ねの粗製品である。皿Sb（297～300）は口径8.4cm・器高1.8cm前後で、内面に圏線を持たない。皿S（301～306）には口径10.4cm・器高2.0cm前後のもの（301～305）と口径20.1cm・器高2.6cmの大型品がある。内面には圏線が巡る。塩壺（307・308）は口径6.1cm・器高9.6cm前後。芯型に粘土板を巻き付け成形している。外側面に307は「難波浄因」、308には「御壺塩師難波浄因（２行）」の刻印がある。鉢（309）は口径11.2cm・器高3.5cm。ロクロ成形で、底部をヘラケズリしている。焙烙（310～312）には３種あり、310は口径14.3cm・器高5.0cm。扁平な羽釜形である。311は口径26.2cm。浅い鉢形を呈する。312は口縁部が鍔状に外方へ開く浅い鍋形で、口径28.6cm。前２者は底部を台型で成形し、上半を接合している。312は口縁部まで型で成形している。壺蓋（313）は口径19.8cm。天井部は未調整。つまみは欠失しているが、中央につまみ接合時のナデ痕が認められる。壺（314）は口径15.9cm・胴径22.7cm・器高12.6cm。外面は丁寧なナデ調整、内面には接合痕やオサエ痕を残す。外面の肩部に櫛描きの波状文を施す。

国産施釉陶磁器には京焼椀（315～318・321）・鍋（320・322）・鉢（319）・鬢盥（323）・肥前陶器椀（324～326）・伊万里染付椀（327・330～335・339）・鉢（328）・蓋（329）・薊麦猪口（338）・小杯（336・337）・壺（340・341）・青磁皿（342）・唐津刷毛目片口鉢（343）、産地不明の鉄釉壺（344）・軟質施釉陶器灯明皿（346～348）などがある。315は口径7.6cm・器高

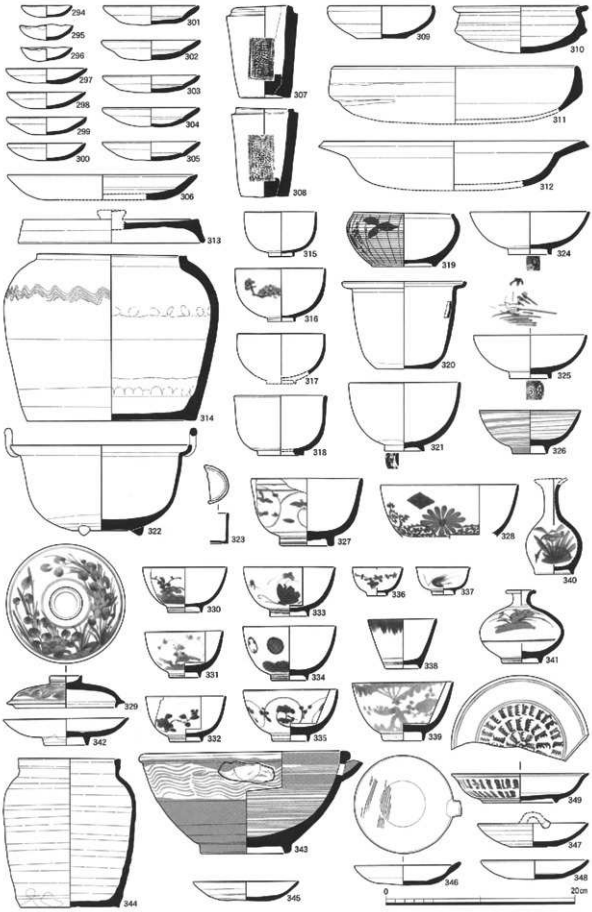


図38　SK19出土土器実測図（1：4）

4.7cm、316は口径9.6cm・器高5.6cm、317は口径9.3cm、318は口径10.0cm・器高6.3cm、321は口径11.8cm・器高7.3cm。いずれも底部外面を除いて灰釉が施されている。316の外面には銹絵で松文が描かれている。321は他の4点に比べ硬質の焼き上がりで、素地が淡灰色を呈する。高台内側面に「朝日」の刻銘があり、宇治の朝日焼と確認できる。320は口径13.4cm・器高9.2cm、322は口径19.8cm・器高11.8cm。口縁部を受け口に造る。320の底部内面にはメアトが残り、体部には内側に重ね焼きされた器物（おそらく椀）の口縁の一部が融着している。底部外面を除き灰釉が施されている。322の口縁部の2方には取っ手が、底部には小さな3足が付けられている。体部下方以下を除き均一な鉄釉を施す。319は欠損した口縁端部を水平に研磨し再利用している。外面には籠状の櫛目と銹絵で描いた草花文を組み合わせ、籠越にみた植物を表現している。底部は碁笥底に削り出す。底部外面を除いてうすく灰釉を掛ける。323は器高3.2cm。底部外面以外に灰釉を掛ける。324は口径12.5cm・器高4.5cm、325は口径12.0cm・器高4.6cm。京焼風の椀である。底部内面に粗略な山水文を銹絵で描き、底部外面以外に施釉する。高台内中央付近に324は「新」、325は「小松久」を刻印する。326は口径10.8cm・器高4.6cm。内外面に白土で横方向の刷毛目を付け、全面に透明釉を施釉する。327は口径12.0cm・器高7.1cm、330は口径9.0cm・器高4.8cm、331は口径8.3cm・器高4.9cm、332は口径8.6cm・器高4.8cm、333は口径9.7cm・器高5.3cm、334は口径9.9cm・器高5.7cm、335は口径10.0cm・器高5.5cm、339は口径10.7cm・器高6.2cm、いずれも外面に呉須で文様を描き、高台下端を除いた全面に透明釉を施釉する。327が陶胎である以外はすべて磁器である。328は口径14.5cm。外面に菊唐草文を描く。呉須の発色が良好な精良品である。329は口径10.6cm・器高3.4cm。天井部中央に径3.4cmの環状つまみを削り出し、口縁端に返りを付ける。上面に花文を描き、返り部を除いた全面に透明釉を施釉する。338は口径7.3cm・器高5.2cm。口縁部外面に雨文を描く。336は口径5.4cm・器高3.0cm、337は口径5.8cm・器高2.9cm。体部外面に336は花文、337は海老文を描く。340は胴径6.0cm・底径4.0cm、341は口径3.2cm・器高7.7cm・胴径8.9cm。外面の1方に草花文を描き、高台下端部以外に透明釉を掛ける。342は口径13.3cm・器高2.9cm。釉は淡緑青色で、内面は輪状に釉を掻き取る。外面は高台を除き施釉している。343は口径22.4cm・器高11.0cm。口縁を外に折り返し玉縁に造る。口縁直下の1箇所に片口を付ける。体部内面と外面の上半には白土で刷毛目を施し、高台下端面を除き全体に施釉している。344は口径10.9cm・器高15.8cm・胴径14.0cm。口縁がほぼ垂直に立ち上がる広口の壷。底部外面を除いて鉄釉が掛けられている。形態や底部の成形技法からみて丹波の製品の可能性が高いが、胎土は異質で産地を特定できない。346は口径10.4cm・器高2.1cm、347は口径11.7cm・器高2.5cm、348は口径11.4cm・器高2.0cm。内面に圏線や形態は土師器皿Sに類似するが、ロクロ成形である。底部外面をケズリ調整し、鉛釉を全体に施す。346は短い板状の、347には耳状の取っ手を口縁の1箇所に貼り付けている。

焼締陶器は備前灯明皿（345）が1点ある。口径11.2cm・器高2.1cm。ロクロ成形で、底部はヘラケズリ調整。内外面ともに赤土を化粧掛けしている。

（3）石製品（図39・40、図版19）

石製品にはSD59から出土した砥石と石材剥片および江戸時代のゴミ廃棄土坑から出土した硯がある。

砥石（石1・石2）　薄く細長い板状の小片である。石1は幅1.4cm・厚さ0.2cm、端部の片方が欠損している。残長は3.7cm。石2は幅0.9cm・長3.5cm・厚さ0.2cm。両面に断面「V」字形の細い凹みが縦方向に数条あり、細い器物を研磨した形跡が認められ、鋭角的な側縁にも使用痕が確認できる。小型の製品か入り組んだ細部の研磨に用いた砥石であろう。

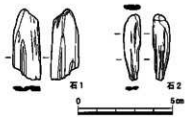


図39　砥石実測図（1：2）

石材剥片（石3）　石製鈴具制作時に石挽き鋸で裁断した板状石材の周縁を調整剥離した際に生じる細片で、石帯製作遺跡の遺物として出土することが確認されている。非常に薄い剥片であるが、両端に石挽き鋸による切断痕が観察でき、板状石材の厚さが7～9㎜であることがわかる。石材はすべて同一で緑色を呈し硬質である。

硯（石4・石5）　石4は長13.4cm・幅6.3cm。SK44出土。石5は長13.6cm・幅5.9cm。SK07出土。ともに周縁上端が剥離し、高さは不明である。石4は研面陸部が使用によって大きく凹んでいる。陸部に釘彫りで交差する直線と「き」、「き」、「き」、「の」、「や」などのかな文字が彫られている。裏面には周縁に沿って長方形、その対角線、対角線の交点を通る横方向の直線、かな文字「き」が刻まれている。石5にも不規則な単線が線刻されている。

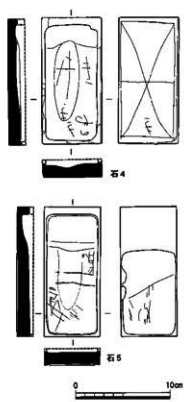


図40　硯実測図（1：4）

（4）金属製品（図41・42、図版19）

刀装具未製品（金1）　SD59から出土した銀製の鋳造品である。長5.2cm・高14cm・幅0.6cm。側面にはヤスリ目が残る未製品である。正倉院の金銀鈿装の太刀の刀装具と類似する形態だが、正倉院のものは上面に彫金を施し、金鍍金されている。1次調査ではこの金具が出土した近い地点で金が付着したとりべが出土していることから、最終的には同様の加工が施される製品と考えられる。

刀模造品（金2）　銅製の刀の柄部分で、細かく彫金が施されている。刀身は失われているが、鉄製の茎が残る。残長7.6cm・幅1.2cm。SK19出土。

小柄（金3）　残長7.9cm・幅1.6cm・厚さ0.3cm。銅板を折り曲げて上辺を鑞付けする。腐食が

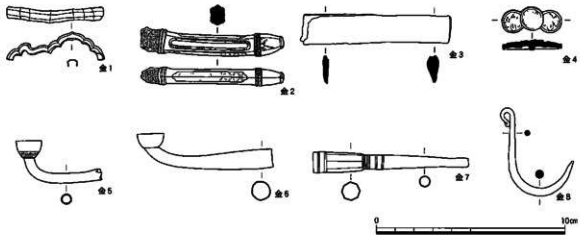


図41　金属製品実測図（1：2）

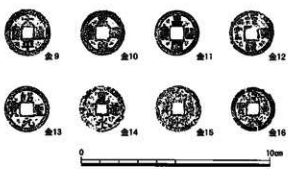


図42　銭貨拓影（1：2）

激しく全体に緑青が生じており、一部が変形している。文様の有無は確認できない。SK26出土。

目貫（金4）　径1.2cmの円形を横に3つ組み合わせた形態で、それぞれに桐文を彫金する。腐植が激しく文様は不明瞭である。長3.1cm・幅1.2cm。SK35出土。

煙管（金5～金7）　金5は首の曲がりが大きく細く延びるが、後端は欠損している。火皿はやや深めで、下部に線文を施す。残長4.4cm。SK44出土。金6は火皿は浅く、首の径は太く曲がりはゆるい。長7.0cm・後端部の径1.0cm。SK19出土。金7は銅製の吸い口部で、長8.2cm、径は前端部1.1cm、前端から2.7cmでくびれ、後端部が0.4cm。前端0.6cmからくびれ部まで断面が8角形を呈する。前端2箇所とくびれ部付近3箇所に線文を施す。SK42出土。

釣り金具（金8）　断面円形の棒状銅素材の両端を細く打ち出して釣り針状に加工したもの。上端を小さく「S」字状に曲げる。高4.6cm・幅3.8cm、断面の最大径は0.4cm。SK19出土。

銭貨（金9～金16）　多数出土しているが、小片に破断しているものや腐食が激しく銭文が判読不可能なものが多い。銭種の判明したものを掲載しておく。金9は太平通寶。SK44出土。金10は皇宋通寶。SK44出土。金11は嘉裕通寶。SK47出土。金12は元祐通寶。SK44出土。金13は紹聖元寶。SK44出土。金14は寛永通寶。SK42出土。金15・金16は寛永通寶。SK19出土。

（5）瓦類（図43）

瓦類には平安時代のものと桃山・江戸時代のものがある。

唐草文軒平瓦（瓦1）　軟質で文様が磨滅し型式は明らかではない。平安時代前期。SK49出土。

蓮華文軒丸瓦（瓦2）　外区の珠文帯が残る。珠文は小さい。平安時代前期。SD59出土。

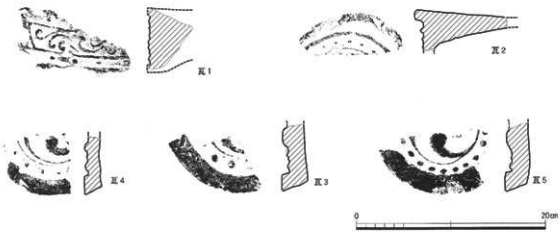


図43　軒瓦拓影・実測図（1：4）

巴文軒丸瓦（瓦3）　巴は左巻き。珠文は小さくまばら。一部に金箔が残る。桃山時代から江戸時代前期。SK40出土。

巴文軒丸瓦（瓦4）　巴は左巻き。珠文間隔はやや広い。金箔瓦が残る。SK55出土。

巴文軒丸瓦（瓦5）　巴は左巻き。珠文は大きく密に配する。金箔瓦。SK55出土。

註

1）　墨書土器は上野勝之氏・西山良平氏（京都大学）に解読していただいた。

4．まとめ

今回の調査では，1978年に敷地南部で実施した１次調査で検出した平安時代初頃の遺構SD４（今回の調査ではSD59）や路面（今回SF60）の延長部分を確認するとともに，その北側では江戸時代の遺構を多数検出した。SD59はSD４と合わせて長さ約15.5mを検出したが，調査区北壁近くでこの溝の北端と考えられる遺構があり，それを含めると約30mを確認したことになる。これは路面SF60についても同様で，調査区北東部に位置する平安時代初頭の土坑SK46の西側から土坑上部に路面状の整地を確認している。この溝は１次調査の時点での宮内官衙配置の復元案では，左兵衛府寄りの宮内道路側溝ととらえていたが，その後の基準点測量を元にした平安京復元数値モデルによると，むしろ路面中央から侍従所側に位置していることが明らかになった。また，方位が大きく東に振れていることも判明した。さらに路面の整地層が溝の埋土最上層を覆っていること，溝内の堆積状況に水流の痕跡が全く認められないこと，調査区北端部で途切れている可能性があることなどから，道路側溝とみるよりも南北方向の長大な廃棄土坑ととらえたほうが妥当であると考えるに至った。出土遺物の多さや内容もその傍証となろう。遺物についていえば，SD59やSK46から１次調査と同様の平安京造営時に近い時期に属する多量の土器類や，轅羽口・とりべ・砥石・石材剥片・刀装具未製品など，宮内での手工業生産を示す資料があり，近世では江戸時代前期から幕末までの豊富な遺物群が出土した。

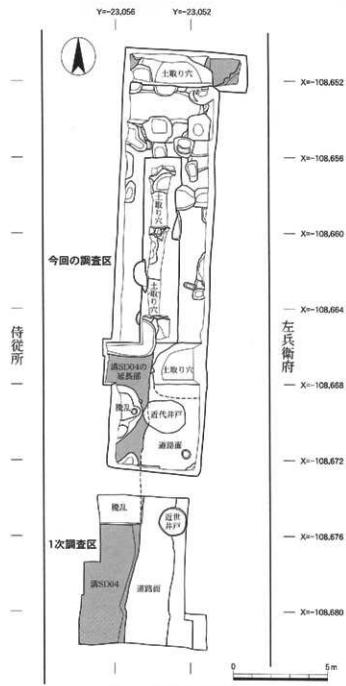


図44　遺構の位置関係

Ⅳ　中臣遺跡85次調査

1．調査経過

今回の調査は、駐車場建設に伴い実施した中臣遺跡85次調査である。調査地は京都市山科区勧修寺東金ヶ崎町96番地に所在し、中臣遺跡の南端に近い低位段丘上に位置する。当該地で南に流れる旧安祥寺川までの距離は約80mを測る。

中臣遺跡は、これまでの調査で旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が確認されている大規模な複合遺跡である。調査地周辺では、北側を東西に延長する市街化道路18号線の敷設に伴う中臣遺跡10次調査で、今調査地に北接する箇所で弥生時代後期の竪穴住居１棟と７世紀代の総柱の掘立柱建物１棟がみつかっている。また、調査地に西接する敷地で行われた57次調査では、古墳時代後期の竪穴住居２棟と縄文時代晩期の遺物を包含する湿地状堆積がみつかっており、今回の調査でも縄文時代から７世紀までの遺構が重複して検出されることが予想された。

調査は、残土を場内処理するため反転して行った。まず、敷地南側に南北９m、東西10mの調査区を設定して調査を開始した。その結果、飛鳥時代の土器棺墓１基と、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居３棟がみつかった。このうち北半でみつかった竪穴住居１棟は敷地北側に広がることが判明したため、この住居部分を残して調査を進めた。調査終了後、北半の住居部分を残して埋め戻しを行い、新たに敷地北側を掘削した。新たに掘削を行ったのは38㎡である。全体

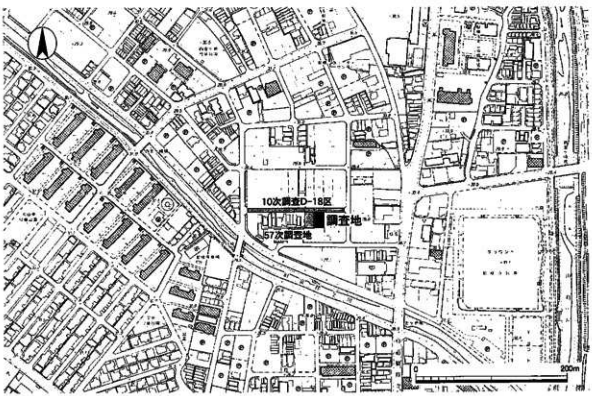


図45　調査位置図（１：5,000）

図46　調査前全景（北西から）

図47　調査風景（北東から）

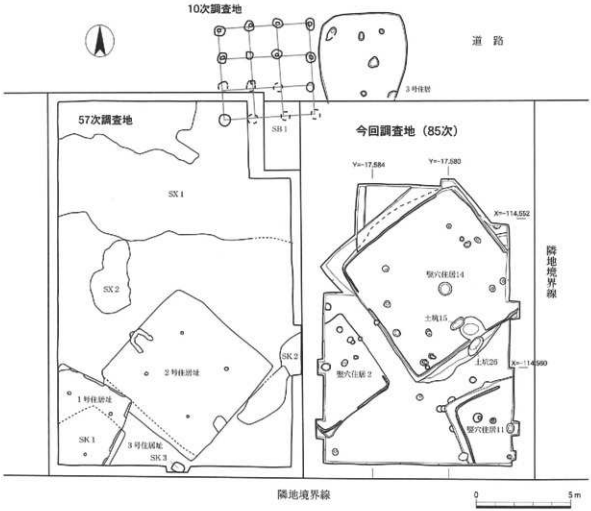


図48　調査区配置図（1：200）

では、土器棺墓1基、竪穴住居3棟、その他ピット、土坑などを検出した。竪穴住居3棟はいずれも焼失住居で、床面直上から炭化材や土器、粘土塊などが出土した。竪穴住居の規模と構造を確定するため、一部調査区の拡張を行った。そのため、最終の調査面積の合計は136㎡となった。

2．遺　構

（1）基本層序（図49）

調査地は、調査前までは畑地として利用されており、現地表面の標高は27.7m前後でほぼ水平であった。調査地の基本層序は、現地表から0.4～0.5mまで現代耕作土、中近世の旧耕作土とその床土が堆積する（図49－1～5層）。調査区南側では、これらの耕作土を除去して遺跡の基盤層となる無遺物層を検出した。この無遺物層は氾濫堆積層と考えられ、褐色粘質シルト（37層）、黒褐色の礫混じり粘質シルト（38層）、黄褐色の砂礫層（39層）などが互層となって堆積している。調査区北半では耕作土と無遺物層の間に、竪穴住居14を覆うように7世紀の遺物を含む黒褐色礫混じりシルト層（22層）が約0.05～0.1m堆積している。さらに調査区北端では、この遺物包含層の下に炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトが約0.3～0.4m堆積し、その下が灰オリーブ色粘質粘土～シルトの無遺物層となる。遺構は、土坑15を遺物包含層上面で検出し、他は無遺物層上面で検出した。

（2）遺構

調査では、弥生時代後期から飛鳥時代の遺構を検出した。検出した遺構の総数は49基である。土坑、ピット、竪穴住居などがある。ピットは、時期を判別できたものが少なく、建物としてのまとまりを捉えることはできなかった。以下に主要な遺構を報告する。

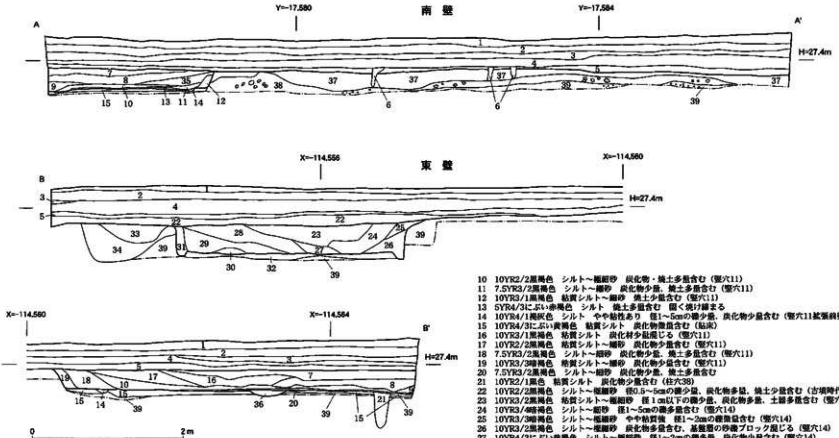
土坑15（図51、図版20）　調査区の中央やや東寄りにあり、7世紀前半の遺物包含層上面で検出した。土師器の長胴甕2個体を横位に据えた土器棺墓と考えられる。上部は後世に削平されている。掘形の平面形は長軸0.86m、短軸0.44mの楕円形で、残存深は0.15mある。長軸は北に対して東に約50度振れる。棺身となる長胴甕の口に、別の長胴甕の底部を差し込むような形で棺蓋としている。棺蓋となる長胴甕の上半部は当初から打ち欠かれていたものと考えられる。時期は7世紀前半から半ばと推定される。

土坑26　調査区の中央東寄りにあり、7世紀前半代の遺物包含層を除去して検出した。平面形は長軸1.1m、短軸0.5mの楕円形で、深さは0.25mある。断面形は逆台形状を呈する。長軸は北に対して東に約35度振れる。埋土には、少量の炭化物が混じるが、遺物は出土しなかった。

表11　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
弥生時代	竪穴住居14	
古墳時代	竪穴住居2・11、土坑26	
飛鳥時代	土坑15	

図49 基本区層断面図（1：50）



1 10YR3/1黒褐色 小礫混シルト～細砂（現代耕土）
2 10YR4/1褐灰色 小礫混シルト～細砂 固く締まる（現代床土）
3 10YR3/2黒褐色 小礫混シルト～細砂 固く締まる（旧耕土）
4 10YR4/2灰黄褐色 小礫混シルト～細砂 固く締まる（旧耕土）
5 10YR4/1褐灰色 小礫混シルト～細砂 鉄分多量含む（旧床土）
6 10YR4/1褐灰色 粘質シルト～細砂（貼床以降前線か）
7 10YR2/1黒色 シルト～極細砂 径1～3cmの礫少量、炭化物多量含む（竪穴11）
8 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 径1～5cmの礫少量、炭化物・焼土少量含む（竪穴11）
9 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 炭化物少量含む（竪穴11）
10 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土多量含む（竪穴11）
11 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物少量、焼土多量含む（竪穴11）
12 10YR3/1黒褐色 粘質シルト～細砂 焼土少量含む（竪穴11）
13 5YR3/1にぶい赤褐色 シルト 焼土多量含む 固く焼け締まる
14 10YR4/1褐灰色 シルト やや粘性あり 径1～5cmの礫少量、炭化物少量含む（竪穴11拡張前壁溝）
15 10YR4/1にぶい黄褐色 粘質シルト 炭化物微量含む（貼床）
16 10YR2/1黒褐色 粘質シルト 炭化材少量混じる（竪穴11）
17 10YR2/2黒褐色 粘質シルト～細砂 炭化物少量含む（竪穴11）
18 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物少量、焼土多量含む（竪穴11）
19 10YR3/3暗褐色 粘質シルト～細砂 炭化物少量含む（竪穴11）
20 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物少量、焼土多量含む
21 10YR2/1黒色 粘質シルト 炭化物少量含む（住穴38）
22 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 径0.5～5cmの礫少量、炭化物多量、焼土少量含む（古墳時代遺物包含層）
23 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 径1cm以下の礫少量、炭化物多量、土器多量含む（竪穴14）
24 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 径1～5cmの礫多量含む（竪穴14）
25 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 やや粘質強 径1～3cmの炭化物多量含む（竪穴14）
26 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物多量含む、基盤面の砂礫ブロック混じる（竪穴14）
27 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫多量、炭化物少量含む（竪穴14）
28 10YR3/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫多量、炭化物少量含む（竪穴14）
29 7.5YR3/3暗褐色 シルト～細砂 径1cm以下の礫少量、炭化物少量含む（竪穴14）
30 7.5YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 焼土多量含む（竪穴14）
31 10YR3/2黒褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫少量、炭化物多量含む（竪穴14）
32 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量含む 固く締まる（竪穴14延床）
33 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 径1～3cmの礫少量含む（土坑49）
34 10YR3/4暗褐色 シルト～極細砂（土坑49）
35 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量含む（竪穴11）
36 7.5YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量含む（土坑37）
37 10YR4/4褐色 粘質シルト 径1～2cmの礫少量含む（無遺物層）
38 10YR3/2黒褐色 粘質シルト 径1～15cmの礫縞らに混じる（無遺物層）
39 10YR3/3暗褐色 シルト～極粗砂 径1～10cmの礫多量含む（砂礫層）（無遺物層）

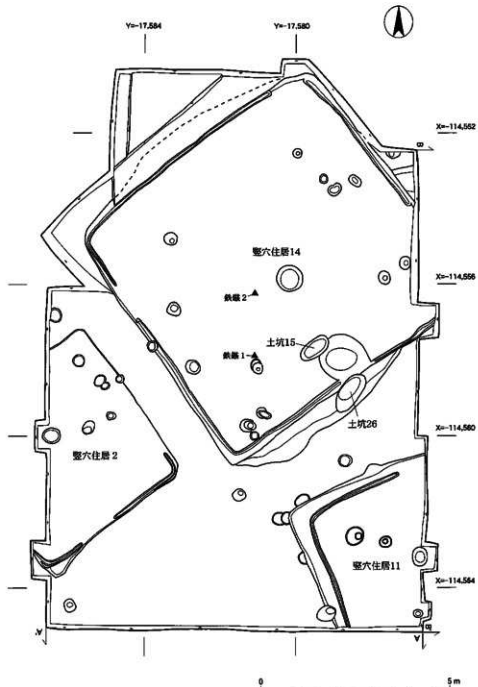


図50　遺構平面図（1：100）

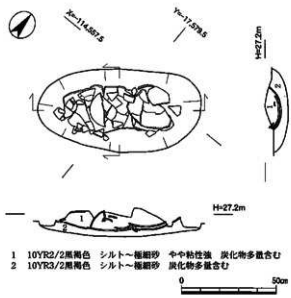


図51 土坑15実測図（1：20）

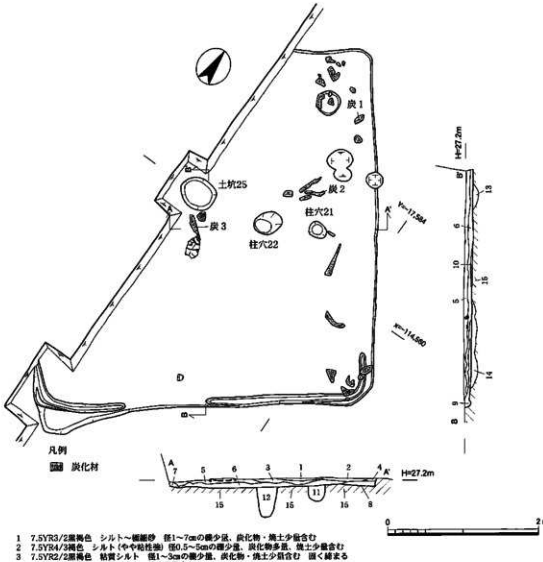
竪穴住居2（図52、図版21） 調査区の南西にあり、無遺物層上面で検出した方形の竪穴住居である。建物の西半は調査区外にあるため全体は検出できていないが、3箇所のコーナー部を検出でき、おおよその規模を確定することができた。一辺約4.5mで、検出面から床面までの深さは約0.1m。方位は北に対して西に約35度振れる。床面や壁際から炭化材や焼土ブロックが出土し、焼失住居と考えられる。炭化材については、サンプルを3点採取し、樹種の同定を行ったところ、3点とも散孔材であり、広葉樹であることが判明した（表12）。南東壁面では壁溝を検出した。幅約0.1m、深さは0.05m前後あり、一部途切れる。建物のほぼ中央では炉と考えられる土坑25を検出した。直径約0.45mの円形で、深さは約0.1m。埋土には炭化物を少量含む。また、竪穴住居に伴う可能性がある柱穴21・22を確認した。柱穴21は、土坑25から北東に約1.5m離れて検出した。長径約0.2mの楕円形で、深さは約0.2mある。柱穴22は、同じく土坑25から東に1m離れて検出した。径約0.25～0.35mの楕円形で、深さは約0.4mある。この2基のいずれかが主柱穴であるとすれば、位置から見て主柱穴は土坑25を挟んで2基と考えられる。住居の床面上からは阿波産の土師器の壷が出土した。また、住居の埋土からは布留式の甕が出土している。時期は古墳時代前期と考えられる。

表12 竪穴住居出土炭化材の樹種

遺構名	炭番号	樹 種
竪穴住居2	1	散孔材1
	2	散孔材2
	3	散孔材2
竪穴住居11	1	アカガシ亜属
	2	散孔材3
	3-1	アカガシ亜属
	3-2	コナラ亜属
	4	アカガシ亜属
竪穴住居14	1	コナラ亜属
	2	コナラ亜属
	3	コナラ亜属
	4	コナラ亜属
	5	コナラ亜属
	6	キハダ亜属
	7	コナラ亜属
	8	コナラ亜属

※ 散孔材1～3までは、それぞれ別種のものである。

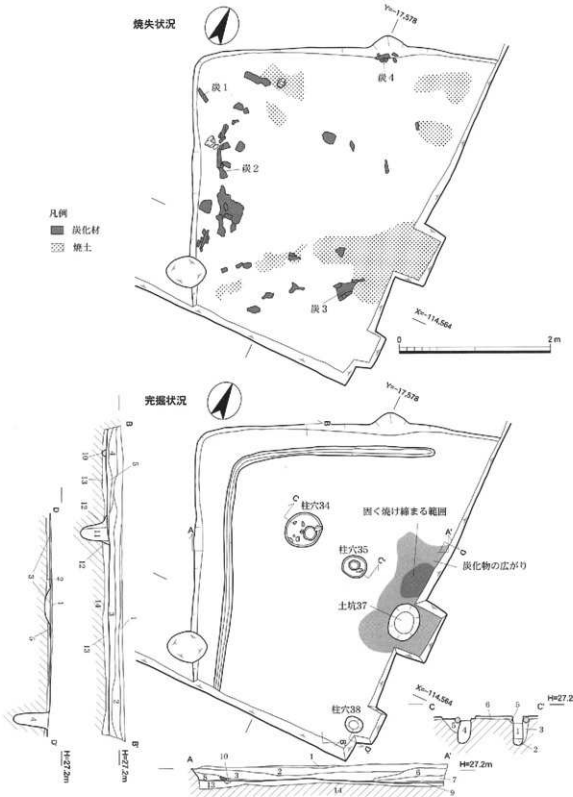
竪穴住居11（図53、図版22・23） 調査区の南東隅にあり、無遺物層上面で検出した。住居の南半と東半は調査区外にある。平面形は一辺4m以上の方形である。方位は北に対して西に約23度振れる。壁面より約0.3m内側に壁溝がめぐり、一度拡張を行ったと考えられる。検出面から床面までの深さは約0.25mある。床面は固く締まる。基盤層が砂礫のため、全体に厚さ約0.03～0.07mの貼床を行っている（断面13層）。拡張後の竪穴住居床面上からは炭化材や焼土が出土し、焼失住居と考えられる。炭化材には、住居壁面に直交するものと、壁際で壁面に平行するものがある。この炭化



1 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細細砂 径1～7cmの礫少量、炭化物・焼土少量含む
2 7.5YR4/3褐色 シルト(やや粘性強) 径0.5～5cmの礫少量、炭化物多量、焼土少量含む
3 7.5YR2/2黒褐色 粘質シルト 径1～3cmの礫少量、炭化物・焼土少量含む 固く締まる
4 7.5YR3/3暗褐色 粘質シルト 焼土多量含む
5 7.5YR3/2黒褐色 シルト 径1～5cmの礫少量、炭化物・焼土少量含む
6 7.5YR3/3暗褐色 粘質シルト 炭化物・焼土少量含む
7 10YR3/2黒褐色 粘質シルト 炭化物・焼土微量含む
8 7.5YR4/2灰褐色 シルト 焼土多量含む
9 10YR3/3暗褐色 シルト 10YR6/4褐色シルト(基盤層)ブロック混じる 焼土多量含む
10 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂
11 10YR3/1黒褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物少量含む
12 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質シルト 径1～3cmの礫多量、炭化物少量含む
13 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物少量含む
14 10YR4/2灰黄褐色 粘質シルト 炭化物・焼土少量含む、10YR4/4褐色シルト(基盤層)ブロック混じる
15 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト(基盤層、北半では小礫混じる)

図52 竪穴住居2実測図（1：50）

材についてはサンプルを4点採取し、樹種の同定を行った。その結果、アカガシ亜属、コナラ亜属、散孔材があることが判明した（表12）。拡張前の住居には壁溝が認められる。壁溝の幅は約0.1m、検出面からの深さは0.02～0.05mある。主柱穴は4基と考えられ、拡張前と後で掘り直しを行っている。拡張前の主柱穴を2基（柱穴38・35）、拡張後の主柱穴を1基（柱穴34）確認した。柱穴38は掘形の直径0.25m、深さは約0.45mある。柱穴35は掘形の直径0.3m、柱当の直径約0.15m、深さは約0.4mある。柱穴34は、掘形の直径0.45m、柱当の直径0.17m、深さは約0.35mある。調査区の東壁際では炉と考えられる土坑37を検出した。主柱穴との距離からみて拡張後の建物に伴う中央土坑と考えられる。平面形は長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形で、深さは約



竪穴住居11埋土　A-A'、B-B'

1　10YR2/1黒色　シルト～極細砂　径1～3cmの微少量、炭化物多量含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト～極細砂　径1～5cmの微少量、炭化物・焼土少量含む
3　10YR2/2黒褐色　シルト～極細砂　炭化物・焼土多量含む
4　7.5YR3/3黒褐色　粘質シルト　焼土多量含む
5　10YR3/3暗褐色　粘質シルト　焼土少量含む
6　10YR3/1黒褐色　粘質シルト　炭化材少量混じる
7　10YR3/2黒褐色　粘質シルト　炭化物少量含む
8　7.5YR3/2黒褐色　粘質シルト　径3～5cmの微少量、焼土少量含む
9　5YR4/3にぶい赤褐色　シルト　焼土多量含む　固く焼け締まる
10　10YR4/1褐灰色　シルト　やや粘性あり　径1～5cmの微少量、炭化物少量含む
11　10YR3/2黒褐色　粘質シルト～細砂　径1cm以下の微微量、炭化物少量含む
12　10YR3/3暗褐色　シルト～中砂　径3～15cmの微多量、炭化物少量含む
13　10YR4/3にぶい黄褐色　粘質シルト　炭化物微量含む（粘床）
14　10YR3/3暗褐色　シルト～極粗砂　径1～10cmの微多量含む（砂礫層）（基盤層）

柱穴34・35　C-C'

1　10YR2/2黒褐色　粘質シルト～細砂　炭化物多量、焼土少量含む
2　10YR3/3暗褐色　粘質シルト　炭化物少量含む
3　10YR3/2黒褐色　シルト～細砂　径1～10cmの微多量、炭化物少量含む
4　10YR3/2黒褐色　粘質シルト～細砂　径1cm以下の微微量、炭化物少量含む
5　10YR3/3暗褐色　シルト～中砂　径3～15cmの微多量、炭化物少量含む
6　10YR4/3にぶい黄褐色　粘質シルト　炭化物微量含む（粘床）

土坑37・柱穴38　D-D'

1　7.5YR3/2黒褐色　シルト～細砂　炭化物少量、焼土多量含む
2　7.5YR2/2黒褐色　シルト～極細砂　炭化物・焼土少量含む
3　5YR4/3にぶい赤褐色　シルト　焼土多量含む　固く焼け締まる
4　10YR2/1黒色　粘質シルト　炭化物少量含む
5　10YR4/3にぶい黄褐色　粘質シルト　炭化物微量含む（粘床）

図53　竪穴住居11実測図（1：50）

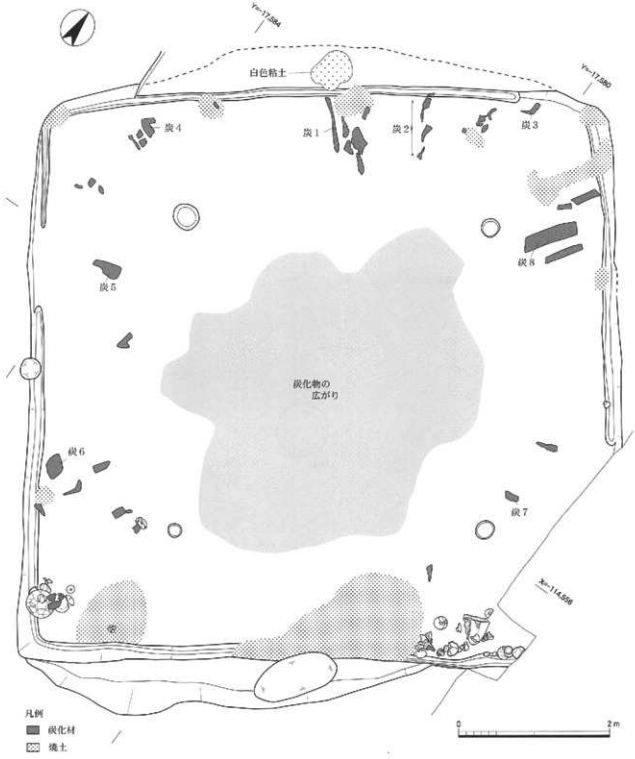


図54　竪穴住居14焼失状況平面図（1：50）

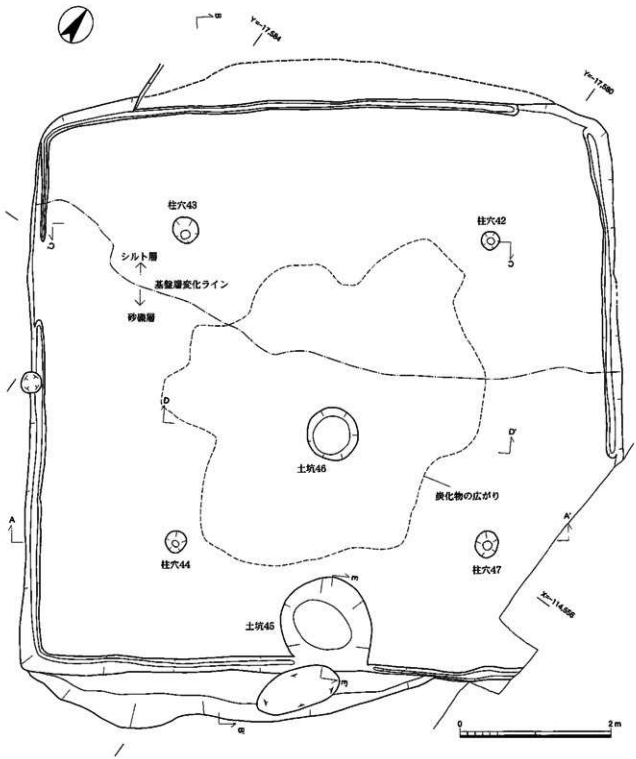
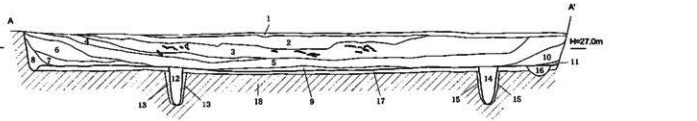


図55　竪穴住居14完掘状況平面図（1：50）



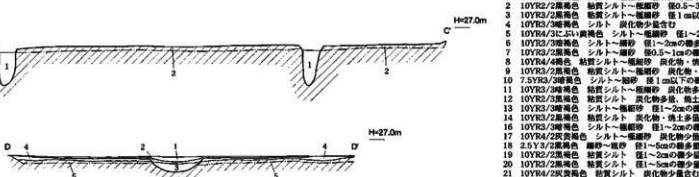


図56 竪穴住居14断面図 (1：50)

竪穴住居14堆土 A-A'、B-B'

1 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 径0.5～5cmの礫少量、炭化物多量、焼土少量含む
2 10YR2/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 径0.5～3cmの礫少量、炭化物多量含む
3 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 径1cm以下の礫少量、炭化物多量、土器多量含む
4 10YR3/3暗褐色 シルト 炭化物少量含む
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫多量、炭化物少量含む
6 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 径1～2cmの礫多量含む
7 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 径0.5～1cmの礫少量、炭化物やや多量含む
8 10YR4/4褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物・焼土少量含む
9 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物・焼土多量含む
10 7.5YR3/3暗褐色 シルト～細砂 径1cm以下の礫少量、炭化物少量含む
11 10YR3/3暗褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物多量含む
12 10YR2/3黒褐色 粘質シルト 炭化物多量、焼土少量含む（主柱穴44）
13 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫少量、炭化物少量含む（主柱穴44）
14 10YR3/2黒褐色 粘質シルト 炭化物・焼土多量含む（主柱穴47）
15 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 径1～2cmの礫やや多量、炭化物少量含む（主柱穴47）
16 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量含む 固く締まる（貼床）
18 2.5Y3/2黒褐色 細砂～粗砂 径1～5cmの礫多量含む（基盤層）
19 10YR2/2黒褐色 粘質シルト 径1～2cmの礫少量、炭化物少量含む
20 10YR3/2黒褐色 粘質シルト 径1～5cmの礫多量、炭化物少量含む
21 10YR4/2灰黄褐色 粘質シルト 炭化物少量含む
22 10YR4/2灰黄褐色 粘質シルト 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト（基盤層）ブロック混
23 7.5YR4/4褐色 粘質シルト 焼土多量含む
24 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 炭化物・焼土少量 固く締まる
25 5Y5/2灰オリーブ色 粘質シルト（基盤層）
26 10YR4/2灰黄褐色 粘質シルト 炭化物混量含む

土坑42・43 C-C'

1 10YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 径2～5cmの礫少量、炭化物少量含む
2 5Y5/2灰オリーブ色 粘質シルト（基盤層）

土坑45 E-E'

1 7.5YR3/2黒褐色 粘質シルト～極細砂 径1～7cmの礫少量
炭化物・焼土少量含む
2 10YR4/3にぶい黄褐色 粘質シルト～極細砂 炭化物少量含む
3 10YR3/3暗褐色 粘質シルト～細砂 小礫少量含む
4 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 径1～2cmの礫少量、炭化物多量含む
5 10YR4/2暗灰黄色 細砂～粗砂 径1～5cmの礫多量含む（基盤層）

土坑46 D-D'

1 10YR4/2灰黄褐色 小礫混じりシルト～極細砂 径1～2cmの礫やや多量、炭化物・焼土
少量含む
2 10YR2/2黒褐色 シルト～極細砂 径1～10cmの礫少量、炭化物多量含む
3 10YR1.7/1黒色 シルト～極細砂 やや粘質 径1～3cmの礫少量、炭化物・焼土多量含む
4 10YR4/2灰黄褐色 シルト～極細砂 炭化物少量含む 固く締まる（貼床）
5 2.5Y3/2黒褐色 細砂～粗砂 径1～5cmの礫多量含む（基盤層）

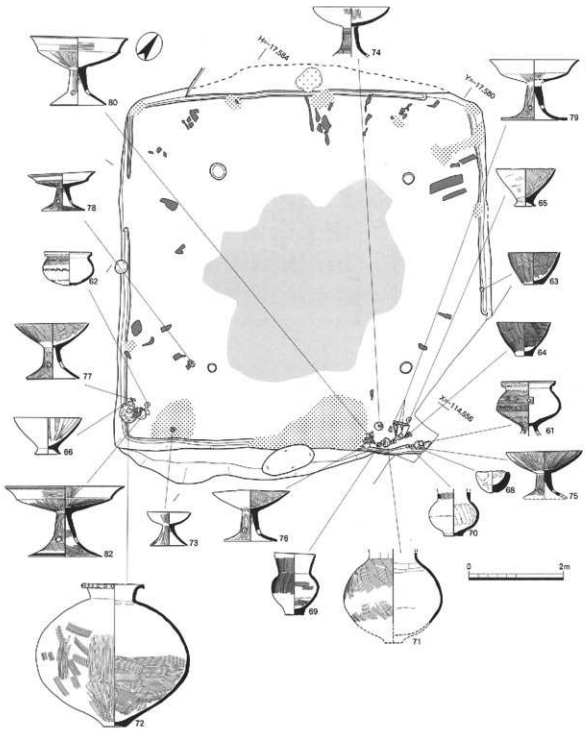


図57　竪穴住居14　遺物出土状況（1：80、遺物は1：8）

0.05mある。埋土には炭化物と焼土を少量含む。土坑37の周囲は炭化物が広がり、固く焼け締まる箇所が認められた。住居の床面からは台付き鉢などが出土した。埋土からは、生駒西麓産の庄内甕などが出土している。

竪穴住居14（図54～57、図版23・24）　調査区の北半にあり、無遺物層上面で検出した。平面形は一辺約7.5×7.0mの方形で、方位は北に対して西に約35度振れる。検出面から床面までの深

さは約0.45mある。住居北半では基盤層がシルト層であるのに対して、南半では砂礫層のため、南半部のみ厚さ3～5cmの貼床を行っている（断面17層）。埋土や床面上から炭化材や焼土が出土しており、焼失住居と考えられる。炭化材には建物の壁面に直行するものと、壁溝の内側で壁に平行するものがある。この炭化材については、サンプルを8点採取し、樹種の同定を行った（表12）。その結果、キハダ属が1点ある他は、すべてコナラ亜属であった。壁溝は一部途切れるが、ほぼ全周する。幅約0.1m、深さは約0.03～0.05mある。主柱穴は4基検出した。南半は貼床のため床面では柱当のみを検出し、床面を掘り下げて掘形を検出した。掘形の直径は0.25～0.35m、柱当の直径は0.15～0.25m、深さは約0.4～0.5mある。建物の中央やや南寄りでは、炉と考えられる土坑46を検出した。直径約0.65mの円形で、深さは約0.15mある。埋土は炭化物と焼土を多量に含む。土坑46の周囲1～2mの範囲には炭化物の薄い層が広がる。建物の南東壁面では壁面に取り付く土坑45を検出した。直径約1.2mの円形で、深さは約0.2mある。埋土からは高杯などが出土した。建物の南隅部と東隅部の床面上からは、完形に近い土器や台石がまとまって出土した。土器は弥生時代後期後半のものと考えられる。また、南東壁面は崩落か人為的作業かは不明であるが、20～30cmほど垂直に立ち上がったのち緩く傾斜して肩が張り出すように立ち上がる。さらに、北西壁面は基盤層と埋土がともに粘質シルト層で似通っていたため肩部が明瞭でなかったが、断面観察で、南東壁面と同様に、垂直に立ち上がったのち緩く傾斜しながら立ち上がる状況が確認できた。この北西壁面の張り出し部からは、白色粘土の塊が、径約50cmの範囲にわたって貼り付くような状態で出土した。粘土の厚さは10～15cmあり、総重量は約24.5kgあった。また、埋土上層からは多量の土器とともに鉄鏃が2点出土している。出土地点は図50に示した。

3．遺　物

遺物は、遺物整理コンテナにして25箱出土した。種類は、土器、石器、鉄製品がある。時代は弥生時代から飛鳥時代までのものが出土している。以下に、土器、石器、鉄製品の順で概要をのべる。

（1）土器

出土した土器には弥生土器、古墳時代の土師器、飛鳥時代の土師器・須恵器がある。量的には弥生土器と古墳時代の土師器が大半を占める。掲載土器の概要は表14にまとめた。

1）飛鳥時代（図58・59、図版25）

1・2は、土坑15出土の土師器長胴甕である。土坑15はこの長胴甕2個体を合わせて土器棺としたもので、1が棺身、2が棺蓋と考えられる。1は内外面ともに縦ハケ調整で仕上げ、口縁部は内弯する。2は器表面の磨滅が著しいが、内外面ともに縦ハケ調整がみとめられる。体部上半の一部から口縁部にかけては意図的に打ち欠いている。

3・4は調査区北半の遺物包含層から出土した須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりは短く、器高は低い。3の底部ヘラケズリは約1／2に留まる。陶邑編年のTK217型式に位置付けられるものと考えられる。

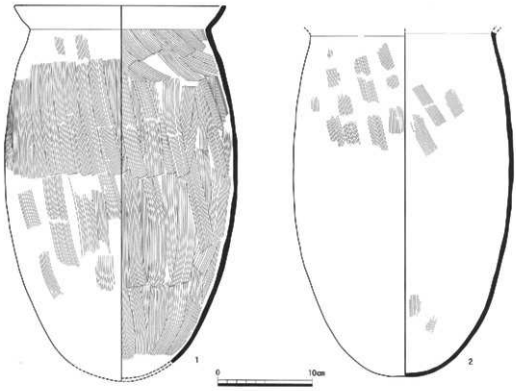


図58　土坑15出土土器実測図（1：4）

2）弥生時代後期から古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けられる資料には、竪穴住居２・11・14出土のものがある。以下に遺構単位で出土土器の概要を述べる。

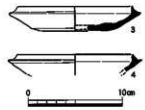


図59　遺物包含層出土土器実測図（１：４）

竪穴住居２（図60、図版25）　５・６は、住居の床面直上で出土した土器である。５は阿波からの搬入品の広口壺である。体部外面は縦ハケ、体部内面下半はヘラケズリ、内面上半と底部はユビオサエする。頸部と体部の境目は接合のための強い横ナデにより器壁が薄くなる。頸部は縦ハケののち横ナデを施す。６は手づくね成形の粗製の鉢である。平底でコップ状を呈する。外面はナデで仕上げるが、粘土紐接合痕跡が残る。体部内面はハケ目、底部内面は強いナデをほどこす。

５の阿波の広口壺の体部球形化や住居の埋土から口縁端部が肥厚する布留式の甕口縁部の破片が出土していることから、これらの土器は布留式古段階に位置付けたい。

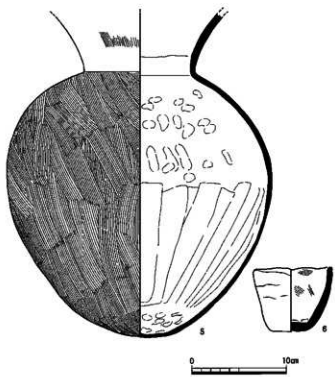


図60　竪穴住居２出土土器実測図（１：４）

竪穴住居11（図61、図版25）　７・８は住居の床面直上で出土した土器である。７は、くの字状口縁の甕である。体部外面は粗いタタキののち下半部のみ板ナデを加える。頸部付近には縦ハケがみとめられるが、タタキに切られる。体部内面は上半１／４までヘラケズリし、下半３／４はナデで仕上げる。口縁部は横ナデする。外面は全面に煤が付着する。８は台付き鉢である。脚台から体底部までを一体で作り、その上に体部を積み上げる。脚台部から底部外側には粘土を充填する。脚台部はナデで仕上げる。体部は内外面ともに板の当たりの痕跡が残るため、板ナデののちナデを施したものと考えられる。体部と口縁部の境の屈曲は緩く、口縁部は直線的に開く。口縁

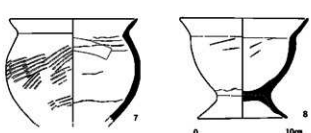


図61　竪穴住居11出土土器実測図（１：４）

部外面は横ナデ、内面は板ナデする。

7の甕の体部が球形化していることや、内面調整にヘラケズリが採用されていることから庄内式併行期から布留式古段階に位置付けたい。住居の埋土からは生駒西麓産の庄内型甕の破片や布留式の甕の口縁部片が出土している。

竪穴住居14埋土（図62・63、図版26）　9～59は、竪穴住居14の埋土から出土した土器である。

9～12は、口縁部が内弯しながら立ち上がり、端部を肥厚させる布留式の甕である。13～26は、胎土に雲母および角閃石を含む生駒西麓産の庄内型甕である。口縁端部の形状は、わずかにつまみ上げるもの（13・15～17・19・20・24・26）、強いつまみ上げと横ナデにより端部に擬凹線がめぐるもの（18・22・25）、端部拡張が弱いもの（14・21・23）などのバリエーションがある。体部が残存するものについては、外面は右上がりのタタキに一部ハケ目が追加される。内面は25をのぞいて、頸部直下からヘラケズリする。25のヘラケズリは頸部のやや下から行い、生駒西麓産ではない可能性がある。27は大和産の庄内型甕と考えられる。口縁端部をつまみ上げ、体部内面をヘラケズリする。28はくの字状口縁の甕である。尖り底で、体部外面は縦ハケ、内面下半は縦ハケ、上半は横ハケを施す。口縁部は体部との境目部分を横方向に板ナデし、他は横ナデする。全体に二次焼成を受け、器表面の剥離が著しい。製塩土器の可能性がある。29～33は在地産の甕である。29はくの字状口縁の甕で、口縁端部をつまみ上げる。体部外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。口縁部と体部の境は縦ハケし、口縁部内面は横ハケする。30～33は、くの字状口縁で口縁部は横ナデにより外反する。30は体部外面タタキをナデ消す。内面は板ナデする。31の体部外面は連続らせんタタキ、内面はナデで仕上げる。32の体部外面は連続らせんタタキ、内面は板ナデする。33は、全体的に磨滅が著しく外面調整は不明である。内面は横ハケがみとめられる。34・35は、体部外面に矢羽根タタキ、内面はヘラケズリする。36・37は受口状口縁の甕である。36は端部に水平な面をもつ。37は口縁部の立ち上がりの屈曲は弱く端部は内傾する面をもつ。38～39は、甕の底部と考えられる。38は上げ底で、外面ハケ目ナデ消し、内面ハケ目で仕上げる。39は平底で内外面ともハケ目で仕上げる。40は平底で外面はタタキで底部付近のみ縦ハケ、内面

表13　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石器	20箱	弥生土器23点、石器2点	15箱	0箱
古墳時代	土師器、鉄製品	8箱	土師器55点、鉄鏃2点	3箱	0箱
飛鳥時代	土師器、須恵器	3箱	土師器2点、須恵器2点	1箱	0箱
合　計		31箱	86点（12箱）	19箱	0箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

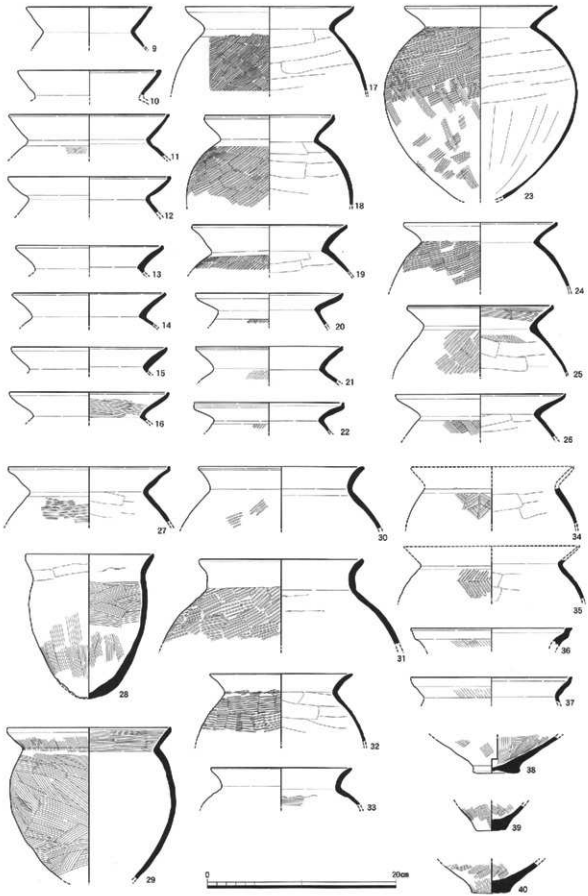


図62　竪穴住居14埋土出土土器実測図１（１：４）

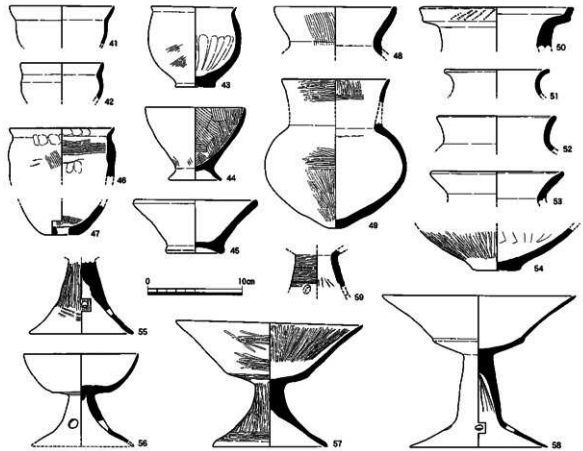


図63　竪穴住居14埋土出土土器実測図２（１：４）

はクモの巣状ハケ目である。

41・42は布留式の小型丸底土器である。ともに精製された胎土が使用され、色調は橙色を呈する。磨滅のため調整は不明である。43～45は鉢である。43は丸みをもつ体部から口縁部が外反して短く立ち上がる。体部外面下半はタタキをナデ消し、上半から口縁部、内面上半にかけては横ナデする。内面下半は指でナデ上げる。44は台付鉢である。ハケ調整の甕の下半部と同様の製作技法の体部に脚台部を付加したものである。外面はハケ目ナデ消し、内面はハケ目を残す。45は上げ底の底部から体部が直線的に大きく開く。類例の少ない形状である。46は手づくね成形で、頸部と口縁部内面、体部内面下半には指オサエが明瞭にのこる。体部外面と内面上半は板ナデ状のハケ目がつく。47は有孔鉢である。穿孔は焼成前に内側から行っている。

48～54は壺である。48・49は短頸壺で、48の口縁部はやや内弯ぎみに立ち上がる。外面は縦ハケののち横ナデ、内面は横ナデする。49の底部は矮小化した平底で、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面は短い単位の横ヘラミガキ、内面端部付近は縦ヘラミガキ、その下は横ヘラミガキを行う。体部外面下半は短い単位の縦ヘラミガキ、上半は横ヘラミガキを行う。内面はナデで仕上げる。器壁全面に密なヘラミガキを施し、焼成により赤く発色して光沢をもつ。50は受口状口縁をもつ広口壺である。口縁端部は水平な面をもつ。端部外面にはハケ状工具により列点文をめぐらす。51～53は口縁部が短く外反する広口壺である。54は壺の底部と考えられる。外面は

密な縦ヘラミガキ、内面は板ナデする。

55～58は高杯である。55は高杯の脚部である。裾まで明瞭な屈曲点をもたずに広がる。脚部外面は縦ヘラミガキ、裾部は外面タタキをナデ消し、内面は横ナデする。円形の４方向透かしを外側から入れる。56は椀形高杯である。杯部と脚部の成形は円盤充填法による連続成形技法を用いている。杯底部はほぼ水平で、杯部は内弯しながら上方に立ち上がる。脚部は明瞭な屈曲点を持たずにゆるやかに開く。円形の３方向透かしを外側から入れる。57は皿形高杯である。浅く小さい杯底部から杯部が直線的に大きく開く。脚部と杯部の高さはほぼ等しい。杯部外面は横ヘラミガキ、内面は底部はナデ、杯部は縦ヘラミガキする。脚部は中実で、ゆるやかに開く。脚端部は横ナデにより下方に突出する。脚部外面縦ヘラミガキ、裾部は横ヘラミガキする。58は皿形高杯である。浅い杯底部から杯部が外反ぎみに大きく開く。杯底部と杯部の境に稜をもつ。脚部は中空で、裾部は明瞭な屈曲点をもって開く。円形の４方向透かしを外側から入れる。

59は器台である。筒部と口縁部の境には明瞭な屈曲点をもつ。筒部には５条１単位の凹線文を３段以上いれる。凹線文の間に竹管文をめぐらす。また、円形透かしが１箇所残存する。

以上の竪穴住居14埋土出土土器は、庄内式併行期から布留式古段階までの幅を持つ資料群である。また、搬入品の生駒西麓産の庄内型甕の比率が高いことが特徴として注目される。

竪穴住居14床面・土坑45（図64、図版27・28）　60～82は竪穴住居14の床面、ならびに竪穴住居14の貯蔵穴と考えられる土坑45から出土した土器である。67・81が土坑45出土、それ以外は住居床面から出土した。

60は近江の影響を受けて在地で生産された受口状口縁甕である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は面をもつ。口縁部は横ナデののち外面に列点文をめぐらす。体部は分割成形で下半と上半の境の粘土接合痕跡が明瞭にのこる。下半はタタキを残し、上半は縦ハケののち肩部に６条１単位の直線文と列点文をめぐらす。体部内面は横ハケで仕上げる。外面全体に煤が付着する。

61～68は鉢である。61は台付の受口状口縁をもつ鉢である。胎土から近江からの搬入品と考えられる。口縁部は横ナデののち刺突文を２段に入れる。体部は粗い縦ハケののち、頸部に刺突文、肩部に１条の凹線を２段めぐらし、体部最大径付近には貼り付け突帯をめぐらして刻み目を入れ、真中に凹線を入れる。下半には煤が付着する。体部と脚台部の接合は円盤充填法による。脚台部には円形の３方向透かしを外側から入れる。62も近江からの搬入品と考えられる受口状口縁鉢である。口縁部は横ナデののち刺突文をめぐらす。体部は縦ハケを下半部はナデ消し、肩部に列点文、最大径付近に上向きの連弧状文をめぐらす。内面はナデで仕上げる。63・64は、ハケ調整の甕の下半部と同様の製作技法による鉢である。外面縦ハケ、内面横ハケで仕上げる。65～67は台付鉢である。体部は甕下半と同様の作りで、脚台部に輪状の粘土を貼り付ける。65は体部外面ハケ目ナデ消し、内面はハケで仕上げる。体部と脚台部の境には指オサエ痕がのこる。66は体部から脚台部はナデ、内面はハケ目ののちケズリ上げる。67は脚台部のみ残存する。外面に指オサエ痕がのこる。68は手づくね成形の鉢である。器壁は厚く、粘土を捏ねた痕跡が残る。

69～72は壷である。69は短頸壷で、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部は外面縦ハケののち

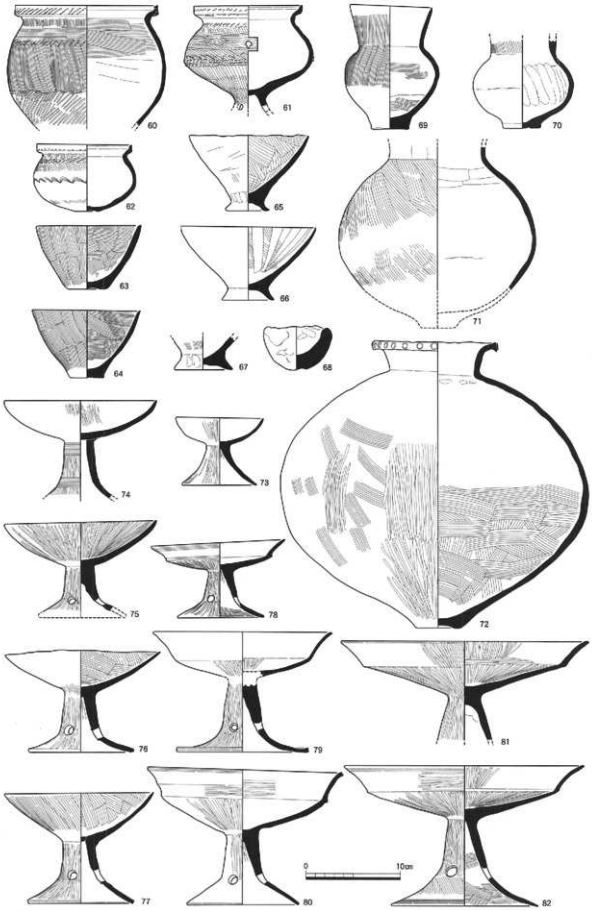


図64　竪穴住居14床面・土坑45出土土器実測図（1：4）

端部を横ナデする。内面はナデで仕上げる。体部外面上半は縦ハケ、下半はナデ。内面は横ハケを一部ナデ消す。70は口縁部を欠損するが、短頸壷と考えられる。口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面は縦ハケ、内面はナデ。体部外面はナデで仕上げるが、下半は型作りで、粘土収縮痕がのこる。体部内面はナデ上げる。71は壷体部である。口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部は縦方向に板ナデする。体部外面は縦ハケで、下半部はハケ目をナデ消す。内面の頸部直下は板ナデし、他はナデで仕上げる。72は広口壷である。口縁部は直線的に立ち上がり、大きく外反する。端部は上下に拡張し、円形浮文を貼り付ける。体部最大径は中位よりやや下にある。体部外面は縦ハケののち縦ヘラミガキ、内面下半は横ハケ、上半はナデにより仕上げる。

73～82は高杯である。73～77は椀形高杯、78～82は皿形高杯。73は小型の椀形高杯で、外面は全面縦ヘラミガキを施す。杯部は内面もヘラミガキの痕跡がみとめられる。脚部はナデで仕上げる。74の杯部は内弯しながら立ち上がる。杯部は外内面ともに縦ヘラミガキを施し、端部のみ横ナデする。脚部と杯部は分割成形で、脚部は明瞭な屈曲点を持たず開く。縦ヘラミガキののち上から６条１単位と５条１単位の櫛描直線文を２段にめぐらす。75～77は、直線的に開く浅い杯部をもつものである。脚部と脚裾部の間に明瞭な屈曲点を持ち、裾部が大きく開く。75は脚高が低く、杯部と脚部の高さがほぼ等しい。杯部と脚部は分割成形で、脚部は中実である。杯部は内外面ともに全面縦ヘラミガキを施す。脚部外面にも縦ヘラミガキを施したのち円形の３方向透かしを外側から入れる。76は、杯部は外面はハケ目のち指ナデ、内面はハケで仕上げる。脚部は、外面に粗い縦ヘラミガキを施したのち、円形の３方向透かしを外側から入れる。脚裾端部から内面は横ナデする。77は、杯部内外面ともに縦ハケで仕上げる。脚部と杯部の成形には円盤充填技法による連続成形技法を用いている。脚部は縦ヘラミガキののち円形の３方向透かしを外側から入れる。脚裾端部は強く横ナデし、擬凹線がめぐる。78は小型の皿形高杯である。杯底部と杯部の境に稜を持ち、杯部が大きく外反して開く。杯部と杯底部との境に１条の凹線文、口縁部外面に２条の凹線文をめぐらす。杯底部外面は縦ヘラミガキが施される。脚部は、脚裾部が屈曲点を持って開く。外面は短い単位の縦ヘラミガキののち円形の３方向透かしを外側から入れる。内面は脚裾部は横ハケする。79は、杯底部から杯部が外反して斜上方に開く。全面２次焼成を受け磨滅が著しいが、杯部外面には縦ヘラミガキの痕跡が認められた。脚部は、脚裾部が屈曲点を持って開く。外面は縦ヘラミガキののち円形の透かしを外側から入れる。残存するのは１箇所のみであるが、間隔からみて３方向と考えられる。脚裾端部は上方に拡張し、擬凹線がめぐる。脚裾部内面には直径１㎝弱の粘土片が４箇所に張り付く。80は、深さのある杯底部から杯部が外反して上方に開くため杯部高が高くなり、杯部と脚部の高さがほぼ等しい。杯底部と杯部の境には稜をもつ。口縁端部は面をもち、擬横線がめぐる。杯底部外面は縦ヘラミガキ、杯部は内外面ともに横ヘラミガキを施す。脚部は、脚裾部が明瞭な屈曲点を持って直線的に開く。脚裾端部には擬凹線がめぐる。調整は、外面縦ヘラミガキを施したのち円形の３方向透かしを外側から入れる。81は、杯底部から杯部が短く外反して開く。杯部外面は縦ヘラミガキ、内面は縦ヘラミガキののち杯部と杯底部の境を横ヘラミガキする。脚部はエンタシス状に膨らむ。外面は縦ヘラミガキ、内

表14　掲載土器一覧表

No.	器種・器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	胎土	備考
1	土師器 甕	土坑15	(22.2)			40	外・内10YR7/3にぶい黄橙色 断10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗　0.5～5㎜の石英・長石・チャート多量	
2	土師器 甕	土坑15				50	外7.5YR6/6橙色 内・断7.5YR7/6橙色	やや粗　0.5～5㎜の石英・長石・チャート多量	口縁部打ち欠き
3	須恵器 杯身	遺物包含層	(12.0)			15	2.5Y7/1灰白色	密	焼成やや軟
4	須恵器 杯身	遺物包含層	(12.3)			10	外5RP6/1紫灰色　内N6/0灰色 断5RP5/1紫灰色	密　0.5～3㎜の白色砂粒少量	
5	土師器 広口壺	竪穴住居2 床面				60	外7.5YR4/4褐色 内7.5YR3/3暗褐色 断5YR4/4にぶい赤褐色	密　0.5～2㎜のチャート、雲母、クサリレキ多量	阿波からの搬入品　内面下半に内容物？付着
6	土師器 鉢	竪穴住居2 床面	8.1	6.8		90	外7.5YR5/3にぶい褐色 内・断7.5YR6/6橙色	やや粗　0.5～2㎜の石英・長石・チャート多量、クサリレキ多量	
7	土師器 甕	竪穴住居11 床面	(13.4)			30	外10YR1.7/1黒色 内10YR5/2灰黄褐色 断10YR6/4にぶい黄橙色	やや粗　0.5～2㎜の石英・長石・チャート少量	土器A 外面全面煤付着
8	土師器 台付鉢	竪穴住居11 床面	13.5	10.8	9.5	80	外5YR6/4にぶい橙色～10YR 7/3にぶい黄橙色　内10YR7/3 にぶい黄橙色～10YR7/1黒色 断10YR3/1黒褐色	やや粗　0.5～2㎜の石英・長石多量、チャート少量	土器B 二次被熱
9	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(13.4)			口縁 20	7.5YR5/6橙色	やや粗　0.5～1㎜の石英・長石、クサリレキ多量	布留式
10	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.0)			口縁 10	10YR7/3にぶい黄橙色	密　0.5～1㎜の石英・長石・チャート少量	布留式
11	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			口縁 20	外・内10YR7/3にぶい黄橙色 断10YR4/1褐灰色	密　0.5m以下の石英・長石・チャート少量	布留式
12	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			口縁 15	10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗　0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量	布留式
13	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.8)			口縁 20	外・断10YR4/2灰黄褐色 内10YR2/1黒色	密　0.5～1㎜の石英・長石少量、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
14	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.0)			口縁 30	外10YR3/2黒褐色 内・断10YR4/3にぶい黄褐色	密　0.5m以下の石英・長石多量　雲母・角閃石多量	生駒西麓産 庄内甕
15	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.6)			口縁 15	10YR3/2黒褐色	密　0.5～2㎜の石英・長石多量、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
16	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.7)			口縁 15	外10YR3/1黒褐色 内10YR4/3にぶい黄橙色 断10YR4/1褐灰色	密、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
17	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.8)			20	外10YR3/3暗褐色 内・断10YR5/3にぶい黄褐色	やや粗　0.5～3㎜の石英・長石多量、雲母多量、角閃石少量	生駒西麓産 庄内甕 口縁煤付着
18	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(13.6)			15	10YR4/2灰黄褐色	密　0.5～3㎜の石英・長石少量、雲母・角閃石少量	生駒西麓産 庄内甕
19	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	16.5			口縁 100	10YR3/3暗褐色	密　0.5～2㎜の石英・長石少量、雲母多量	庄内式 口縁煤付着
20	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.8)			口縁 20	外・断10YR4/2灰黄褐色 内10YR4/3にぶい黄褐色	密　1㎜以下の石英・長石多量、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
21	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.6)			口縁 30	10YR5/3にぶい黄色	0.5㎜以下の石英・長石微量、雲母多量、角閃石少量	生駒西麓産 庄内甕
22	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.0)			口縁 25	外10YR3/1黒褐色 内10YR2/1黒色 断10YR3/1黒褐色	密　0.5～3㎜の石英・長石少量、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
23	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.0)			40	10YR3/2黒褐色	密　0.5～3㎜の石英・長石・チャート多量、角閃石多量、雲母少量	生駒西麓産 庄内甕 下半煤付着
24	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(16.2)			10	10YR6/2灰黄褐色	密　0.5～1㎜の石英・長石・チャート少量、雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
25	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.6)			10	10YR3/1黒褐色	密　雲母少量、1㎜以下の石英・長石少量	生駒西麓産 庄内甕
26	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(18.0)			口縁 40	10YR4/2灰黄褐色	密　雲母多量	生駒西麓産 庄内甕
27	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			5	外10YR6/3にぶい黄橙色 内7.5YR6/3にぶい褐色	密　0.5m以下の石英・長石少量、クサリレキ少量、雲母多量	在地の庄内志向甕
28	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	13.4	15.3		80	外10YR6/3にぶい黄橙色 内10YR6/4にぶい黄橙色 断7.5YR7/6橙色	粗　0.5～2㎜の石英・長石少量、0.5～4㎜のチャート多量	二次被熱で表面剥離

No.	器種・器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	胎土	備考
29	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.2)			70	外10YR5/4にぶい黄褐色 内10YR6/4にぶい黄橙色 断10YR5/4にぶい黄褐色	やや粗 0.5～2㎜のチャート多量	
30	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			口縁 25	外7.5YR8/4浅黄橙色 内10YR8/2灰白色 断10YR4/1褐灰色	粗 0.5～5㎜のチャート多量、1～2㎜の石英・長石少量	
31	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			20	外・内10YR8/4浅黄橙色 断10YR7/1灰白色	やや粗 0.5～3㎜の石英・長石少量、チャート多量	
32	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.0)			口縁 50	10YR7/3にぶい黄橙色	密 0.5～2㎜の石英・長石少量	口縁煤付着
33	土師器 甕	竪穴住居14 埋土	(15.0)			口縁 50	外・内10YR8/2灰白色 断10YR7/1灰白色	粗 0.5～3㎜のチャート多量	磨滅著しい
34	土師器 甕	竪穴住居14 埋土				5 以下	10YR7/3にぶい黄橙色	密 0.5～1㎜の石英・長石・チャート少量	外面縦杉状タタキ
35	土師器 甕	竪穴住居14 埋土				5	外7.5YR7/4にぶい橙色 内・断10YR5/2灰黄褐色	密 1㎜以下の石英・長石・チャート少量	外面縦杉状タタキ
36	土師器 受口状口縁甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			口縁 20	10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗 0.5～2㎜のチャート多量	
37	土師器 受口状口縁甕	竪穴住居14 埋土	(17.0)			口縁 20	10YR7/4にぶい黄橙色	粗 0.5～3㎜のチャート多量	
38	土師器 壺底部	竪穴住居14 埋土			5.0	底部 100	外10YR6/1褐灰色 内・断10YR6/2灰黄褐色	密 0.5～3㎜のチャート少量	全体の10%残存
39	土師器 壺底部	竪穴住居14 埋土			3.1	底部 100	10YR6/2灰黄褐色	密 0.5～2㎜のチャート少量	全体の10%残存
40	土師器 壺底部	竪穴住居14 埋土			4.1	底部 100	外7.5YR6/3にぶい褐色 内・断10YR7/3にぶい黄橙色	密 0.5～2㎜の石英・長石・チャート少量	全体の10%残存
41	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(11.0)			20	5YR6/6橙色	密 0.5～3㎜の石英・長石少量、クサリレキ少量	小型丸底土器
42	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(8.8)			20	5YR6/6橙色	密	小型丸底土器
43	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(9.0)	8.5	4.0	50	外10YR6/3にぶい黄橙色 内・断10YR5/3にぶい黄褐色	やや粗 0.5～4㎜のチャート多量	
44	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(10.4)	7.7	(5.4)	60	外7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR7/3にぶい橙色 断7.5YR6/1褐灰色	やや粗 0.5～1㎜の石英・長石少量、0.5～3㎜のチャート多量	
45	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(13.2)	5.7	5.8	30	外・内10YR8/3浅黄橙色 断10YR5/1褐灰色	やや粗 0.5～5㎜の石英・長石・チャート少量	磨滅著しい
46	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土	(11.0)			20	外・内10YR2/1黒色 断10YR5/1褐灰色	やや粗 0.5～2㎜の石英・長石少量	手づくね
47	土師器 鉢	竪穴住居14 埋土			3.7	底部 100	外7.5YR7/4にぶい橙色 内10YR5/3にぶい黄褐色 断7.5YR8/4浅黄橙色	やや粗 0.5～3㎜の石英・長石・チャート多量	有孔鉢 全体の10%残存
48	土師器 短頸壺	竪穴住居14 埋土	(13.0)			10	外10YR8/3浅黄橙色 内10YR6/1褐灰色 断＝外＋内	密 0.5～2㎜の石英・長石・チャート少量	
49	土師器 短頸壺	竪穴住居14 埋土	(11.4)		1.4	30	外2.5YR4/4にぶい赤褐色 内7.5YR7/4にぶい橙色 断10YR5/1褐灰色	やや粗 0.5～5㎜の石英・長石・チャート多量	
50	土師器 広口壺	竪穴住居14 埋土	(16.4)				外10YR6/1褐灰色 内10YR5/1褐灰色 断N4/0灰色	密 0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量	
51	土師器 広口壺	竪穴住居14 埋土	(11.2)			口縁 20	外10YR8/2灰白色 内10YR8/3浅黄橙色 断10YR4/1褐灰色	粗 0.5～4㎜の石英・長石・チャート多量	
52	土師器 広口壺	竪穴住居14 埋土	(12.2)			口縁 40	10YR8/2灰白色	やや粗 0.5～3㎜の石英・長石多量、0.5～2㎜のチャート少量	
53	土師器 広口壺	竪穴住居14 埋土	(13.8)			口縁 20	外7.5YR7/4にぶい橙色 内10YR7/1灰白色 断10YR8/2灰白色	やや粗 0.5～2㎜の石英・長石やや多量、チャート少量	
54	土師器 壺底部	竪穴住居14 埋土			5.1	底部 100	外10YR8/3浅黄橙色 内・断10YR7/2にぶい黄橙色	密 0.5～5㎜の石英・長石少量	全体の10%残存
55	土師器 高杯脚部	竪穴住居14 埋土			(11.0)	脚部 80	外7.5YR8/3浅黄橙色 内10YR8/1灰白色	密 0.5～2㎜のチャート多量、石英・長石少量	
56	土師器 椀形高杯	竪穴住居14 埋土	(12.2)			40	10YR7/4にぶい黄橙色	密 1㎜以下の石英・長石少量、クサリレキ少量	器表面剥離
57	土師器 皿形高杯	竪穴住居14 埋土	(19.6)	13.4	(12.0)	50	外・内10YR6/3にぶい黄橙色 断10YR4/1褐灰色	密 0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量	

No.	器種・器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	胎土	備考
58	土師器 皿形高杯	竪穴住居14 埋土	(20.4)	16.0	(14.6)	50	外・内7.5YR6/6橙色 断10YR6/1褐灰色	粗 0.5～5㎜の石英・長石多量、チャート少量	
59	土師器 器台	竪穴住居14 埋土				10 以下	外10YR8/3浅黄橙色 内7.5YR7/4にぶい橙色	密 0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量、クサリレキ少量	
60	弥生土器 甕	竪穴住居14 床面	(15.0)			40	外7.5YR6/3にぶい褐色 内・断7.5YR6/4にぶい橙色	密 0.5～3㎜の石英・長石少量、1～3㎜のチャート微量	受口状口縁 外面全面煤付着
61	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	11.4			95	外7.5YR8/2灰白色～5YR7/4にぶい橙色 内・断7.5YR8/4浅黄橙色	やや粗 0.5～3㎜の石英・長石多量、0.5～2㎜のチャート少量、クサリレキ少量	近江系、搬入か
62	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	10.0	7.0	2.6	100	外10YR6/2灰黄褐色 内・断10YR2/1黒色	やや粗 0.5～2㎜の石英・長石多量、0.5～1㎜のチャート少量	近江系、搬入か 全体磨滅著しい
63	弥生土器 鉢	竪穴住居14 壁溝	(11.0)	6.8	3.9	70	外・内10YR7/4にぶい黄橙色 断10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗 0.5～3㎜のチャート多量、クサリレキ多量	
64	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	11.4	7.1	3.5	70	外・内5YR5/4にぶい赤褐色 断10YR3/2黒褐色	やや粗 1～3㎜のチャート多量、0.5～3㎜の石英・長石少量	
65	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	12.5	7.9	(4.7)	98	外10YR6/4にぶい黄橙色 内・断10YR3/1黒褐色	密 0.5～1㎜の石英・長石少量	
66	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	(14.2)	7.7	(5.5)	40	外10YR4/2灰黄褐色 内10YR3/黒褐色 断10YR5/2灰黄褐色	密 0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量	
67	弥生土器 鉢	土坑45 竪穴住居14 貯蔵穴			6.0	底部 80	外5YR7/4にぶい橙色 内・断10YR8/4浅黄橙色	やや粗 0.5～3㎜のチャート多量、0.5～2㎜の石英・長石少量、クサリレキ少量	
68	弥生土器 鉢	竪穴住居14 床面	6.5	4.7		100	外10YR7/2にぶい黄橙色 ～10YR3/1褐灰色 内10YR6/2灰黄褐色	粗 0.5～3㎜のチャート多量、0.5～2㎜の石英・長石少量	手づくね
69	弥生土器 短頸壺	竪穴住居14 床面	8.6	13.1	4.0	80	外・内N2/0黒色 断10YR6/2灰黄褐色	密 0.5～1㎜のチャート微量	焼成時に全面黒色化する
70	弥生土器 短頸壺	竪穴住居14 床面			4.1	50	外10YR6/4にぶい黄橙色 内7.5YR6/4にぶい橙色 断7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗 0.5～3㎜のチャート多量、0.5～2㎜の石英・長石少量	下半部型作り
71	弥生土器 壺	竪穴住居14 床面				30	外10YR7/4にぶい黄橙色 内・断10YR6/4にぶい黄橙色	密 0.5～4㎜の石英・長石・チャート少量	
72	弥生土器 広口壺	竪穴住居14 床面	12.7	30.3	4.8	95	外10YR8/3浅黄橙色 内2.5Y 4/1黄灰色～2.5Y8/3淡黄色	やや粗 0.5～5㎜のチャート多量、石英・長石少量	
73	弥生土器 椀形高杯	竪穴住居14 床面	9.2	7.2	7.8	95	外7.5YR5/6橙色 内7.5YR5/6明褐色 断10YR2/1黒色	やや粗 0.5～3㎜の石英・長石多量、チャート少量	
74	弥生土器 椀形高杯	竪穴住居14 床面	16.0			90	外10YR6/2灰黄褐色 内10YR7/4にぶい黄橙色 断10YR6/1褐灰色	密 0.5～2㎜のチャート少量	全体磨滅著しい
75	弥生土器 椀形高杯	竪穴住居14 床面	16.0			90	外10YR8/3浅黄橙色 内10YR3/1黒褐色 断10YR8/4浅黄橙色	密 0.5～2㎜の石英・長石・チャート少量	
76	弥生土器 椀形高杯	竪穴住居14 床面	16.5	10.9	11.0	90	外10YR4/2灰黄褐色 内10YR5/4にぶい黄褐色 10YR3/1黒褐色	密 0.5～6㎜のチャート少量、0.5～2㎜の石英・長石少量	
77	弥生土器 椀形高杯	竪穴住居14 床面	(15.8)	11.9	10.4	70	外10YR5/3にぶい黄褐色 内10YR5/2灰黄褐色 断10YR3/1黒褐色	やや粗 0.5～4㎜のチャート多量、0.5～2㎜の石英・長石散在	
78	弥生土器 皿形高杯	竪穴住居14 床面	14.2	8.3	9.2	98	外・断10YR6/5明黄褐色 内10YR7/4にぶい黄橙色	密 0.5～2㎜の石英・長石・チャート少量	
79	弥生土器 皿形高杯	竪穴住居14 床面	(19.0)	12.7	(14.0)	80	外2.5Y6/6橙色 内2.5Y7/4淡黄橙色 断7.5YR8/3浅黄橙色	やや粗 0.5～5㎜の石英・長石・チャート多量	二次被熱
80	弥生土器 皿形高杯	竪穴住居14 床面	20.4	11.7	14.7	90	外・内7.5YR6/4にぶい褐色 断7.5YR6/6橙色	やや粗 0.5～5㎜の石英・長石多量、0.5～3㎜のチャート少量	器表面剝離著しい
81	弥生土器 皿形高杯	土坑45 竪穴住居14 貯蔵穴	(26.0)			40	外・内5YR6/6橙色 断10YR7/3にぶい黄橙色	密 0.5～3㎜の石英・長石・チャート少量	
82	弥生土器 皿形高杯	竪穴住居14 床面	25.0	15.0	(15.0)	80	外10YR8/3浅黄橙色～10YR4/2灰黄褐色 内7.5YR7/4にぶい橙色～10YR5/2灰黄褐色 断10YR6/3にぶい黄橙色	密 0.5～2㎜のチャート少量、0.5～1㎜の石英・長石少量	二次被熱で器表面剝離著しい

面は丁寧に指ナデする。82は、杯底部から杯部が大きく外反して開く。杯部外面は横ヘラミガキののち口縁部に２条の凹線文をめぐらす。杯部内面と杯底部内外面は縦ヘラミガキを施す。杯部と脚部は分割成形である。脚部は明瞭な屈曲点をもたずに脚裾まで大きく開く。脚柱部外面は縦ヘラミガキのち円形の３方向透かしを入れる。脚裾部は外面縦ハケ、脚裾端部は横ナデし４条の凹線文をめぐらす。内面は横ハケする。

以上の竪穴住居14床面ならびに土坑45出土土器は、弥生時代後期後葉（山城Ⅴ－３・４様式）に位置付けられる資料と考えられる。

（２）石器（図65、図版29）

石１は竪穴住居14の埋土から出土したサヌカイトの石核である。長径約７㎝、厚さ約1.5㎝、重量は142.16ｇある。風化が著しいが、表面の約１／３に剥離面が認められ、裏面にもフィッシャーが認められる。一次加工を行った可能性がある。

石２は、竪穴住居14の床面東隅で出土した台石である。石材は砂岩で、表面は火を受ける。最大長33.0㎝、最大幅30.5㎝、最大厚は10.6㎝、重量は11.72kgある。表面は敲打により浅く凹む箇所がある。

他に、竪穴住居14の埋土から、一辺５～15㎝程度のチャートが８点出土した。加工痕は認められないが、火を受けている。

（３）鉄器（図66、図版29）

竪穴住居14の埋土上層から鉄鏃が２点出土した。鉄鏃１は、短茎式で浅い腸抉をもつ。全長7.6㎝、重量18.47ｇあり、大型品で完存する。鏃身部の形状は長三角形で、下半部は直線的である。鏑はも

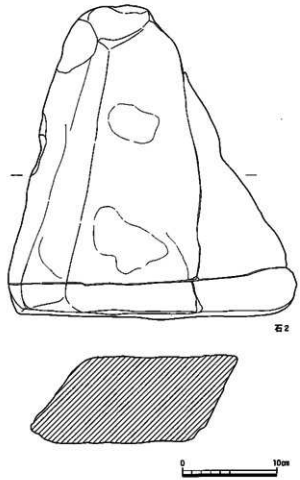


図65　石２実測図（１：４）

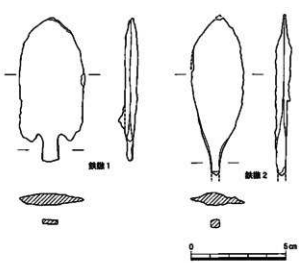


図66　鉄鏃実測図（１：２）

たず、断面は薄いレンズ状を呈する。腸抉部分は逆三角形状に尖る。鏃身部長は6.6㎝、厚さは6㎜ある。茎部は長さ1.4㎝、断面は長方形で厚さは２㎜と薄い。鉄鏃２は、いわゆる柳葉式鉄鏃である。鏃身先端と茎部端を欠損する。残存長は8.4㎝あり、うち鏃身長が7.1㎝、茎長が1.3㎝である。重量は14.90ｇある。鏃身部は下半部がすぼまり、明瞭な屈曲点を持たずに茎部にいたる形状で、鏑はもたず、断面は薄いレンズ状を呈する。厚さは７㎜ある。茎部の断面は隅丸の正方形で、茎の厚さは４㎜ある。

＜参考文献＞
川畑　純「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号　2009年
菅原康夫・瀧山雄一「阿波地域」『弥生土器の様式と編年』　木耳社　2000年
田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981年
森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』　木耳社　1990年

4．まとめ

（1）遺構の変遷

今回の調査では、弥生時代後期から飛鳥時代までの遺構を検出した。調査地は遺跡の南西端に近く、過去の調査で、これより西側や南側では遺構密度が低くなることがわかっていた。しかし、今回の調査で弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居３棟を検出し、当調査地以南にも集落が広がる可能性を示唆できたことは大きな成果といえる。３棟の竪穴住居に重複はないが、床面出土の遺物から時期差があることが判明した。ここで、隣接地の調査成果と合わせて、遺構の変遷を明確にしておきたい。大きくは弥生時代後期から古墳時代前期の遺構群と、古墳時代後期から飛鳥時代の遺構群の２つに大別できる（図67）。

まず、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構群について見ていきたい。土器の年代から、最も古いのは弥生時代後期後半段階の竪穴住居14と考えられる。この竪穴住居14が焼失したのち、庄

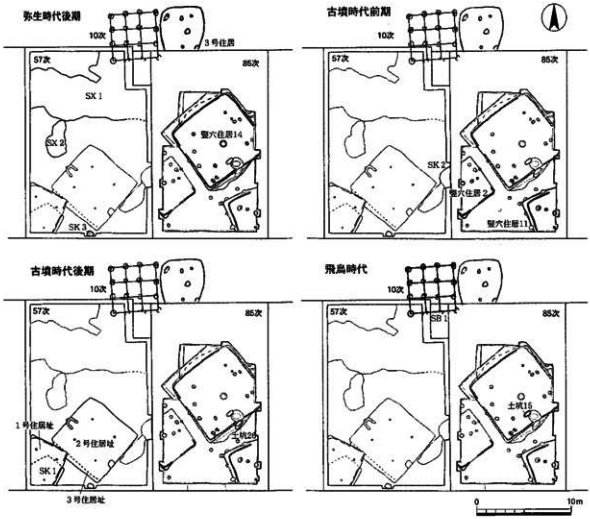


図67　遺構変遷図（１：400）

内式併行期段階と考えられる竪穴住居11が建てられる。さらに竪穴住居11が焼失し、次いで布留式古段階の竪穴住居２が建てられたと考えられる。３棟とも焼失住居であり、各住居から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、竪穴住居14が最も古く、竪穴住居11、竪穴住居２へと新しくなる結果が出ている（付章参考）。これは遺物の編年観とも大きくは矛盾しない。なお、竪穴住居14の埋土からは、床面出土遺物とは時期差のある庄内式併行期から布留式古段階の多量の土器片と炭化物が出土しているが、これは竪穴住居２・11の存続時期と重なる。このことから竪穴住居14は焼失後放棄され、竪穴住居２および11など周辺住居の廃棄物処理土坑として利用されたと考えられる。北側道路部分で実施された10次調査でも、調査地に隣接する箇所で竪穴住居１棟（３号住居）が見つかっている[1]。この３号住居は、床面出土遺物から弥生時代後期後葉（山城Ⅴ－４様式）に機能したものと考えられ、竪穴住居14から連続する。また、西に隣接する敷地で実施された57次調査ではSX１・２、SK３が３～４世紀とされ[2]、今回見つかった竪穴住居３棟と同一時期のものと考えられるが、いずれも窪みなどを廃棄物処理土坑として利用した状況が窺え、集落の縁辺と考えられる様相を示している。今回の調査地でも、住居間には時期差があり、同時に密集して住居が建てられた状況にはないことから、集落の中心域からは距離を置くものと考えている。しかし、その中にあって竪穴住居14は、規模や出土遺物の内容が卓越しており、一般的な居住住居とは異質な性格が考えられることから、次節で検討する。また、57次調査の南東で検出されたSK２は、深さや位置から今回検出した竪穴住居２の北西部分にあたる可能性が高い。

続く古墳時代中期の遺構・遺物は今回の調査地を含め隣接地でも見つかっていないが、古墳時代後期には、57次調査地で、１号住居・２号住居（３号住居の建替え）が建てられている。今回の調査地では、竪穴住居14の最上層に７世紀前半代の遺物包含層が堆積しており、竪穴住居14部分がこの頃まで浅い窪地として残存していたと考えられる。土坑26はこの遺物包含層堆積以前のものであるが、竪穴住居14がある程度埋没した段階で掘られており、古墳時代後期頃のものと考えられる。土器棺墓と考えられる土坑15は、遺物包含層堆積後に築かれていることから、７世紀前半から半ばのものと推測される。10次調査でも、今回の調査地の約20m北東で土師器の長胴甕と取手付甕を合わせ口にしたSX１が見つかっており、同時期のものと考えられる。また10次調査と57次調査にまたがって見つかった総柱の掘立柱建物SB１は、７世紀中頃以降とされる。中臣遺跡では、過去の調査で７世紀半ば以降に、掘立柱建物の方位が正方位を志向するようになることが指摘されている[3]。

なお、今回の調査区の北端で検出した炭化物を含む灰黄褐色粘質シルト層の堆積は、57次調査で見つかっている縄文時代晩期の遺物を含む堆積と同一層の可能性が考えられるが、今回の調査地では竪穴住居14に大半を削平されていることもあり、遺物は確認できなかった。今後の周辺調査での成果の蓄積が望まれる。

（2）竪穴住居14について

今回、調査区北半で見つかった竪穴住居14は、一辺が7.5×7.0mあり、検出面から床面までの深さは0.45mある。中臣遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて集落の一つの盛期があり、これまでに84棟の竪穴住居が見つかっているが、その中に５角形や７角形といった平面多角形の住居が数棟認められる。それらは概して、対辺間の最大長が９m前後あり、同時期の方形あるいは円形の竪穴住居に比べ規模が大きい。また、複数の方形や円形の竪穴住居群の中に１棟の大型多角形住居というまとまりが認められる。これらのことから、多角形住居は一般的な居住用住居とは性格を異にする、集会所や作業場のような特殊な位置付けにあると考えられている。竪穴住居14は、それら多角形住居の規模には及ばないが、方形の住居としては最大規模を誇り、また住居の残存深だけを見れば、これまでに見つかった中で最も深い。焼失住居であり、遺存状況も良好で、竪穴住居の構造や機能を考える上でも重要な資料と言える。この住居の南隅と東隅では、遺物がまとまって出土した。北隅と西隅についても拡張して調査を行ったが、遺物は出土せず、土器は住居内である程度定められた場所に置かれていたことがわかる。また、出土土器の器種別の点数が、甕１点、壺４点、鉢７点、高杯９点と、煮沸・貯蔵形態の土器に比して、鉢・高杯といった供膳形態の土器の比率が高いことが一つの特徴として挙げられる。高杯は点数が多いのみでなく、皿形・椀形の両系統が複数存在し、小様式内での高杯の組成を考えるうえで重要な資料である。

さらに、竪穴住居14の北西壁面中央部では白色粘土塊が出土した。この粘土は、床面より１段上がった箇所で出土した。この南東壁面にも見られる張り出し部は、人為的なものか、壁の崩落によるものかは不明であるが、竪穴住居の屋根の葺き降ろし幅を考慮すれば、屋内と考えられる。この粘土塊については、土器製作用の粘土である可能性を考え、竪穴住居床面出土土器３点の胎土との比較分析を行った（付章参考）。その結果、砂の粒径組成や砕屑物の割合は、粘土塊と土器３点それぞれに異なり、粘土塊のみで土器の素地土を構成している可能性は低いが、鉱物・岩石組成は近似した組成を示すことから、素地土の一部として使用された可能性は考えられるとの見解が得られた。京都市内で同様に竪穴住居内から粘土塊が出土した岩倉忠在地遺跡[4]や、西京極遺跡[5]の分析においても同様な結果が得られている。しかしながら、いずれにおいても土器の焼成失敗品や焼成土坑と考えられる遺構、混和材となる砂などは確認されていない。また、古墳時代以前の近畿地方での未焼成粘土塊出土例の集成と分析を行った小森牧人・若林邦彦氏によると粘土塊のサイズは30～40cmのものが多数を占めるとされる[6]が、今回の中臣遺跡のものは直径が約50cmとやや大きく、出土位置も土器が置かれた南東壁面と対面となる北西壁面の中央で、入口部となる可能性のある位置であり、床面より１段上がった場所に貼り付けるように置かれていたことから、土器製作用とは異なる性格のものである可能性も考慮に入れるべきであろう。竪穴住居の機能と構造の解明にも関連する問題であり、今後の類例の増加を待ちたい。

（3）中臣遺跡85次調査出土遺物の特質

最後に、今回の調査で出土した遺物について見ておきたい。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器が大半を占める。当該時期は、弥生時代から古墳時代への変換期であり、人・ものの動きが列島規模で活発になる時期でもある。今回の調査でも、竪穴住居２から、阿波からの搬入品の広口壺が出土している。この壺は胎土や調整の特徴から「東阿波型土器」と呼ばれるもので[7]、庄内式併行期から布留式古段階にかけて、播磨や摂津、中河内で多数出土しているが、山城地域では出土例は多くなく、管見では、京都市域においては水垂遺跡で出土している[8]のみで、類例は極めて少ない。この阿波の土器以外にも、今回の調査では、近江や中河内からの搬入土器のほか、東海や中東部瀬戸内地方の影響を受けたと考えられる土器が出土している。これは中臣遺跡が、東日本と西日本の結節点に位置し、流通拠点としての役割を果たして繁栄したという従来の見解を追認する結果と言えよう。さらにそれを裏付けるのは、今回竪穴住居14の埋土から出土した２点の鉄鏃の存在である。これらは、共伴遺物から見ると、庄内式併行期から布留式の土器と共伴し、布留式期を下限とするものと考えられる。また、鏃の形態から見た場合、古墳時代前・中期の鏃の編年を行った川畑純氏による分類[9]に拠れば、中臣遺跡出土の鉄鏃１は短茎長三角形B式、鉄鏃２は大型柳葉A式となり、この２者のセット関係が見られるのは、組成の変遷による氏の段階設定のⅠ期である。このⅠ期は庄内式併行期から古墳時代前期前半に相当するとされ、これは共伴遺物による年代観とも矛盾しない。この時期に大型化した鉄鏃は、実戦用ではなく、古墳など墳墓に副葬されたものがほとんどである。こうしたことから、今回の中臣遺跡のように集落で出土した場合、その性格については鉄器生産や流通の側面から考えるべきであり、中臣遺跡が物資流通拠点として当時の政権中枢から見ても重要な位置にあったことが窺える遺物として評価できる。古墳に大量副葬された鉄鏃の生産地については、いまだ不明な点が多いが、その解明に向けても重要な遺物であると言えるだろう。

註

1）『中臣遺跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1977年
2）『中臣遺跡発掘調査概報　昭和58年度』　京都市文化観光局　1980年
3）前掲註２文献
4）同志社大学歴史資料館『岩倉忠在地遺跡』　2006年
5）『平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-20　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年、ただし、粘土塊の分析は、中臣遺跡85次調査例との比較のため、今回実施したものである。
6）前掲註４文献
7）菅原康夫「下川津B類土器と東阿波型土器」『弥生土器の様式と編年　四国編』　木耳社　2000年
8）『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1998年
9）川畑　純「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号　2009年

5．自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

京都盆地東部に相当する山科盆地内に位置する中臣遺跡の85次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が検出され、それに伴う土器片などが多量に認められている。今回の報告では、焼失住居とされる竪穴住居３棟の床面から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、各住居の年代資料を得るとともに、竪穴住居床面から出土した粘土塊および土器の胎土の鉱物・岩石学的特徴を捉え、粘土塊と土器との関係を検討し、土器の製作に関わる資料を作成する。

また、粘土塊については、比較のため西京極遺跡出土資料のデータも掲載している。

（1）竪穴住居出土炭化材の放射性炭素年代測定

試料

放射性炭素年代測定は、布留式古段階の竪穴住居２、庄内式併行期の竪穴住居11、弥生時代後期後半の竪穴住居14から出土した炭化材のうち、調査担当者により選択された各住居２点の合計６点の炭化材について実施する。各炭化材試料について樹種同定を実施し、遺存状態の良いものについては最外年輪部分より年代測定用試料を採取した。

分析方法

１）放射性炭素年代測定

炭化材資料は、ピンセット、超音波洗浄機を用いて、表面付着物を物理的に除去したあと、塩酸と水酸化ナトリウムで洗浄し、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(AAA処理)。

試料をパイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてパイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるパイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１㎜の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。なお、暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位の値で表す。暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

２）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

結果

年代測定試料の樹種同定結果および放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表15、暦年較正結果を図68に示す。

各住居の炭化材試料は、全て広葉樹からなり、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・サカキ・キハダ・シャシャンボの４分類群に同定された。なお、竪穴住居２炭サンプル３は、遺存状態が悪い

表15　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

遺構名	時代	試料名	試料状態・樹種	測定年代 (yrBP)	δ13C (‰)	補正年代 (yrBP)	暦年較正年代 (cal) 誤差	calAD/BC	calBP	相対比	Code No.
竪穴住居2	布留式古段階	炭サンプル1	炭化材：シャシャンボ	1740±30	-28.01±0.39	1690±30 (1692±30)	σ	cal AD 264 - 275	cal BP 1686 - 1675	0.11	IAAA-83361
								cal AD 333 - 401	cal BP 1617 - 1549	0.89	
							2σ	cal AD 257 - 302	cal BP 1693 - 1648	0.22	
								cal AD 316 - 417	cal BP 1634 - 1533	0.78	
		炭サンプル3	炭化材：広葉樹	1730±30	-24.91±0.61	1730±30 (1726±33)	σ	cal AD 256 - 304	cal BP 1694 - 1646	0.53	IAAA-83362
								cal AD 314 - 349	cal BP 1636 - 1601	0.37	
								cal AD 368 - 379	cal BP 1582 - 1571	0.10	
							2σ	cal AD 240 - 397	cal BP 1710 - 1553	1.00	
竪穴住居11	庄内式併行期	炭サンプル2	炭化材：サカキ	1900±30	-28.23±0.56	1840±30 (1842±32)	σ	cal AD 131 - 216	cal BP 1819 - 1734	1.00	IAAA-83363
							2σ	cal AD 85 - 250	cal BP 1865 - 1700	1.00	
		炭サンプル3	炭化材：コナラ属コナラ亜属クヌギ節	1930±30	-30.04±0.50	1840±30 (1841±33)	σ	cal AD 131 - 217	cal BP 1819 - 1733	1.00	IAAA-83364
							2σ	cal AD 84 - 242	cal BP 1866 - 1708	1.00	
竪穴住居14	弥生時代後期	炭サンプル4	炭化材：コナラ属コナラ亜属クヌギ節	1910±30	-24.90±0.55	1910±30 (1909±32)	σ	cal AD 65 - 127	cal BP 1885 - 1823	1.00	IAAA-83365
							2σ	cal AD 21 - 176	cal BP 1929 - 1774	0.97	
								cal AD 192 - 211	cal BP 1758 - 1739	0.03	
		炭サンプル6	炭化材：キハダ	1880±30	-25.64±0.58	1870±30 (1867±33)	σ	cal AD 85 - 143	cal BP 1865 - 1807	0.62	IAAA-83362
								cal AD 147 - 171	cal BP 1803 - 1779	0.22	
								cal AD 193 - 210	cal BP 1757 - 1740	0.16	
							2σ	cal AD 73 - 231	cal BP 1877 - 1719	1.00	

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年較正はRADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
5)暦年較正計算には丸める前の補正年代値（括弧内の値）を使用している。
6)暦年較正結果は暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
7)暦年較正年代値の統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
8)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

ために道管配列が観察できず、種類の同定には至らなかった。同定された各分類群の解剖学的特徴等を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Cerris)　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

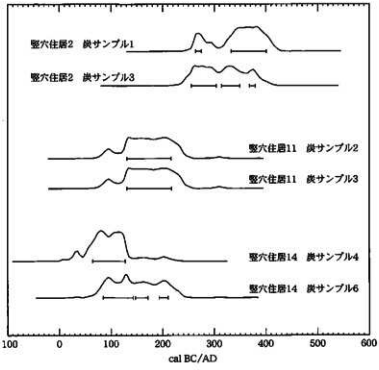


図68　層年較正結果

・サカキ (Cleyera japonica Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)　ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・キハダ (Phellodendron amurense Ruprecht)　ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3～5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

・シャシャンボ (Vaccinium bracteatum Thunb.)　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものと5～7細胞幅、30～60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

考察

各竪穴住居から出土した炭化材の補正年代値および層年較正値（相対比1位の2σの層年較正値）は、布留式古段階の竪穴住居2が1690±30yBP (cal AD 316-417年) と1730±30yBP (cal AD 240-397年)、庄内式併行期の竪穴住居11が1840±30yBP (cal AD 85-250年) と1840±30yBP (cal AD 84-242年)、弥生時代後期の竪穴住居14が1910±30yBP (cal AD 21-176年) と1870±30yBP (cal AD 73-231年) を示した。このように各住居の2点の試料間の年代値は誤差範囲内で一致しているが、各住居間では年代値に多少の差異が生じており、竪穴住居14、竪穴住居11、竪穴住居2の順に新しい年代値を示している。この住居間での年代値の差異については、

測定試料が炭化材であるため、残存部位の違いによる年代差に起因する可能性があるものの、出土土器から推定される年代観とは同調的である。

近畿地方の庄内様式期の実年代については、森岡（2001）によると、一応の見通しとしてAD200～270年頃と推定している。一方、西本編（2006）の弥生時代から古墳時代にかけての土器付着物などの放射性炭素年代測定結果の集成をみると、京都市北部に位置する岩倉忠在地遺跡において庄内式併行期の炭化材が1935±25yBP（calAD20-125年）～1830±20yBP（calAD130-235年）の年代値が得られている。今回の中臣遺跡の各時期の住居の炭化材の年代値は、これらの調査成果と比較して、同調的な傾向を示しているといえるが、今後の年代測定結果および考古学的調査成果との複合的検討結果の蓄積をまって、慎重に評価していくことが大切と考える。なお、同定された炭化材の樹種のうち、シャシャンボはマツ林などに普通な常緑の低木、サカキは常緑の中高木、クヌギ節とキハダは落葉の高木である。これらの樹種が、当時の遺跡周辺に生育しており、利用されていたことが推定される。

（2）竪穴住居出土粘土塊および土器の胎土分析

試料

試料は、中臣遺跡85次調査区内で検出された竪穴住居14より出土した粘土塊１点と、同遺構から出土した土器片３点の合計４点である。粘土塊は、住居北西側の入口の可能性があるとされる位置より出土している。また、土器片３点は、土器76・土器79・土器72（図64）である。発掘調査所見により、土器の帰属時期はいずれも弥生時代後期後半とされている。

また、本分析では、中臣遺跡とほぼ同時期とされている西京極遺跡[17]において、中臣遺跡と同様に竪穴住居床面から粘土塊が複数検出されていることから、同じ住居から出土した土器も含めて、これらを比較対照試料として同様に分析する。試料は、西京極遺跡2008年度の発掘調査区の１区で検出された竪穴住居SB246の床面より採取された２点の粘土塊と２点の土器片である。粘土塊は、住居内の東部で採取された東部粘土ブロックの粘土No.１と南部の土器直下から採取された南部粘土ブロックの粘土No.３の２点である。土器片は、「SB246床直　23-3抽　07HK-QU001　実73　報告番号47」および「SB246床直　23-3抽　07HK-QU001　実42　報告番号50」の２点である。なお、以下の文中では土器片のうち、前者を「報告番号47」、後者を「報告番号50」とそれぞれ略称する。また、両遺跡から出土した粘土塊の断面写真を図75に示す。中臣遺跡の粘土塊は泥質細粒～極細粒砂からなり、不規則に配置する、亜角状を呈した異なる大きさのブロック土からなる。一方、西京極遺跡の粘土塊はいずれも泥からなり、粘塑性変形している。西京極遺跡の粘土塊は住居内に持ち込まれた際、水分を多く含んでいたことが示唆される。

分析方法

当社では、これまでに兵庫県や大阪府など近畿地方各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたもので

ある。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、本分析においても松田ほか(1999)の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、

表16　中臣遺跡出土試料の薄片観察結果

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																						合計
		鉱物片										岩石片												
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	電気石	チャート	凝灰岩	砂岩	凝灰岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	変質岩	珪化岩	海綿骨針					
竪穴14 粘土塊	礫	細礫									1													1
	砂	極粗粒砂								1	1													2
		粗粒砂	3	1						2				4	1									11
		中粒砂	20	3	2					1	1			2					1					30
		細粒砂	41	4	5			1						2						1				54
		極細粒砂	45	7	10	1		1	1	1	1													67
		粗粒シルト	20	2	10			1																33
		中粒シルト	2																					2
	基質																							636
	孔隙																							25
竪穴14 土器76	礫	細礫		1							1													2
	砂	極粗粒砂									3			2										5
		粗粒砂								2	1						1							4
		中粒砂	1											1										2
		細粒砂																						0
		極細粒砂	2																					2
		粗粒シルト	3	1	2																			6
		中粒シルト	5																					5
	基質																							172
	孔隙																							7
竪穴14 土器79	礫	細礫																						0
	砂	極粗粒砂									2													2
		粗粒砂								1	1			1										3
		中粒砂	4	1																				5
		細粒砂	3		1																			4
		極細粒砂	10	1	2																			13
		粗粒シルト	13	1	3																			17
		中粒シルト	3		1																			4
	基質																							225
	孔隙																							12
竪穴14 土器72	礫	細礫									1													1
	砂	極粗粒砂	2		1					3	1			2		1		1						11
		粗粒砂	13	1						2	2	1		4		1								24
		中粒砂	15	2	1		1			9	4	1	1	2										36
		細粒砂	25	2	2	1				9	1			2										42
		極細粒砂	22	1	15					3														41
		粗粒シルト	22		13																			35
		中粒シルト	7		3																			10
	基質																							752
	孔隙																							13

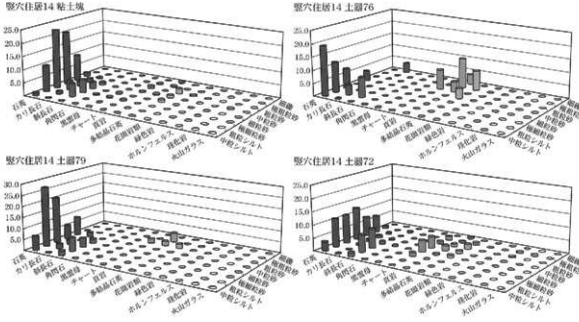


図69　中臣遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

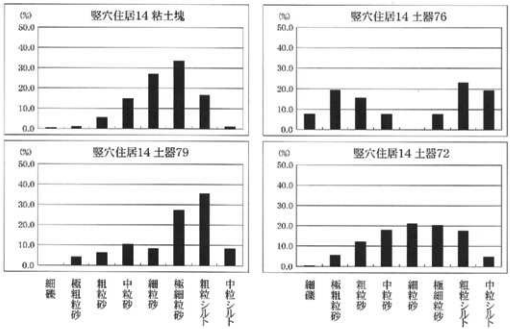


図70　中臣遺跡出土試料胎土中の砂の粒径組成

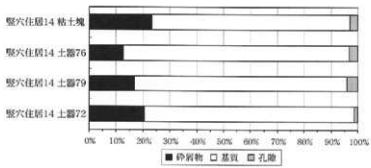


図71　中臣遺跡出土試料の砕屑物・基質・孔隙の割合

砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

結果

1）中臣遺跡出土試料

観察結果を表16、図69～71に示す。粘土塊も含めて４点の試料は、近似した鉱物・岩石組成を示す。鉱物片では石英が多く、少量の斜長石を伴い、微量のカリ長石を含んでいる。なお、粘土塊には、極めて微量ではあるが、白雲母・黒雲母および電気石の各鉱物片が認められ、土器72には極めて微量の角閃石および酸化角閃石が含まれる。岩石片では、粘土塊も含めて４点の試料において、いずれもチャートおよび頁岩の堆積岩類と多結晶石英を主とする組成が認められる。なお、粘土塊には極めて微量の花崗岩類および珪化岩が含まれ、土器76には変質岩、土器72には凝灰岩、ホルンフェルス、珪化岩の各岩石が極めて微量含まれる。また、偏光顕微鏡下で観察された各試料の基質の特徴として、粘土塊はセリサイトおよび緑泥石からなり、土器76は雲母鉱物質、土器79はセリサイトを含むシルト質、土器72は明瞭ではないがカオリン鉱物質の可能性があるということが指摘できる。

胎土中の砂の粒径組成（図70）では、粘土塊は極細粒砂にモードがあり、土器79は粗粒シルトにモードがある。土器72は、モードとなる粒径はやや不明瞭であり、細粒砂から極細粒砂にかけてモードを示す。土器76は、極粗粒砂と粗粒シルトの２つのピークを示すが、計数された砂粒全体の数が少ないため、粒径組成は誇張されたものとなっている。

砕屑物・基質・孔隙の割合（図71）における砕屑物の量比は、粘土塊と土器72で多く、20～25%を示し、土器79はこれらよりやや少ない15～20%の範囲内、土器76はさらに少ない10～15%の範囲内である。

2）西京極遺跡出土試料

観察結果を表17、図72～74に示す。２点の粘土塊と２点の土器片の４点の試料間において、互いに近似した鉱物・岩石組成を示す。鉱物片では石英が多く、少量の斜長石を伴い、微量のカリ長石を含んでいる。また、粘土No.１には極めて微量の角閃石と酸化角閃石が含まれ、報告番号50には極めて微量の角閃石が含まれる。岩石片では、チャートを主体とし頁岩と砂岩を伴う堆積岩類と多結晶石英を主とする組成が認められる。なお、粘土No.1と報告番号47には微量～極めて微量の花崗岩類、粘土No.３と報告番号47には微量～極めて微量の緑色岩、２点の粘土塊と報告番号50には微量～極めて微量の珪化岩が、それぞれ含まれている。珪化岩は、珪化砂岩や珪化頁岩など堆積岩由来のものが認められる。さらに、偏光顕微鏡下で観察された各試料の基質の特徴は、２点の粘土塊と報告番号47はセリサイト質、報告番号50は雲母鉱物質であった。

胎土中の砂の粒径組成（図73）では、粘土塊はいずれも粗粒シルトにモードがあり、粗粒砂に割合としては低いが第二のピークが認められる。実73-47も粗粒シルトにモードがあり、粗粒砂に第二のピークが認められる。報告番号50は、細粒砂をモードとする単独峰形のヒストグラムを呈する。

砕屑物・基質・孔隙の割合（図74）における砕屑物の量比では、２点の粘土塊はいずれも10

表17　西京極遺跡出土試料の薄片観察結果

試料名	砂粒区分		砂粒の種類構成															合計
			鉱物片					岩石片								その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	チャート	頁岩	砂岩	多結晶石英	花崗岩類	緑色岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
SB246 粘土No. 1	砂	細礫																0
		極粗粒砂						4	4		1							9
		粗粒砂	1	1				6	7	5	1				1			22
		中粒砂	5	2				1	1		3	1						13
		細粒砂	12		3	1	1	1			1							19
		極細粒砂	31	5	10			1										47
		粗粒シルト	45	4	25													74
		中粒シルト	9		7													16
	基質																	1508
	孔隙																	41
SB246 粘土No. 3	砂	細礫											1					1
		極粗粒砂						3	3	1			1		3			11
		粗粒砂	2	1				5	5		5		1		4			23
		中粒砂	2	1				8	3	1	5							20
		細粒砂	11	2	4			4	2		2							25
		極細粒砂	27	4	10			1			1							43
		粗粒シルト	45	2	16			1										64
		中粒シルト	9	1	3													13
	基質																	1396
	孔隙																	40
SB246 床直 報告番号 47	砂	細礫																0
		極粗粒砂						4	4									8
		粗粒砂						11	4	4	6		1					26
		中粒砂	4	2				4	2		5	2						19
		細粒砂	13					5			1							19
		極細粒砂	29		3			2										34
		粗粒シルト	34		10												1	45
		中粒シルト	6															6
	基質																	829
	孔隙																	27
SB246 床直 報告番号 50	砂	細礫						2										2
		極粗粒砂						1										1
		粗粒砂	7					5	1		5				2			20
		中粒砂	12		1			10			5			1				29
		細粒砂	17	1	2			7	1		5					1		34
		極細粒砂	21		3	1		3										28
		粗粒シルト	12		6													18
		中粒シルト	2		1													3
	基質																	494
	孔隙																	14

数%程度であり、報告番号47はそれより若干多い15%程度である。報告番号50は、他の３点よりも多く、20数%を示す。

表18には、中臣遺跡出土試料と西京極遺跡出土試料の各特徴を一覧にして示す。

考察

1）胎土の地質学的背景と地域性

粘土塊および土器胎土より確認された鉱物片・岩石片の組成は、粘土塊および土器の材料となった粘土や砂の採取地における地質学的背景を反映している。中臣遺跡出土粘土塊と土器および西京極遺跡出土粘土塊と土器のいずれも、その岩石片の組成の特徴は、チャートと頁岩を主とする堆積岩類が多く含まれていた。このことから、いずれの試料も、その材料の採取地は、堆積岩類の広く分布する地質学的背景を有することが推定できる。

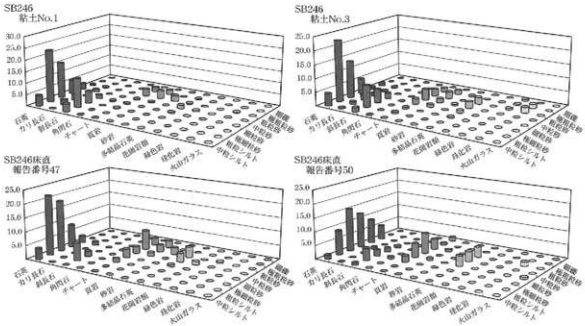


図72　西京極遺跡出土試料の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

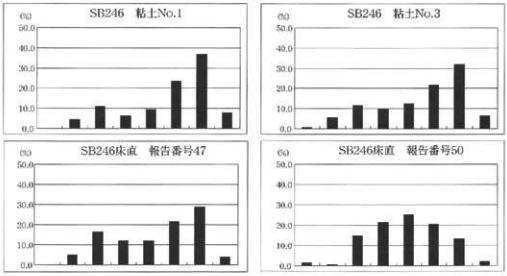


図73　西京極遺跡出土試料胎土中の砂の粒径組成

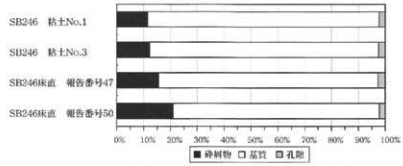


図74　西京極遺跡出土試料の砕屑物・基質・孔隙の割合

表18　中臣遺跡および西京極遺跡出土粘土塊と土器の特徴

遺跡名	種類	胎土の地質学的背景	主な鉱物・岩石	微量伴う鉱物・岩石	モード粒径	砕屑物の割合（%）
中臣遺跡	粘土塊	丹波帯・比叡花崗岩	石英・斜長石・チャート・頁岩・多結晶石英	角閃石・白雲母・黒雲母・花崗岩類	極細粒砂	20～25
	土器			ホルンフェルス	粗粒シルト・細粒砂	10～20
西京極遺跡	粘土塊			角閃石・花崗岩類・緑色岩	粗粒シルト	10～15
	土器				粗粒シルト・細粒砂	15～20

中臣遺跡の位置する山科盆地は、比叡山地の南部と醍醐山地の北部に囲まれた地形であり、西京極遺跡の位置する京都盆地北西部の背後には丹波高地が広がっている。各盆地内に堆積する砕屑物は、それらの山地を構成する地質に由来する。河田ほか(1986)および日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などの地質資料によれば、山科盆地を囲む山地および丹波高地は、中生代ジュラ紀に形成された砂岩・頁岩・チャートおよび緑色岩からなる丹波帯と呼ばれる地質により構成されている。この丹波帯中には凝灰岩も含まれている。また、比叡山地の大文字山から如意ヶ岳を結ぶ尾根よりも北側には比叡花崗岩と呼ばれる中生代白亜紀に貫入した深成岩体が分布し、深成岩体の周縁すなわち尾根よりも南側には接触変成岩(ホルンフェルス)が分布している(木村ほか,1998)。

このような地質学的背景と各盆地に流れ込む水系から、山科盆地や京都盆地に供給される砕屑物は、堆積岩類を主としながらも、緑色岩や凝灰岩および花崗岩類さらにはホルンフェルスも混在する状況が推定される。そして、この砕屑物における岩石組成は、今回の試料である粘土塊や土器片の胎土における岩石組成と良く一致する。したがって、粘土塊も土器の胎土もそれぞれの出土地周辺の堆積物に由来する可能性が高い。ただし、現時点では、京都盆地北西部と山科盆地の区別が難しいように、より詳細な採取地の絞り込みはできない。より詳細な胎土の地域性を求めるためには、各所の堆積物を実際に分析し、その鉱物組成や岩石組成を確認していく必要がある。

2）粘土塊と土器との関係について

中臣遺跡出土試料における砂の粒径組成や砕屑物の割合では、粘土塊と土器試料との間でも、また土器試料３点の間でもその違いは比較的明瞭である。このことから、出土した粘土塊のみで土器の素地土（成形段階直前の調整された土のこと）を構成している可能性は低いと考えられる。

一方、西京極遺跡出土試料では、２点の粘土塊は互いに粒径組成も砕屑物の割合もほぼ一致し、さらには報告番号47の土器も、砕屑物の割合は若干高いが、粒径組成は近似する。このことから、SB246から出土した粘土塊は、土器の素地土であった可能性が高いと考えられる。

以上、中臣遺跡と西京極遺跡の粘土塊と土器胎土の関係は異なっており、粘土塊の層相（構造）や住居内での設置場所なども異なっていた。中臣遺跡の粘土塊は土器の素地土の一部として使用された可能性は否定できないものの、別用途で住居内に持ち込まれた可能性もある。

今回の事例のように住居から出土した粘土塊の例は、京都盆地北部の岩倉盆地内に位置する岩倉忠在地遺跡でも確認されている(同志社大学歴史資料館,2006)。この粘土塊についても、今回と同様の薄片観察法により分析し、同一調査区内の溝から出土した土器の分析結果との比較を行った(矢作,2006)。結果は、今回と同様に、粘土塊も土器胎土も同様の地質学的背景を有するが、粒径組成や砕屑物の割合までは一致しないことから、素地土となった可能性は低いが、素地土の一部となった可能性はあるとした。

なお、中臣遺跡の土器試料の3点間や西京極遺跡の土器2点間で認められた粒径組成や砕屑物の割合の違いおよび偏光顕微鏡下で認められた基質の違いは、同一住居出土土器の中でも、材質の異なる土器が複数種存在することを示唆している。この複数種の材質の混在が、京都盆地および周辺域の弥生時代後期末の土器におけるどのような事情を反映しているかは現時点では不明である。今後も京都盆地における同時期の土器胎土分析例を蓄積することができれば、例えば器種別の材質の違いや集落別の材質の違いなど、より具体的な推定が可能になることが期待される。

註

1) 西森正晃・柏田有香『平安京右京五条四坊六町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-20 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2008年

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

河田清雄・宮村 学・吉田史郎,1986,20万分の1地質図幅 京都及大阪.地質調査所.

木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野 実・高橋裕平,1998,京都東北部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)地質調査所,89p.

森岡秀人,2001,弥生時代遺跡の年代.季刊考古学第77号,雄山閣,22-26.

日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6 近畿地方.共立出版,297p.

西本豊弘 編,2006,新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年代.雄山閣,143p.

同志社大学歴史資料館,2006,岩倉忠在地遺跡 同志社小学校建設に伴う発掘調査.126p.

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

矢作健二,2006,岩倉忠在地遺跡出土土器の胎土分析.岩倉忠在地遺跡 同志社小学校建設に伴う発掘調査.86-106,同志社大学歴史資料館.

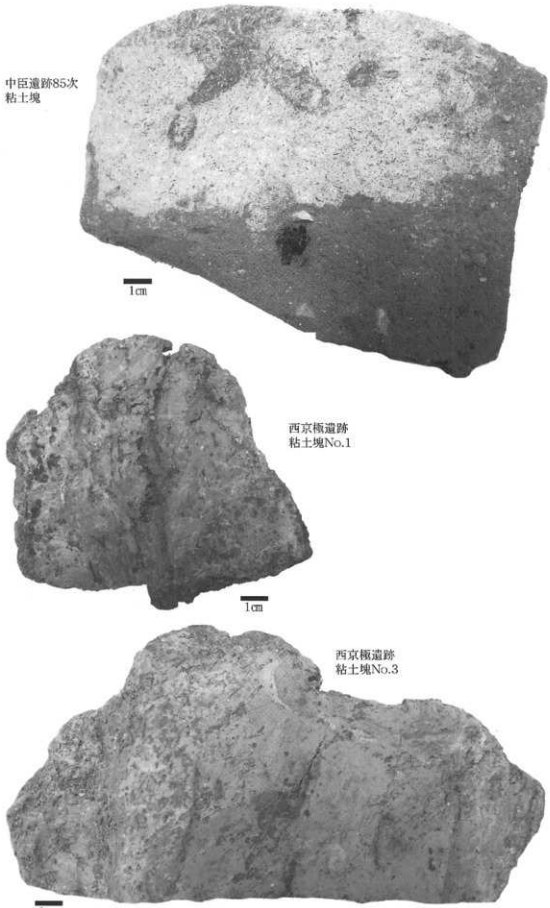
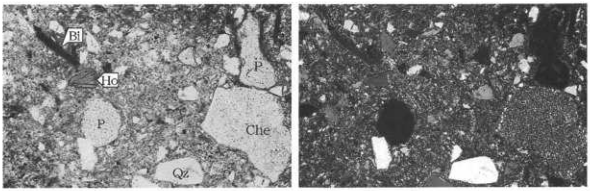
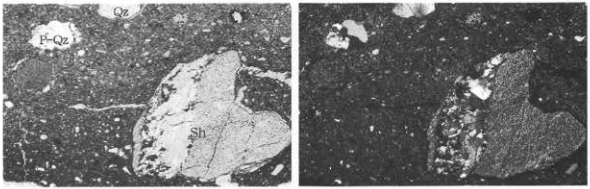


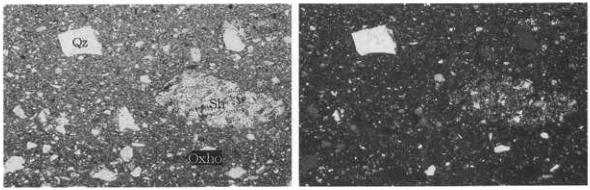
図75　粘土塊の断面写真



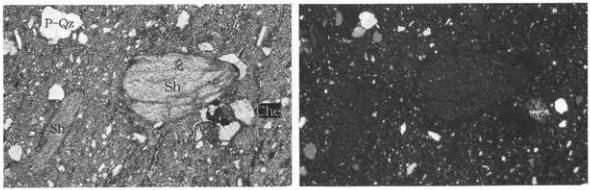
1.中臣遺跡　竪穴住居14 粘土塊



2.中臣遺跡　竪穴住居14 土器76 (高杯)



3.中臣遺跡　竪穴住居14 土器79 (高杯)

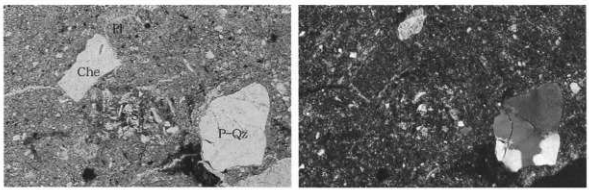


4.中臣遺跡　竪穴住居14 土器72 (壺)

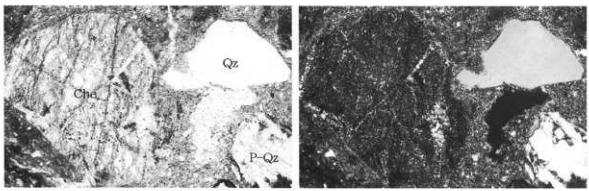
0.5mm

Qz:石英．Ho:角閃石．Oxho:酸化角閃石．Bi:黒雲母．Che:チャート．Sh:頁岩．
P-Qz:多結晶石英．P:孔隙．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

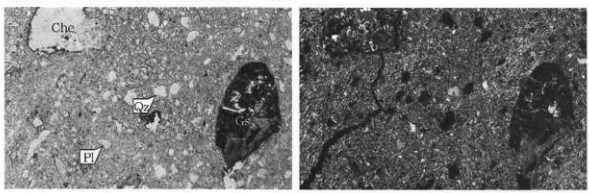
図76　胎土薄片 1



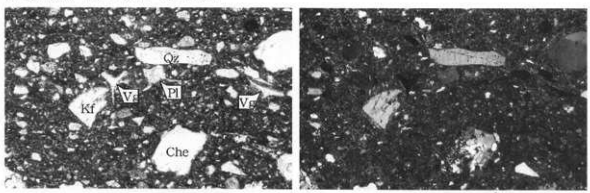
1.西京極遺跡　SB246　粘土No.1(東部粘土ブロック)



2.西京極遺跡　SB246　粘土No.3(南部粘土ブロック)



3.西京極遺跡　SB246床直　報告番号47



4.西京極遺跡　SB246床直　報告番号50

0.5㎜

Qz:石英．Kf:カリ長石．Pl:斜長石．Che:チャート．Ss:砂岩．P-Qz:多結晶石英．
Gs:緑色岩．Vg:火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図77　胎土薄片2

V 革嶋館跡

1．調査経過

今回の調査は、集合住宅建築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都市西京区川島玉頭町40-15に位置する。当地は山城国葛野郡革嶋荘を本拠とする領主革嶋氏の館跡の一画にあたる。革嶋荘は平安時代末期は近衛家の荘園で、当初は荘園経営にかかわる事務管理を行う政所屋敷があり、中世には館となり、後に堀と土塁で防御する平城へと発展したと考えられている。革嶋氏が鎌倉時代から代々残してきた『革嶋家文書』（京都府立総合資料館所蔵）の江戸時代中期の絵図には、革嶋春日神社を含む南の位置に、土塁と堀に囲まれた館跡が描かれている。今回の調査地は、その館の南西の一角である。当調査地では2008年の京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の試掘調査によって中世の南北方向の堀が確認されている。東側の堀については、2009年９月の発掘調査で南北方向と西に屈曲する堀を検出し、南東の一角を明らかにしている。今回の調査は、絵図と発掘・試掘調査の成果を踏まえ、南西の堀と土塁の状況を確認し、館跡の実態を明らかにすることを目的に実施した。調査は2009年10月５日から開始し、同月30日に終了した。

調査の結果、南北方向の幅約５mの堀と、この堀から西で幅2.6mの南北方向の水路や石組遺構、

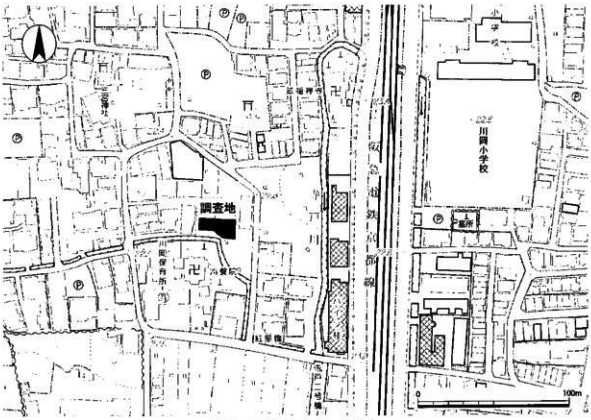


図78　調査位置図（１：2,500）

図79　調査前全景

図80　調査風景

礎石、柱穴、井戸、土坑などを検出した。調査期間中においては、文化財保護課から10月６日、13日、15日、19日、23日の５回、現場指導を受けた。10月27日には地元を対象とした見学会（参加者約70名）を開催し、調査成果の公表、資料の活用に努めた。

なお、文化財保護課の指導により遺構は現状保存のため、埋め戻しの際は全面を砂で覆い保護した後に埋め戻しを行った。

図81　調査区配置図（１：1,000）

2．位置と環境

調査地は京都の南西の郊外である京都市西京区川島玉頭町に位置し、西京区の南東部にあたる。調査地を含む一帯は桂川右岸のやや高燥な平坦地で、標高は23m前後で、北西から南東方向にわずかに傾斜する。

弥生時代から古墳時代　調査地の南東約500mには弥生時代から古墳時代の遺物散布地である下津林遺跡がある。1979年の京都府立桂高校内での調査（図82-1）では弥生時代の竪穴住居や溝などが発見されている[2]。1990年の陸上自衛隊関西地区補給処桂支処内での詳細分布調査（図82-2）では弥生時代中期の土坑を検出している[3]。その南東約2kmには弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡である上久世遺跡がある。これまでに6回の発掘調査が実施されており、方形周溝墓、竪穴住居や流路跡など多数を検出している。近年では1993年の発掘調査[3]で、弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居、土坑などを検出し、さらに集落の居住区域を明らかにしている。また、南に隣接して、縄文時代晩期から室町時代までの遺跡が重複している中久世遺跡がみられる。いずれも桂川右岸の氾濫平野を流れる小河川の自然堤防上の微高地に営まれた集落で、桂川や小河川に沿って南から北へ開発が進んだと考えられる。

古墳は4世紀中葉と推定される樫原地区の一本松塚古墳、百々池古墳、御陵地区には5世紀中頃の天皇の杜古墳などの大規模なものが点在しており、下津林遺跡、上久世遺跡などの桂川右岸域の集落との関連が推測される。5世紀中頃と推定される天皇の杜古墳は市内最大規模の前方後円墳として現存する。1989年に発掘調査[4]が行われ、翌年の1990年から1993年にかけて史跡公園として保存整備事業[5]が実施されている。6世紀末から7世紀にあたる古墳時代後期の南荒木古墳や塚ノ本古墳、権現原古墳などが西側の段丘上に、また平坦地の川島地区には三重古墳がみられたが、いずれも全壊している。集落跡については古墳時代中期から後期とみられる樫原遺跡が、広域の立会調査[6]で確認されており、後期古墳との関連で注目されている。

飛鳥・白鳳時代から奈良時代　白鳳時代の創建になる樫原廃寺が長岡丘陵の北東端の台地上に位置している。1967年の1次調査[7]で八角形の瓦積基壇をもつ塔跡を中心に中門、回廊、築地などを発見し、1971年に国の史跡指定がなされ、現在は史跡公園として整備されている。その後、立会調査や試掘調査が行われ、1997年には3・4次調査[8]が実施され、当寺が平安時代中期に廃絶したことが判明している。1987年の広域立会調査[9]では史跡公園の南方丘陵斜面で樫原廃寺に供給していた瓦窯跡を発見している。延暦3年（784）乙訓城に長岡京が遷都され、調査地周辺は京の北近郊地となる。

平安時代　延暦13年（794）、都は長岡京から葛野郡北域の平安京に遷され、調査地周辺は葛野郡の南西部および乙訓郡の北部となり、京の南西の近郊地となった。平安時代中期には上・下桂庄や革嶋庄などの荘園をはじめ、貴族による大土地所有が進行した。荘園体制は桂川用水建設による水利灌漑にも支えられて、紆余曲折を経ながらも室町時代後期まで存続する。樫原遺跡では1987年の広域立会調査[10]で、北に落ち込む谷状の遺構の肩口から9世紀前半の遺物が多量に出土し、

図82　周辺遺跡地図（1：10,000）

さらに弥生時代から江戸時代の遺物包含層も広範囲にわたり確認し、また建物や井戸なども検出している。平安時代後期には革嶋荘には南荘（近衛家領）と北荘（山科家領）が今井用水を境に東西に立地していたと想定されている。西側が南荘で、革嶋館の前身とされる政所屋敷がここに推定されている。その他樫原遺跡の北西の丘陵東斜面には1951年に多量の瓦経片が発見された平安時代後期とみられる盆山経塚が位置する。

中世　鎌倉時代になり六波羅探題の管轄の下、武家支配が始まる。葛野・乙訓両郡に郡奉行が置かれ、革嶋氏ら国人・土豪の自立化の動きもあり荘園体制は動揺する。当地の国人は「西岡御家人」とよばれて幕府の軍事的基盤となったが、多くは15世紀に相次いで守護となった畠山・細川両氏の被官となった。戦国時代には細川氏の被官となり、細川氏の有力家臣団を構成した。一方、交通上の要地のため、応仁の乱をはじめとする戦国の争乱で戦場となり、有力社寺の多くは廃絶し荒廃した。

革嶋氏は清和源氏の流れを汲む佐竹氏の傍流で、14世紀から革嶋荘の南庄に位置する革嶋館に在住した土豪である。『革嶋家文書』では15世紀後半に土地の売券が集中し、革嶋氏が南荘で急速に土地を集積していたとされる。

近世　豊臣秀吉による天正十七年（1589）の検地をはじめ、荘園の整理と領主の組み替えが行われ、竹林にも検地が施行され、近世的知行制が成立している。革嶋館は元禄十五年（1702）の絵図（『革嶋家文書』）に詳細に描かれており、この時期まで存続していたことが確認できる。

註

1）「下津林遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-1』　京都府教育委員会　1980年
2）「下津林遺跡（90MK8）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』　京都市文化観光局　1992年
3）『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年
4）「史跡　天皇の杜古墳」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
5）『史跡　天皇の杜古墳保存整備事業報告書』　京都市文化観光局　1994年
6）『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年
7）『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会　1998年
　杉山信三・佐藤興治「樫原廃寺跡の発掘調査」『仏教芸術』　毎日新聞社　1968年
8）『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1999年
9）　註６に同じ
10）　註６に同じ

3．遺　構

古墳時代初頭から江戸時代までの遺構を総数57基検出した。遺構には柱穴、石組遺構、土坑、溝、水路、堀、掘立柱建物などがある。

調査区の基本層位は、まず地表下0.9～1.0mまでが現代盛土で、直下には第1層にぶい黄褐色シルト（中世）が堆積し、その下層はにぶい褐色砂泥の地山となる。堀3の西層部は第1層の上面で検出したが、南半部は第1層が削平されており、地山上面が遺構面となる。なお、検出遺構の掘り下げについては、文化財保護課の指導により現状保存を前提に、深くなる堀や水路については断割部分を除き、検出のみに留めた。以下、主要な遺構について概述する。

（1）古墳時代初頭

建物57（図83）　調査区北半部で検出した東西棟で総柱の掘立柱建物である。東西2間×南北3間で、南北4.4m、東西3.6mの規模である。平面形は台形を呈する。柱間は1.8m、1.5m、1.0mと不揃いである。建物の主軸方向は西傾する。

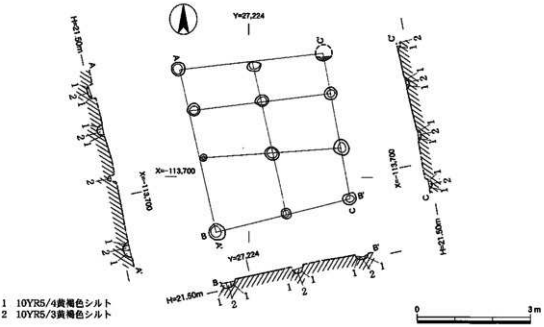
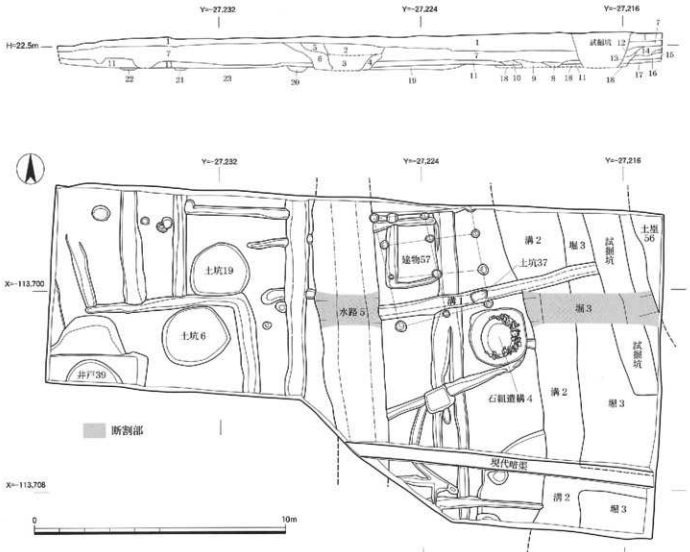


図83　建物57実測図（1：100）

表19　遺構概要表

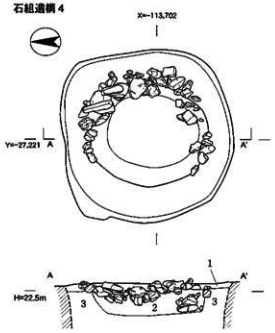
時　代	遺　構	備　考
古墳時代	掘立柱建物57	
室町時代	柱穴、土坑、石組遺構4、堀3、井戸39	
江戸時代	溝2、水路5、耕作溝	



1 現代層
2 10YR4/4 褐色砂泥（水路5）
3 10YR4/4 褐色砂礫（水路5）
4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（水路5）
5 10YR3/3 暗褐色砂泥（水路5）
6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（水路5）
7 盛土層
8 10YR4/4 褐色シルト よく締まる（溝2）
9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト よく締まる（溝2）
10 10YR5/6 黄褐色シルト（溝2）
11 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（中世）
12 10YR4/6 褐色シルト（堀底土）
13 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（堀埋土）
14 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト（土壙56）
15 10YR4/6 にぶい黄褐色シルト 礫混（土壙56）
16 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（土壙56）
17 10YR4/4 褐色シルト（土壙56）
18 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（堀3）
19 10YR3/3 にぶい黄褐色シルト（溝）
20 溝17
21 溝38
22 溝26
23 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥（地山）

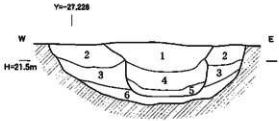
図84 遺構実測図（1：150）

石組遺構4



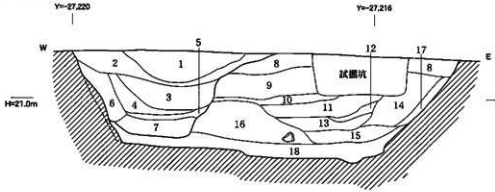
1 10YR4/6褐色砂泥
2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥

水路5



1 10YR4/2にぶい黄褐色砂泥
径0.5～5cm礫・炭焼土含む
2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
3 10YR7/3にぶい黄橙色砂泥
4 10YR5/2灰黄褐色シルト
5 10YR5/2灰黄色シルト
6 10YR6/1～6/2褐灰色シルト

堀3断割り北壁



1 10YR7/3～6/3にぶい黄橙色砂泥　炭焼土含む（溝2）
2 10YR8/3～7/3浅黄橙色砂泥（溝2）
3 10YR5/6黄褐色砂泥＋2.5Y6/2灰黄色粘土（近世）
4 2.5Y5/3黄褐色粘質砂泥（近世）
5 2.5Y6/3～5/3黄褐色粘質砂泥（近世）
6 2.5Y6/3～7/3にぶい黄色砂泥（近世）
7 2.5Y6/2灰黄色粘土（近世）
8 10YR6/3～6/4にぶい黄橙色砂泥　径0.5～1cm礫含む
9 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
10 10YR5/8黄褐色粘土　2.5Y6/2灰黄色粘土混
11 2.5Y5/3黄褐色粘土　10YR5/4にぶい黄褐色粘土
12 10YR5/3～2.5Y5/3にぶい黄褐色砂泥
13 10YR6/2灰黄色粘質砂泥　径0.5～1cm礫混
14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　10YR6/2灰黄褐色砂泥混
16 7と類似、径16cm石含む
17 6と対応する
18 2.5Y5/1黄灰色泥土

図85　堀3・石組遺構4・水路5実測図（1：50）

土坑37　調査区北半部の東西方向の耕作溝下面で検出した。平面形状は楕円形で、幅0.65m、長さ0.35m、深さ0.07mである。建物57内の南東隅に位置する。土坑内から庄内式並行期の甕片などが出土している。

（2）室町時代から江戸時代

堀3（図85、図版30）　調査区の東半部で検出した南北方向の堀である。南北12.5mにわたり検出し、さらに調査区外の北・南に延びていた。規模は幅4.7～5.0m、深さ1.4mである。断面形状は逆台形である。堀の下層には水が溜まっていたことを示す泥土層の堆積が厚い。

土塁56　堀3に東接した南北方向の土塁基底部で、調査区北東隅の北・東壁に残存していた。北壁では堀3の東肩から斜め方向に立ち上がり、上方約0.8mまで残存し、炭を含むシルト層の互層で積まれていた。

水路5（図85、図版30）　調査区のほぼ中央部で検出した南北方向の水路である。南北約10mにわたり検出した。さらに調査区外の北と南に延びる。規模は幅2.7m、深さ1.0mである。断面形状は逆台形である。堀3から約6m西に位置する。

井戸39　調査区の南西端の南壁際で検出した。平面の形状は円形とみられ、さらに調査区外の南に延びていた。規模は径2.3m、深さ1.0m以上である。

石組遺構4（図85、図版30）　調査区東半部の堀3西肩に近接して検出した。平面の形状は楕円形である。掘形を含む全体の規模は幅2.2m、長さ2.3mである。石で組まれた円形の掘り込みの規模は径1.5m、深0.4mである。性格は不明である。

土坑6　調査区の西半部で検出した。平面形状は円形で、径2.5m、深さ0.15mである。

土坑19　調査区の西半部で検出した。土坑6の北に位置する。南端は耕作溝に削平されていた。平面形状は円形で、径2.3m、深さ0.15mである。

溝2　堀3上面で検出した。西肩は堀3と重複している。幅1.5～2.0m、深さ1.1mで、南北12.5mにわたり検出した。調査区外の北と南へさらに延びる。北壁から10m南では東に分岐し、調査区外の東にも延びる。

4．遺　物

出土遺物は整理箱で４箱である。堀３と水路５、耕作溝などから出土している。遺物は弥生時代から江戸時代までのものがある。時期別にみると室町時代と江戸時代の遺物が多くを占めるが、古墳時代の遺物も出土している。遺物は土器類が主体で、その他には瓦類、金属製品、土製品、石製品などがあるが、いずれも小破片が多く、図示できるものは極めて少ない。

なお、土師器皿の時期は平安京・京都Ⅰ期～Ⅻ期編年案に準拠する（小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』 京都編集工房　2005年）。

（1）土器類（図86・88）

古墳時代の土器類には土師器、須恵器がある。土師器には壷、甕、高坏などがある。須恵器は杯身・蓋、甕、壷などがあるが、いずれも小破片である。

平安時代の土器類は須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。須恵器は杯、杯蓋、壷などがある。緑釉陶器には皿・椀、灰釉陶器は皿・椀がある。

室町時代の土器類は土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、施釉陶器、瓦質土器などがある。土師器は皿、羽釜などがある。皿には小皿（１）と中皿（２）がある。１は口径6.2㎝、器高1.4㎝、２は口径8.0㎝、器高2.0㎝である。１・２とも内外面はナデ調整を施す。いずれも堀３から出土した。京都Ⅹ期古～新に属する。焼締陶器は信楽産や丹波産、備前産の甕・鉢などがある。輸入陶磁器は青磁椀・皿、白磁椀・皿などがある。施釉陶器は瀬戸美濃産の椀・皿などがある。瓦質土器には鉢がある。

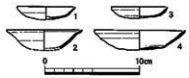


図86　土器実測図（１：４）

表20　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	石製品		石製品２点		
古墳時代	土師器、須恵器、土錘				
平安時代	須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器				
室町時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器		土師器２点		
江戸時代	土師器、染付、陶磁器、施釉陶器、瓦、土製品		土師器２点		
合　計		５箱	６点（１箱）	４箱	

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

江戸時代の土器類は、土師器、施釉陶磁器がある。土師器は小皿（3）と内面に明瞭な圏線が施された中皿（4）である。3は口径6.0cm、器高1.2cm。4は口径口径9.8cm、器高2.1cm。1・2ともにナデ調整を施すが、底部内外面はオサエで未調整である。いずれも堀3の上面から出土しており京都XI期新に属する。磁器には肥前産の白磁椀や染付の椀・皿などがある。施釉陶器には京焼系椀・皿、唐津産椀、瀬戸美濃産椀・皿、産地不明のものもある。

（2）その他の遺物（図87・88）

瓦類、金属製品、石製品がある。

瓦類には丸瓦、平瓦、道具瓦などがある。いずれも江戸時代のものである。金属製品には銅銭があるが、摩耗が著しく銭名は判読できなかった。土製品には土人形がある。

石製品は弥生時代とみられる磨石（5）、石包丁から転用したとみられる装飾品（6）や石器剥片などが、堀3から出土している。5は残存長11.2cm、幅7.0cm、厚さ5.0cmである。細粒砂岩を使用している。6は残存長8.3cm、幅4.1cm、厚さ0.45cmである。先端近くに径0.03cmの小孔を穿つ。全面を丁寧に研磨した圭質頁岩製である。

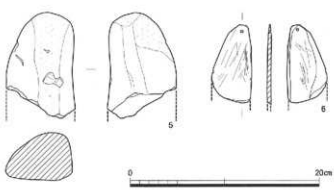


図87　石製品実測図（1：4）

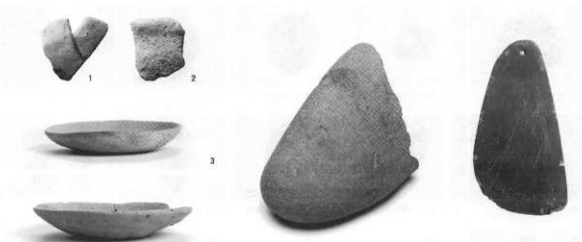


図88　出土遺物

（3）自然遺物（図89、表21）

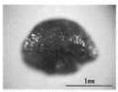
堀３・水路５からそれぞれ３層ずつ土サンプルを採取した。土サンプルは１㎜・２㎜の篩と0.25㎜メッシュのシルクスクリーンで選別し、実体顕微鏡で同定した。

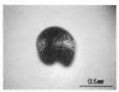
木本は堀３の第３層からヒサカキを検出しただけであった。

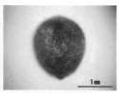
草本は堀３の第１層から水湿性のコナギ、水路５の第３層から水湿性のカヤツリグサ科を検出した。

表21　堀３・水路５出土自然遺物一覧表

木本			サンプリング量(ml)	約250	約120	約160	約210	
番号	和名	部位	科名	堀3-1	堀3-2	堀3-3	水路5-3	生育場所
1	ヒサカキ	種子	ツバキ			3		庭木・山地
草本								
番号	和名	部位	科名	堀3-1	堀3-2	堀3-3	水路5-3	生育場所
2	ザクロソウ	種子	ザクロソウ			2		道端・畑
3	エノキグサ	種子	トウダイグサ	1				道端・畑
4	アリノトウグサ	核	アリノトウグサ	2				山野
5	コナギ	種子	ミズアオイ	4				水田・沼
6	イネ科？	果実	イネ		1	1		道端・野原
7	オヒシバ	種子	イネ	1				道端・原野
8	カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ				1	湿地・山野
9	不明			4				
その他								
番号	和名	部位	科名	堀3-1	堀3-2	堀3-3	水路5-3	生育場所
10	昆虫	頭部・上翅・腹部・脚		11		5	6	

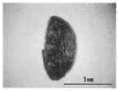

1 ヒサカキ種子


2 ザクロソウ種子


3 エノキグサ種子

4 アリノトウグサ核

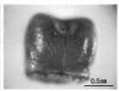
5 コナギ種子


6 イネ科？果実

7 オヒシバ種子

8 カヤツリグサ科果実

9 不明


10 昆虫1

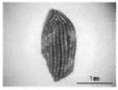

10 昆虫2

図89　堀３・水路５出土自然遺物

5．まとめ

今回の調査では、革嶋館の西を区画する南北方向の堀と土塁の基底部、古墳時代の遺構が良好に残存することが判明した。以下にその成果について要約しておく。

古墳時代　遺構には調査区北東で検出した古墳時代初頭の掘立柱建物と土坑があげられる。前回の東側の調査で同時期の竪穴住居や区画溝などを検出していることから、当調査地まで遺構の範囲が広がることが判明した。また、古墳時代初頭の土器類については、小破片ではあるが、庄内式併行期、布留式並行期の甕や壺、高杯が出土している。当遺跡の南東に立地する下津林遺跡や上久世遺跡・中久世遺跡などとの関連が考えられることから、前回の東側の調査結果と併せて、集落の動向を考える上で重要な資料となった。また、弥生時代の石器の出土は、調査地近辺に遺構の存在を示唆しており、さらに当地域の開発が弥生時代まで遡ることとして注目される。

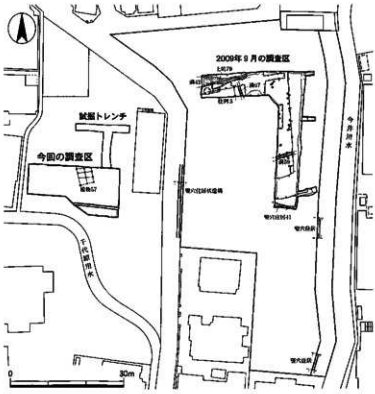


図90　古墳時代遺構概略図（1：1,000）

室町時代から江戸時代　調査区東端で検出した堀3は、江戸時代（元禄年間）の「譲渡革嶋家屋敷図」[1]・「革嶋家屋敷絵図」[2]（『革嶋家文書』）に示された革嶋館の西を区画する堀と考えられる。試掘調査で検出した北側の南北堀とは同一のもので、併せて南北25mにわたり残存していることが判明した。前回の東側での調査で検出してい

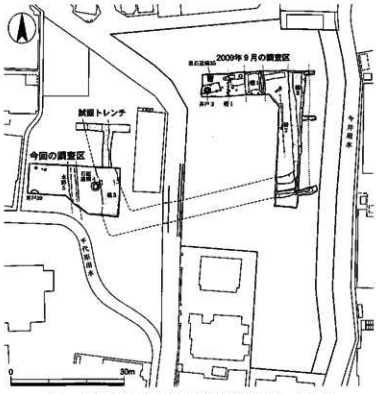


図91　室町時代から江戸時代遺構概略図（1：1,000）

る館東側の堀との内幅が東西約47m、外幅は約56mの規模であることが判明し、革嶋館の南半の範囲復元に繋がる成果であった。また、絵図に描かれた土塁についても、堀３東に基底部が残存していたことも明らかになり、館復元をさらに補強する結果となった。館南角の東への屈曲する堀屑部については検出できなかったが、調査区外の南近くに予想される。また堀西約５mに位置する南北方向の水路５は、絵図に描かれた「外構之堀」と考えられる。明治31年作製の当地の地籍図（「葛野郡川岡村大字川嶋小字玉頭図」）には、この水路は坪境溝と明示されており、近代まで区画溝として踏襲されている。堀西側の室町時代の土坑、石組遺構、柱穴などは、館外郭の建物配置や防御施設の状況などを考えるうえで重要な遺構である。

出土遺物は、堀や土坑から出土した室町時代後期から江戸時代の土師器皿や焼締陶器、輸入陶磁器などは、平安京内で出土する様相と類似しており、京近郊の荘園関係の一端を反映している。

堀３と水路５内の土壌分析については、ともに水湿性の草本や木本を検出しており、水堀であったことを裏付けている。

革嶋館復元については、従来から現在に残る地割りから三宮神社を中核とする説[3]、革嶋春日神社を中核とする説[4]などがあったが、「革嶋家文書」の絵図を基に復元した案[5]と今回の調査結果および東側の調査結果とも、ほぼ一致することが明らかになった。また、古墳時代の遺構については、周辺の開発が急増している最近の状況から、今後、桂川右岸域での新たな集落遺跡として当地周辺での遺跡範囲の確認が急務を要する。

註

1）「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』43号（32cm×49.5cm）
元禄十五年（1702）に革嶋家内での屋敷・藪を譲渡する際の絵図である。土居・堀に囲まれた方形区画には、「古之城跡トテ太閤秀吉公御検地之時分ヨリ堀土居屋敷之分除地也」とあり、この屋敷が戦国期においては城郭として利用されていたことがわかる。また、太閤検地では除地として登録された。なお、この絵図で、中央の南北に走る太い線は、西岡の多くの田地を潤した今井用水である。また、屋敷区画の南西の「悪水抜溝」とある水路は、千代原村用水の末流である。

2）「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』42号(58.5cm×89.3cm)
作成年代は不明であるが、43号文書と同時期に作成されたと考えられる。図面種類は建物指図である。場所は川嶋村の氏神である三宮社の南東に位置している。堀と「土居藪」に囲まれた方形居館は、北半分に建物が集中している。開口部は東西にあり、西側の開口部は正門で、本屋敷の玄関が配置されており、そこから道が村落とつながっている。建物は本屋敷、離れ屋敷、二階蔵、米蔵、隠居之物置蔵からなっている。本屋敷内部には台所、土間、湯殿、新部屋など配置されており、元禄十五年（1702）頃の惣領革嶋家の住居の様子が窺われるとともに、戦国期の規模についても類推できる。

3）『京都市遺跡地図台帳　第８版』　京都市文化市民局　2007年

4）山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭－復原図と関連資料」『京都大学人文科学研究所調査報告書』第35号　京都大学人文科学研究所　1986年

5）福島克彦「中世方形館研究の問題点」『城館史科学』４　城館史科学会　2006年

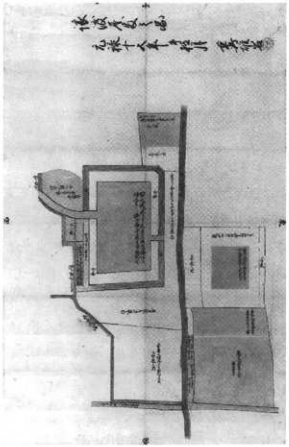


図92 「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』
京都府立総合資料館所蔵

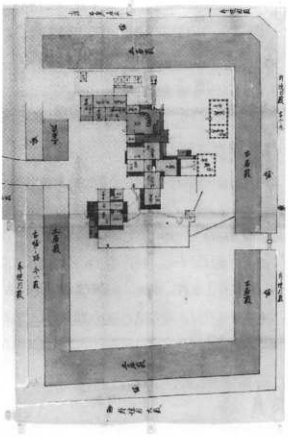


図93 「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』
京都府立総合資料館所蔵

Ⅵ　寺戸大塚古墳

1．調査経過

（1）調査に至る経緯

寺戸大塚古墳は古墳時代前期の前方後円墳である。ほぼ古墳の主軸に沿う形で市境が古墳を東西にわけており、東側が向日市寺戸町芝山、西側が京都市西京区大枝南福西町２丁目となっている。前方部は大正時代には筍栽培のための竹藪とされて、墳丘が切土や盛土などによって、大きく改変を受けている。後円部は比較的残存状況が良いものの、西側の京都市側は土取りによって墳丘が削り込まれ、崩壊の危険性が生じている。

本調査は寺戸大塚古墳の墳丘確認調査である。京都市文化市民局文化財保護課の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昨年度に引き続き、調査を担当した。昨年度の調査では、墳丘

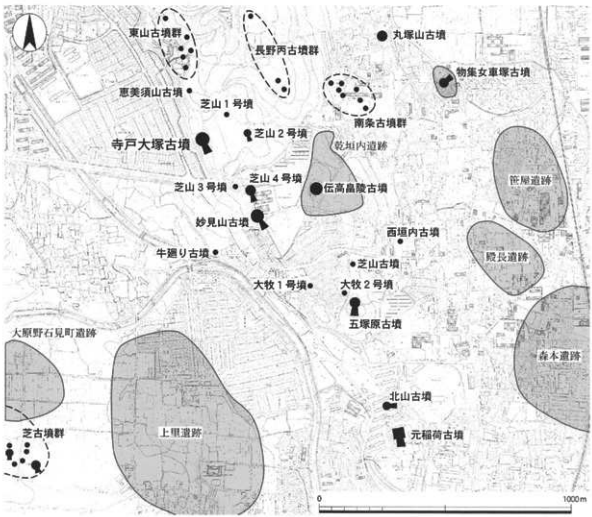


図94　古墳の位置と周辺遺跡分布図（１：15,000）

全体の現状の記録を作成し、後円部の既存の土取りなどで崖状をなしている箇所の断面の精査を行い、後円部墳丘の残存状況を確認した。

本年度は前方部の墳丘の残存状況を確認するための発掘調査とともに、後円部の崩壊の危険性が高い箇所について崩壊防止の保護処置や、前方部に散乱する伐採された竹材の処理などを並行して行うこととなった。

（2）調査の経過

京都市側である前方部の墳丘西半部では、これまでに発掘調査が行われたことがなく、墳丘の残存状況については全く情報が得られていなかった。このため、既往の調査によって想定されてきた西斜面の西端部分および前方部南西隅部分を確認するため、図上で想定位置にあたる部分に2箇所の調査区を設定した。既に調査されている前方部の竪穴式石槨に直交する西斜面部にⅠ区、前方部南西隅にあたる箇所にⅡ区を設定した。

図95　Ⅰ区調査前全景（北東から）

準備作業として、現地でGPS測量により国土座標に則ったそれぞれ調査区の四隅の位置を決め、作業スペースや土置き場の確保のため、調査区範囲とその周辺の竹の伐採、続いて重機によって竹根起こしを行った。

図96　Ⅱ区調査前全景（南東から）

また、昨年度調査時には墳丘部分の地形測量を行っており、本年度は西側の丘陵崖面と古墳墳丘との関係の把握のため、新たに丘陵西側斜面部分の地形測量を行った。

調査は2月9日に開始し、Ⅰ区・Ⅱ区両調査区ともに重機掘削によって、深さ0.2m程度までの表土および客土の除去を行った。以下の作業は人力掘削により掘り進めたが、調査を進めるに従い、当地が筍栽培のための竹藪として利用されていた当時の客土（入れ土）が約1mの厚さで盛られていることが判明した。両調査区とも客土下面に良好に墳丘が遺存しており、葺石も比較的良好に検出された。記録は転落した葺石の検出状況（第1面）と、これらを除去した

図97　Ⅰ区調査作業風景（北東から）

図98　後円部墳丘保護（西から）

図99　後円部墳丘保護（西から）

図100　竹材処理（南から）

原位置を保っていると判断した葺石検出状況（第２面）について、写真撮影を行うとともに、平面図・立面図はオルソ測量、断面図は手計りによって行った。また、墳丘および葺石の構築状況を検討するため、壁際の部分的な断ち割りを行っている。

Ｉ区については、西側に丘陵崖面が存在しており、その崖面と墳丘との関係を解明するため、西側に約６ｍ調査区を延長するように指導を受け、３月５日、人力により表土・客土の掘削を行い、拡張区の調査に入った。

調査は３月17日までにすべての作業を終了し、埋め戻しを行った。埋め戻しにあたっては、墳丘および葺石の保護のため、全面を真砂土によって0.1mの厚さで覆い、その上面に真砂土を入れた土嚢を敷き詰めた後、調査中の排土を入れた。

調査と並行して行った墳丘の応急保護処置は以下の２項目である。すべて３月27日には作業が完了し、撤収した。

１　後円部の保護処置　後円部での作業は昨年度に一時的な保護処置を施したものの、下草が繁茂して、崩壊箇所の保護が十分でないため、改めて応急的な保護処置を行うこととなった。まず、下草の伐採作業から開始した。崩壊の著しい箇所については、余分な土を除去した後、竹垣によって下部の崩壊を防ぎ、上部には土嚢を積み上げて（図98）、植生シート（草木の種が仕込まれた養シート）によって被覆した（図99）。

２　前方部の竹材処理　前方部には伐採された竹材が散乱するとともに、立ち枯れた竹も多く存在する。立ち枯れた竹は、暴風などで倒れたりし、墳丘を傷つけるばかりか、飛ばされると危険であるため切り倒し、既に伐採された竹材とともに処分することにした。竹材の処分には木材の粉砕機を利用して、竹をチップ状に細かく粉砕して墳丘上に撒くこととした（図100）。墳丘の保護とともに、下草の繁茂防止にも有効と考えられる。

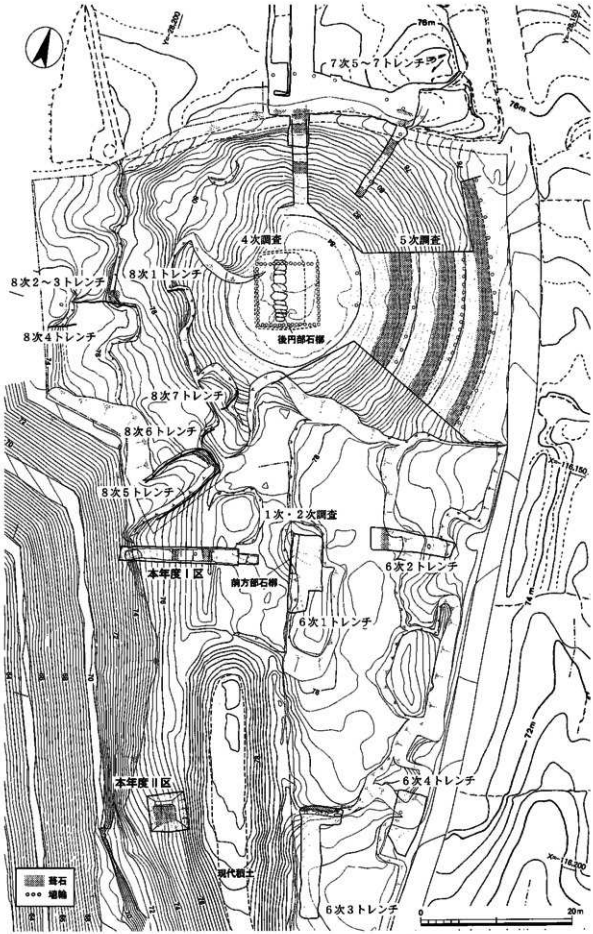


図101　古墳墳丘図と調査地点図（1：500）

2．古墳の概要と既往調査

寺戸大塚古墳は、古墳時代前期に属する前方後円墳である。京都盆地西辺、桂川右岸のいわゆる乙訓地域に属しており、北から南東方向へ突き出す向日丘陵上に立地する。向日丘陵尾根線上には南から元稲荷古墳、北山古墳、五塚原古墳、妙見山古墳、本墳と、古墳時代前期の当地域の首長墓と考えられる大型の前方後方墳・前方後円墳が分布している（図94）。

寺戸大塚古墳に対する既往の調査は表22に示した通りであり、本調査は９次調査にあたる。

墳丘の現状は、後円部の墳丘は比較的残存状況が良いものの、西半部は土取りなどにより墳丘が削り取られている。前方部墳丘については遅くとも大正時代には筍栽培のための竹林とされて掘削（切土）や盛土（客土）が繰り返されるとともに、以前計画された西半南よりの散策路建設に伴う大規模な盛土が南北方向帯状に存在するため、原形の把握が難しい状態となっている。

これまでの調査によって後円部は東側墳丘（５次調査）、北側墳丘裾部（７次調査）が確認され、西側墳丘も既往攪乱坑の壁面調査によって墳丘の形状が確認された（８次調査）。一方、前方部は先述のように残存状況が良くないが、墳丘東半で部分的に葺石が確認され、南端にあたる墳丘裾の葺石と埴輪列が検出された（６次調査）。これらの成果から、墳丘の規模は全長98m、後円部径57m、前方部幅38m、前方部２段・後円部３段築成の前方後円墳と知られている。

墳丘斜面および斜面には葺石が施され、墳丘頂部および斜面平坦面には普通円筒埴輪・朝顔形埴輪からなる埴輪列が囲繞する。主体部は後円部中央と前方部で、それぞれ竪穴式石槨が１基確認されている。石槨は両者とも古墳の主軸に合わせて南北を主軸方向とし、割石小口積みによって壁体を構築、大型の板石を並べて天井石とする。後円部の石槨は南北6.45m、幅は北橋で0.85

表22　既往調査一覧表

次数	調査期間	調査機関	主な調査	文献
1	1923年1月28日	京都府（京都帝国大学考古学教室）	前方部石槨発見の報に対応して、竪穴式石槨の北端の一部を調査。	1
2	1942年６月初	京都府（京都帝国大学考古学教室）	前方部竪穴式石槨の再調査。	2
3	1966年	京都府教育委員会	墳丘測量調査。	3
4	1967年７月15日～９月15日	京都大学文学部考古学研究室	後円部墳頂部および主体部（竪穴式石槨）の調査。	4
5	1968年７月14日～９月28日	京都大学文学部考古学研究室	後円部東側墳丘の調査。	4
6	1998年６月29日～10月31日	財団法人向日市埋蔵文化財センター	前方部竪穴式石槨再々調査、前方部墳丘の調査、墳丘測量調査。１～４トレンチ。	6
7	1999年７月１日～10月５日	財団法人向日市埋蔵文化財センター	後円部北側墳丘の調査。５～７トレンチ。	7
8	2008年１月22日～３月20日	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	後円部西側墳丘の調査。１～７トレンチ。	9

※ 文献の番号は、文末に示した参考文献の番号に対応する

m、南横で0.76m、高さ1.6mであり、底部に検出された粘土床の痕跡より割竹形木棺が用いられていたことがわかっている（4次調査）。一方、前方部の石棺は南北5.3m、幅0.8～0.9m、高さ1.3mとやや小振り、底部の粘土床の痕跡より後円部石棺と同様に割竹形木棺と考えられる（1・2・6次調査）。副葬品にはそれぞれ銅鏡・玉類・碧玉製品・鉄器などがあり、やや前方部の出土品に後出の型式のものが含まれるようである。

3．調査の概要

（1）調査区の設定

本調査では、これまでに調査が全く行われてこなかったため詳細が不明であった前方部西半の墳丘の残存状況を確認するとともに、墳丘の規模・形状を把握することを目的に2箇所の調査区Ⅰ区・Ⅱ区を設定した。昨年の後円部西半調査（8次調査）において、第2段葺石基底石（2トレンチ）、同くびれ部葺石基底石（5トレンチ）を検出し、墳丘西側の墳丘規模・形状の解明に期待が持たれた。これを受けて、Ⅰ区は前方部石棺に直交する現墳頂から西斜面に幅2m、長さ12.5mの調査区を設けた。墳丘測量図を見ても明らかなように、西斜面については前方部石棺から西へ約20mに大規模な造成による崖面が存在しており、本墳と崖面との関係を明らかにするため、Ⅰ区は同じ幅で西へ約6m拡張した。Ⅱ区は前方部の規模を確定させることを目的として、南西隅にあたると図上で推定される箇所へ5m四方の調査区を設定した。

また、昨年度墳丘部分については現況の地形測量を行い、墳丘測量図を作成した。本年度は西側の造成による崖面と墳丘の関係を解明することも調査の課題であったため、西側崖面部分の地形測量を実施して、昨年度の成果に追加した。

（2）層序

層序はⅠ区・Ⅱ区ともに上面から、厚さ0.1～0.2mの現表土、その下には竹藪客土が1m前後の厚さで積まれており、これらを除去すると旧表土が検出される。竹藪客土は筍栽培のために、かつて高かった前方部墳頂部の墳丘が削られて盛られた土であると考えられ、締まりがなく、埴輪片が多く検出される。また、旧表土は当地が竹藪化される前の表土層であり、墳丘を厚さ0.1m前後の厚さで覆う腐植土層である。

表23　遺構概要表

時　代	遺　構
古墳時代前期	前方部墳丘西斜面（斜面・平坦面・基底平面、葺石・埴輪列など）
時期不明	土坑2（Ⅰ区拡張区）

Ⅱ区では、調査区の東側に高く積まれた現代積土が存在している。

（3）遺構

Ⅰ区・Ⅱ区ともに、厚い竹藪客土の下面で古墳時代前期の本墳の前方部西斜面墳丘の斜面・平坦面・基底平面、および葺石・埴輪列（埴輪基底部）などを検出した。自然に崩壊している箇所もあったが、想定以上に良好に遺存していることが判明した。

1）Ⅰ区・拡張区（図102、図版31～33）

前方部墳丘西斜面の基底平面、第１段斜面、第１段平坦面、第２段斜面を検出した。第２段斜面の上部および墳頂部は竹藪の土取りのため、削り取られて失われてしまっている。また、丘陵の西側は後世の宅地造成によって大きく削り取られて、原形をとどめていない。

墳頂部には、本調査区の東端から４ｍ東に、６次調査で再々調査がなされた前方部竪穴式石槨が保存されており、その周辺が僅かに高く盛り上がっているほかは、大きく攪乱されてしまっている。第２段斜面の上部とともに削り込まれて、完全に墳丘が失われており、丘陵の岩盤層が検出された。

第２段斜面は、葺石の残存状況は良くなく、葺石は検出できたものの、上部が墳頂部とともに削られたのに伴って、圧力によって崩壊した状況であった。葺石基底石は北側で長軸0.2～0.25mの４石のみ検出し、南側では検出できなかった。検出した４石もやや前方（西）へ押されてずれているように見える。基底石より上方へ約0.6mの高さまで葺石を検出したが、上部は削られて失われており、検出した葺石も大半が崩れて、原位置を保つものがほとんどなく、裏込めに用いられた径0.1m以下の小礫が露出する状況であった。

第１段平坦面は、葺石基底石の前面約１ｍの幅と考えられ、上面には径0.05m前後の円礫による礫敷が施され、西端には埴輪列を構成する普通円筒埴輪の基底部を１基検出した。平坦面の西端は前方へ崩れ、礫敷は基底石から西へ0.7mの範囲まで検出され、埴輪も西へ傾倒した状況であった。埴輪の樹立と平坦面礫敷との施工順序については、平坦面の西端の崩壊のため、十分に検証できなかった。

第１段斜面は高さ約1.2mあり、下半のおおよそ１/２の葺石は良好に遺存していたが、上半の葺石は完全に崩れて、地山（墳丘岩盤層）が露出する状態であった。葺石の崩れた上半は地山削り出しによって墳丘を造っており、葺石の良好に残る下半は葺石に小礫などによる裏込めを施している。葺石基底石は５石検出した。長軸が0.2～0.35mの礫を横位に用いて、前面に直線的で垂直な面を揃えて据える。その上面に積み上げるように長軸0.2m前後の礫の長軸方向を縦位に用いて葺いている。

基底平坦面は地山を削り出したなだらかな傾斜面であり、第１段斜面の葺石基底石から西へ5.5ｍまで検出した。それ以西は後世の宅地造成によって削られているので、実際の西端がどのようになっていたかは判明しなかった。基底石の前面にほぼ接するように、北壁際で普通円筒埴輪の

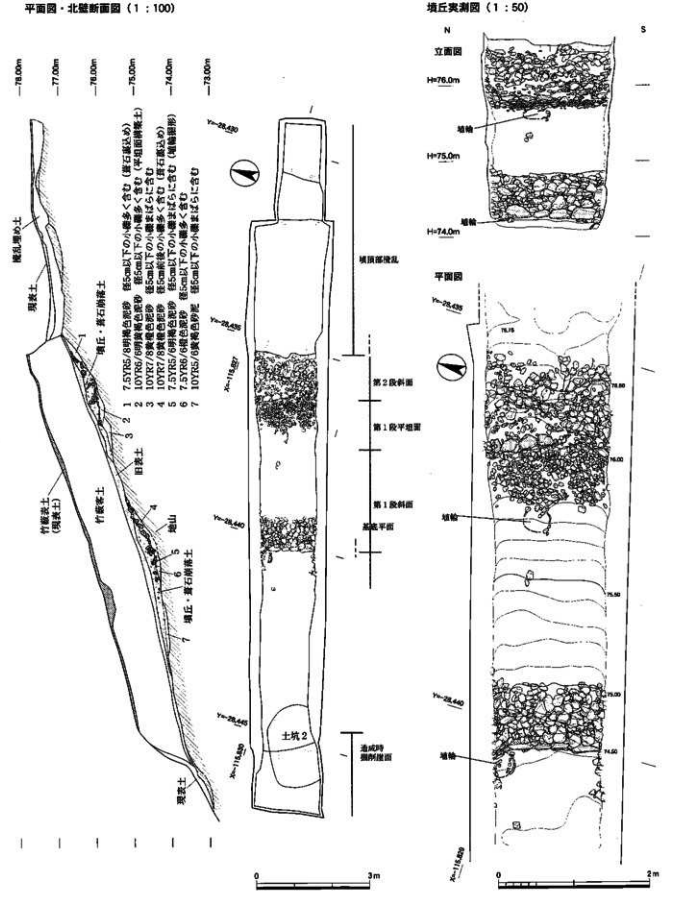
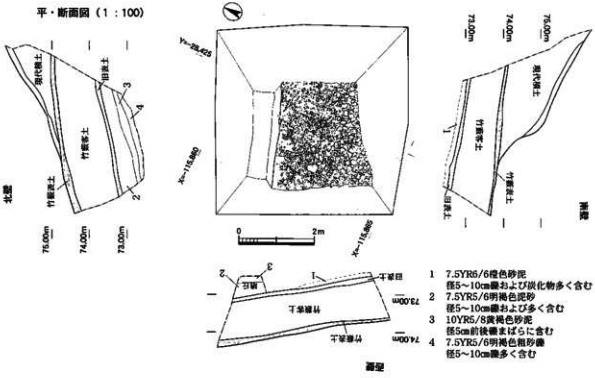


図102　Ⅰ区遺構実測図（1：100、1：50）



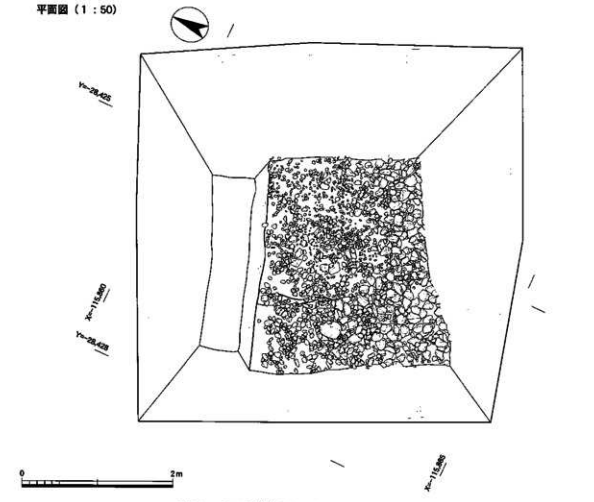


図103　Ⅱ区遺構実測図（1：100、1：50）

基底部を1基検出した。残存状況は良くなかった。また、時期は不明であるが、西端で土坑2を検出した。東西2.2m、南北1.3m以上の楕円径平面、深さ0.7mの掘形に、転落した葺石をまとめて埋めたものと考えられ、摩滅した埴輪片などとともに0.1～0.3mの礫が充満された状態で検出した。

2）Ⅱ区の遺構（図103、図版33）

Ⅱ区では、現代積土や竹藪客土が厚く、遺構面に達するのに苦労したが、前方部南西隅に近い墳丘斜面を検出した。北端では葺石あるいは裏込め石が崩壊によって疎らになっていたと考えられ、墳丘と竹藪客土の境が不明瞭で、結果として墳丘を断ち割る形となった。

墳丘の斜面は北東から南西に向けてなだらかに低くなっており、ほぼ全面に礫を検出した。検出した状況から、北2/3程度は径0.1～0.2m前後の細かい礫、南1/3では長軸0.3m前後の大型の礫が検出された。北2/3のものは葺石が崩壊して下層の裏込めが露出しており、南1/3では葺石を検出したものと考えられる。想定に反して、墳丘の南端部が検出されなかったため、崩落した葺石を除去することは行わず、検出状況での記録にとどめ調査を他日に期することとした。

（4）遺物

遺物はほぼすべてが埴輪片である。原位置を保ったものはⅠ区の基底平面および第1段平坦面で検出した埴輪列を構成する埴輪基底部2基のみであるが、本調査が墳丘の範囲確認調査であることから、取り上げず現地に保存することとした。このため、出土した遺物は、竹藪客土や旧表土層、墳丘や葺石崩落土に混入したもので、摩滅が著しいものが多く遺存状況が良くなかった。

埴輪には、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。朝顔形埴輪には既往調査でも直口壺タイプと二重口縁タイプの口縁形態が知られており、本調査でも両タイプの破片が確認できる。

埴輪以外では、竪穴式石槨の壁材として使われたものと同質の板石破片が2点ある。

表24　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代前期	普通円筒埴輪、朝顔形埴輪	7箱		7箱	0箱
合　計		7箱	0点（0箱）	7箱	0箱

4．まとめ

本調査では、墳丘の範囲および残存状況の確認を主目的として、これまで調査の行われなかった前方部西斜面に２箇所の調査区を設けた。Ⅰ区は1998年に再々調査が行われた前方部竪穴式石槨に直交する西斜面に設け、後に西側の崖面まで調査区を拡張した。Ⅱ区は前方部南西隅を確認するため、これも1998年度に確認された東側の前方部南面の成果より、測量によって位置を決めて調査を行った。

Ⅰ区では、墳頂部および第２段斜面上部は大規模な攪乱により既に破壊されていたが、斜面下半部は比較的良好に遺存していることが判明した。基底平面・第１段斜面・第１段平坦面・第２段斜面を検出した。第１段斜面では裏込めが施された下半部に良好に葺石が残存しており、地山削り出しのままで葺石を施した上半部はすべて崩落していた。第２段斜面では原位置を保っていた葺石はなく、墳頂部が大規模に掘り込まれた時に圧力を受け崩れたものと考えられる。また、第１段平坦面では小円礫による礫敷が施されていることが明らかになり、これまで本墳では平坦面の礫敷は確認されておらず、新しい知見である。

Ⅱ区では良好に墳丘が残存していることが明らかになったが、墳丘の端部を調査区内で検出することはできず、調査当初に目論んだ前方部南西隅の検出には到らなかった。想定よりも南端も西端もそれぞれ外側に延びていると考えられる。調査は検出にとどめ、西斜面における前方部端部の確認は次年度以降の機会に譲ることとした。

本墳の墳形については、これまで前方部南端が開かない、いわゆる「柄鏡形」の前方後円墳と考えられてきた。少なくとも本調査のⅡ区では西斜面側の前方部の南西隅は検出されず、想定したよりも南西へ延びると考えられ、「柄鏡形」説は否定されよう。

昨年度の後円部の調査に続き、本年は前方部の墳丘調査を行った。これまで、京都大学や向日市によって精力的に調査が行われてきた東半部に比べ、調査が行われなかった西半部は情報がなく研究の俎上にあがることがなかった。本調査によって、前方部西半では墳頂部は破壊されているものの、斜面部については比較的良好に遺存していることが明らかとなった。本調査で解明するはずであった、前方部南西隅の解明とともに、本墳の墳形の解明に期待される。

参考文献

1　梅原末治「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊、京都府、1923年３月

2　梅原末治「山城に於ける古式古墳の調査　第一　乙訓郡寺戸大塚古墳」『京都府文化財調査報告』第廿一冊、京都府教育委員会、1955年３月

3　堤圭三郎・高橋美久仁「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1968、京都府教育委員会、1968年３月

4　京都大学文学部考古学研究室・向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』54-6、史学研究会、1971年11月

5　都出比呂志　「古墳時代」『向日市史』上巻、京都府向日市、1983年3月
6　國下多美樹・梅本康広ほか「寺戸大塚古墳　一第６次調査の成果一」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集、（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会、1999年３月
7　國下多美樹・中塚良ほか「寺戸大塚古墳第７次（4PTBSM-7）発掘調査報告～後円部墳丘の調査～」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第50集、（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会、2000年３月
8　『向日丘陵の前期古墳』（開館20周年記念特別展示図録）、向日市文化資料館、2004年11月
9　吉崎　伸「寺戸大塚古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度、京都市文化市民局、2008年３月

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書　名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度
副 書 名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	柏田有香・加納敬二・高橋　潔・布川豊治・平尾政幸
編 集 機 関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所 在 地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL 075-415-0521
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL 075-222-3108
発 行 年 月 日	西暦2010年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安宮内裏跡・聚楽遺跡１	京都市上京区中務町490-74	26100	2 237	35度01分10秒	135度44分41秒	2009/１/27～2/26	87㎡	個人住宅新築
平安宮内裏跡・聚楽遺跡２	京都市上京区下立売通千本東入中務町485-63	26100	2 237	35度01分10秒	135度44分42秒	2009/６/22～7/３	35.5㎡	個人住宅新築
平安宮左兵衛府・侍従所跡	京都市上京区下立売通日暮西入中村町543・546	26100	2	35度01分13秒	135度44分51秒	2009/５/20～6/26	113㎡	集合住宅建設
中臣遺跡（85次調査）	京都市山科区勧修寺東金ヶ崎町96番地	26100	632	34度58分02秒	135度48分27秒	2009/１/26～3/13	136㎡	駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安宮内裏跡・聚楽遺跡１	都城跡 集落跡	古墳時代後期 平安時代中期～鎌倉時代前半	溝 土坑、柱穴、溝状遺構、礫敷路面状遺構など	土師器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類	
平安宮内裏跡・聚楽遺跡２	都城跡 集落跡				
平安宮左兵衛府跡	都城跡	平安時代前期	土坑、溝状土坑、道路面	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品、土製品	１次調査で検出した平安時代前期の溝と道路面の延長部を検出した。
中臣遺跡（85次調査）	集落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代	竪穴住居 竪穴住居、土坑 土坑	弥生土器、石器 土師器、鉄鏃 土師器、須恵器	弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居３棟を検出した。

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	柏田有香・加納敬二・高橋　潔・布川豊治・平尾政幸
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
革嶋館跡	京都市西京区川島玉頭町40-15	26100	997	34度 58分 29秒	135度 42分 07秒	2009/10/5～ 10/30	250㎡	集合住宅建設
寺戸大塚古墳	京都市西京区大枝南福西町２丁目	26100	1005	34度 57分 20秒	135度 41分 19秒	2009/２/３～ ３/27	60㎡	墳丘確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
革嶋館跡	平城跡	室町時代	柱穴、土坑、石組遺構、堀、井戸	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器	革嶋館の西を区画すると考えられる堀を検出した。
寺戸大塚古墳	古墳	古墳時代前期	前方部墳丘西斜面（斜面・平坦面・基底平面、葺石・埴輪列など）	普通円筒埴輪、朝顔形埴輪	

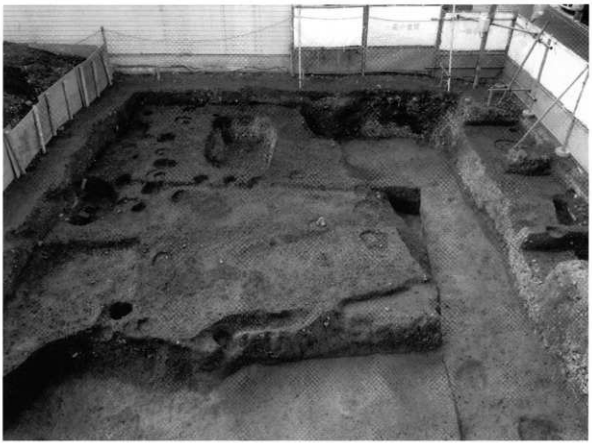
図　版

1　整地層1下層面北拡張区（南東から）

2　第2面礫敷き路面状遺構（南東から）

3　第2面全景（東から）

図版2　平安宮内裏跡・聚楽遺跡1　遺構

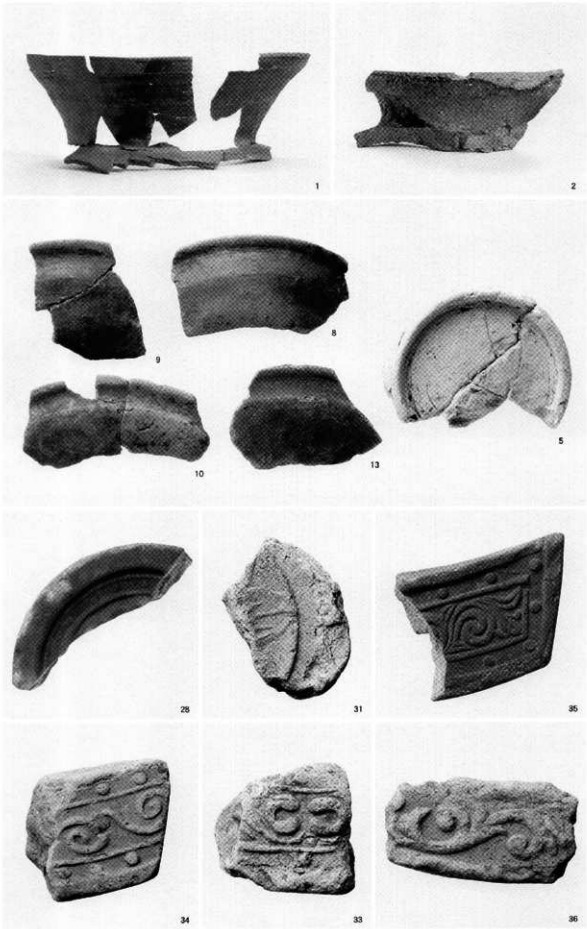


1　第3面全景（東から）

2　Pit16断面（東から）

3　SD25断面（北東から）

図版3　平安宮内裏跡・聚楽遺跡1　遺物



出土遺物

図版4　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺構

1　調査区全景　江戸時代の遺構（北から）

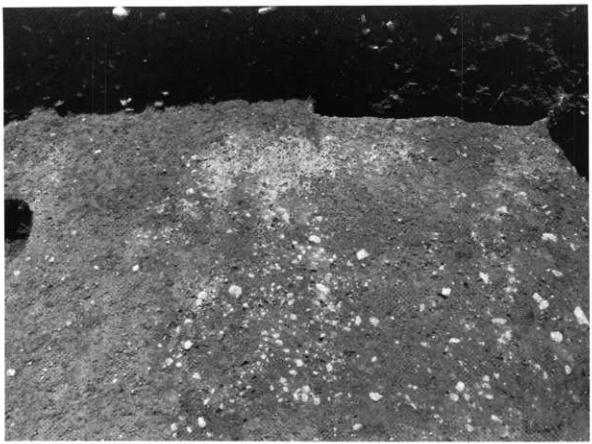
2　南部拡張区の状況　溝SD59・路面SF60（北から）

1　中央部土取り跡（北から）

2　北部土取り跡（東から）

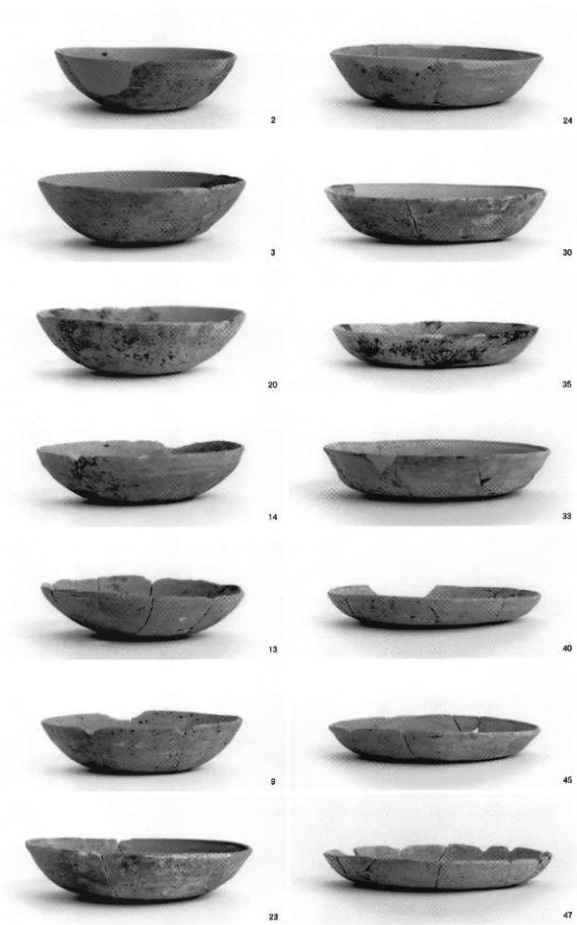
3　土坑SK46断面（南西から）

図版6　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺構

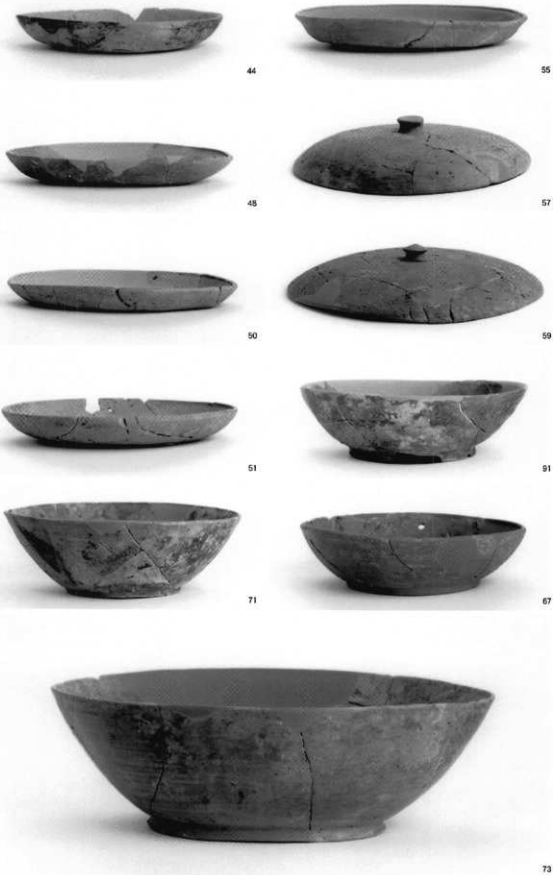


1　路面SF60検出状況（北から）

2　溝SD59断面（南から）



SD59出土土器 1



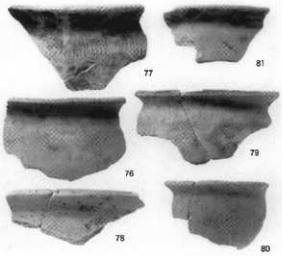
SD59出土土器2

83

87

93

88


77
81
76
79
78
80

SD59出土土器3

SD59出土土器4

128

145

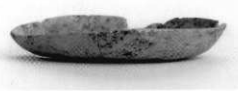
130

146

133

150

139


155

140

162

174

163

175

172

SK46出土土器 1

170

168

186

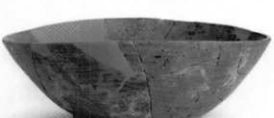
179

193

184

180

187


181

197

SK46出土土器2

204

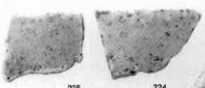
206

205

209

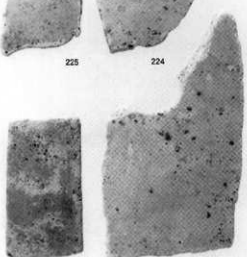
207

215


225

224

201

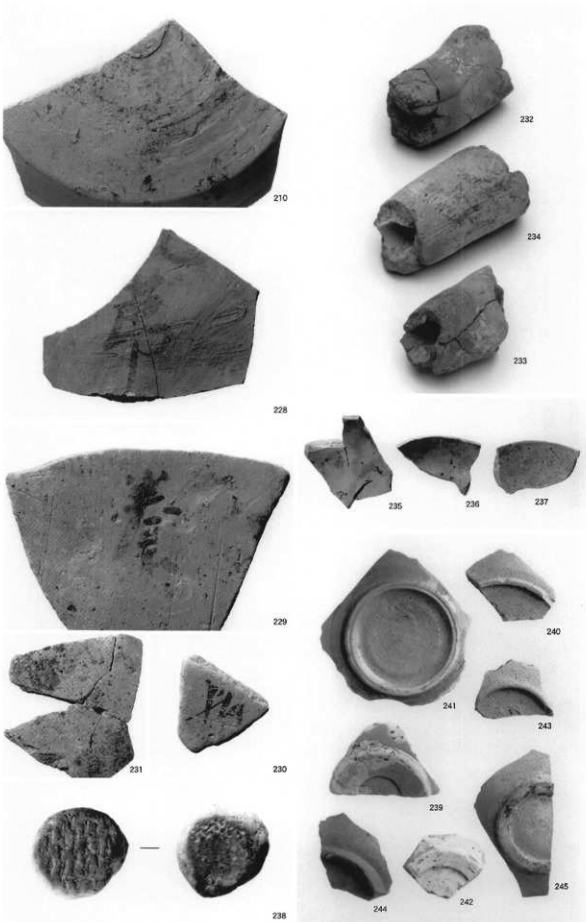

226

223

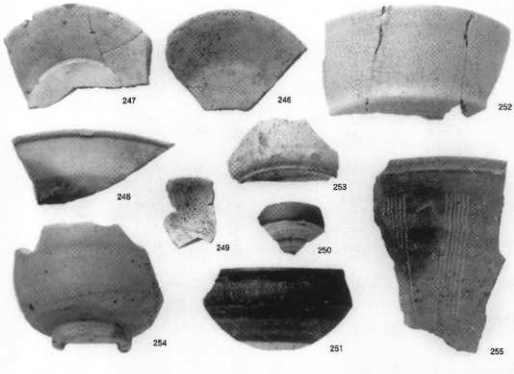
202

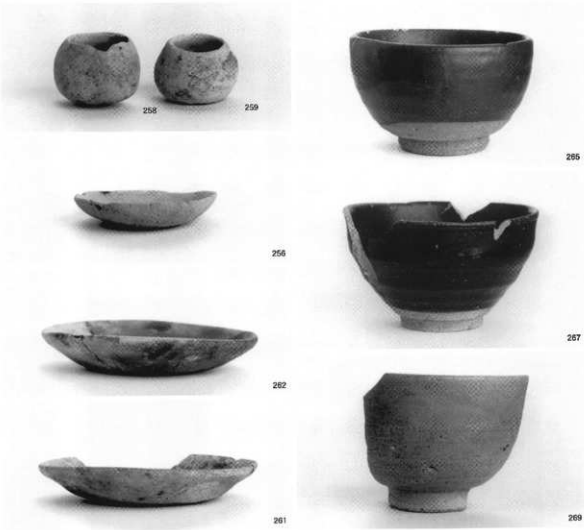
227

SK46出土土器3



墨書土器・土製品・その他の平安時代の土器





桃山・江戸時代の土器類 1

270

273

277

275

279

294

299

300

303

305

307

315

321

321底部

325

319

346

345

337

338

341

329

339

334

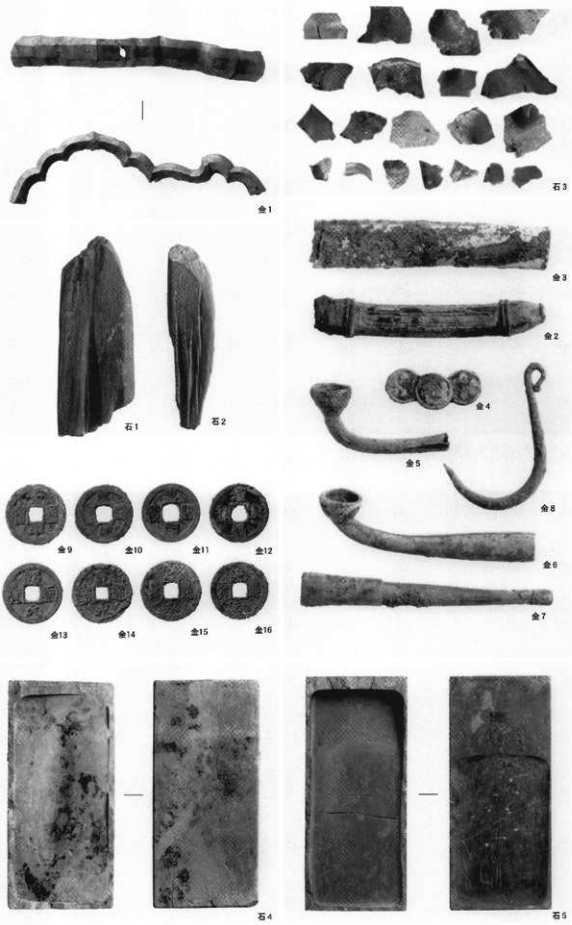
333

335

342

343

図版19　平安宮左兵衛府・侍従所跡　遺物



金属製品・石製品

図版20　中臣遺跡85次調査　遺構

1　調査区南半全景（北から）

2　土坑15（北西から）

1　竪穴住居２（北北東から）

2　竪穴住居２床面土器出土状況１（北西から）

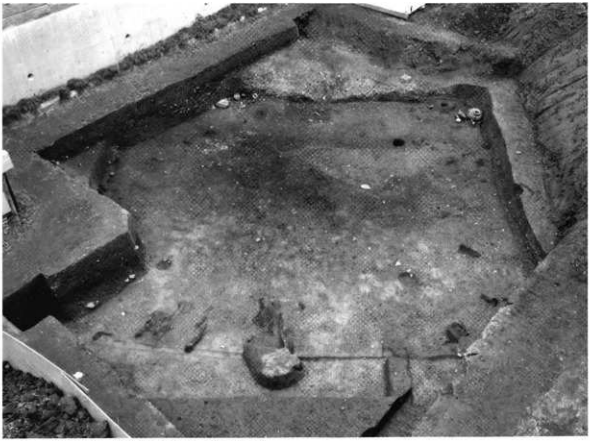
3　竪穴住居２床面土器出土状況２（南東から）

1　竪穴住居11焼失状況（北西から）

2　竪穴住居11完掘状況（北西から）

1　竪穴住居11床面土器出土状況（南東から）

2　竪穴住居11主柱穴と中央土坑（西北西から）



3　調査区北半　竪穴住居14全景（北西から）

1　土坑45と竪穴住居14東隅遺物出土状況（西南西から）

2　竪穴住居14東隅遺物出土状況（北西から）

3　竪穴住居14南隅遺物出土状況（北から）

4　竪穴住居14白色粘土出土状況（南東から）

1

2

5

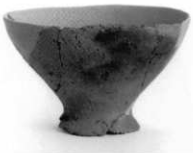
7

6

8

土坑15・竪穴住居２・竪穴住居11出土土器

19


44

23

56

28

57

29

58

竪穴住居14埋土出土土器

61

62

63

64

65

68

69

72

竪穴住居14床面出土土器1

74

73

75

78

76

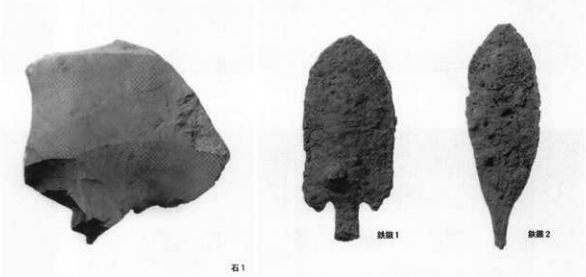
80

77

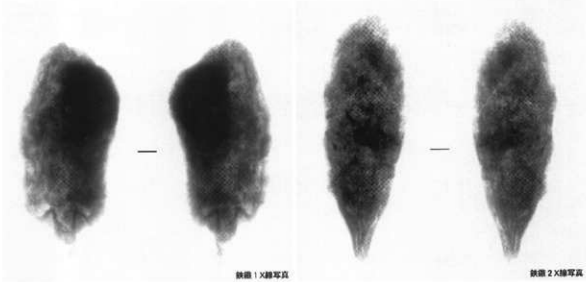
82

竪穴住居14床面出土土器２

石2

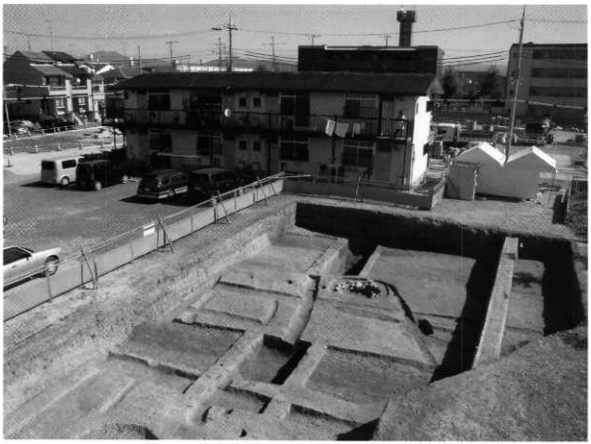


石1　　鉄鏃1　　鉄鏃2



鉄鏃1X線写真　　鉄鏃2X線写真

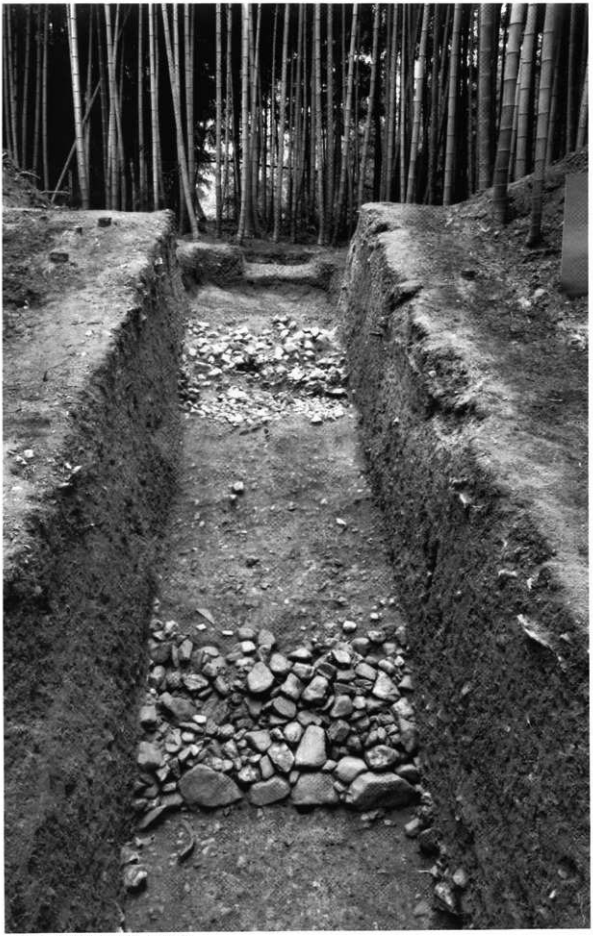
石製品・鉄製品



1　調査区全景（南西から）

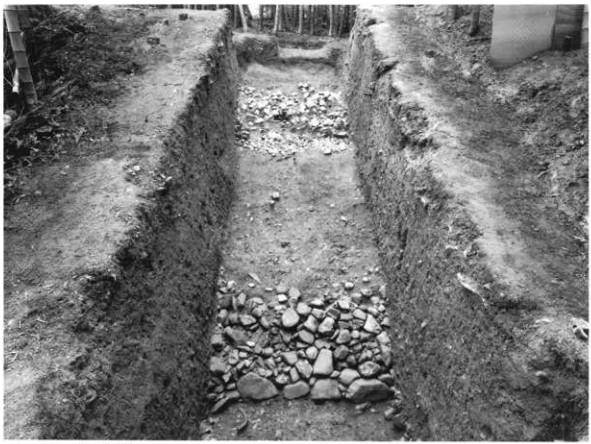
2　堰3・石組遺構4（南から）

3　水路5（南から）



Ⅰ区　転落石検出状況（西から）

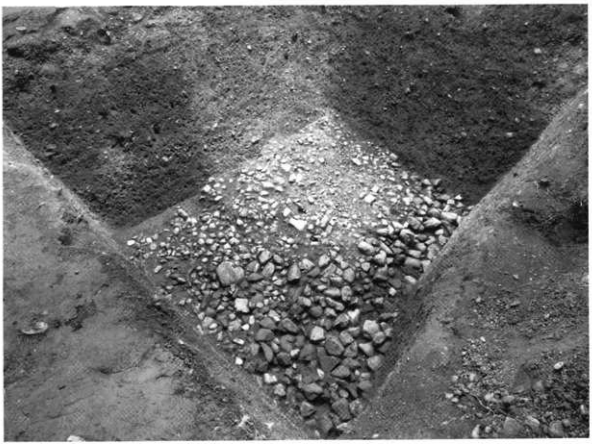
図版32　寺戸大塚古墳　遺構



1　Ⅰ区　葺石検出状況（西から）

2　Ⅰ区　墳頂部撹乱状況（北西から）

1　Ⅰ区　拡張区全景、土坑２検出状況（西から）



2　Ⅱ区　葺石検出状況（南西から）

京都市内遺跡発掘調査報告
平成21年度

発行日　2010年3月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/
印　刷　三星商事印刷株式会社